

---

# ものぐさな賢者

クロコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ものぐさな賢者

### 【Nコード】

N6788X

### 【作者名】

クロコ

### 【あらすじ】

『龍玉』。それは人族やエルフ族、獣人族など様々な種族が住む、龍神が創ったとされる世界。オクトはその世界で『混ぜモノ』と呼ばれる忌み嫌われた存在だった。

異世界だけど前世の知識を持つオクトが、その知識を使って平穏に生きる為に努力する話です。

12 / 15 幼少編が終了しました。

## 序章

「いやあああああああ」

甲高い叫び声を聞いて、私の意識は覚醒した。

その声は何処までも悲痛で、ただただ悲しいと訴える。この声が聞こえるまではずっと私の意識はふわふわとしていて、まるで夢を見ているようだった。頭は霞がかり、苦しみも悲しみもなにもなかった為、こんな激しい感情が生まれたのは初めてだった。……いや、本当に初めてか？

以前もこんな感じで絶望した事なかっただろうか。一気にその声に引つ張られる形で目が覚めた私は、色んな事を忘れてしまっている気がして混乱した。

そもそもここは何処で、自分は。

「オクト、どうしたんだ?!」

部屋の中へ、黒髪の男の子が飛び込んできた。

ああ、そうだ。彼は自分の兄のような存在のクロだ。そして自分は、オクトだ。

「オクト。だいじょうぶか？オクト、しっかりしろ。オクトっ!!」  
クロに肩を掴まれ揺さぶられると、悲痛な悲鳴は止まった。……

違う。悲鳴の出所は、自分だ。止まったんじゃなく、止めたのだ。

「ク、クロっ!!」

ぶわつと浮かぶ涙の所為で、クロの顔が歪んだ。

さつきまで確かに苦しみも悲しみもない世界にいたのに、今は寂しくて仕方がなかった。感情の赴くままに小さなクロの体にしがみつく。そうでもしなければ、自分が壊れてしまいそうだった。

「クロ……クロっ……クロお……」

「いつからオレの名前言えるように……。そんなことより、どうしたんだよ。そんなに泣いて」  
分らない。

ただ悲しくて、悲しくて仕方がなかった。軽いパニックを起こしている私には、ただ泣くことしかできなかった。

「ノエルさんはどこいったんだよ。オクトがこんなたいへんなのに」  
ノエルさん……。

ふとそれが、自分の母親を示す名前だと分かった。それと同時に、何故こんなに悲しいのか思い出す。ふわふわと眠っていたはずなのに、自分の中にはちゃんと答えが詰まっていた。

「クロっ……。きえたの。ママがきえたの」

それは自分を捨てたとか、そういう意味ではない。文字通りこの世から消えたのだ。もう二度と会う事はない。それを本能的に私は知っていた。

「クロっ、クロっ……。あああああぁあつ!!」

苦しくて、悲しくて、寂しくて。それが痛くて仕方がない。背中をさするクロにしがみつき、力の限り泣き続けた。

こうして私は母親の死と引き換えに、この世界に生まれ落ちた。

## 1 - 1話 現状把握中な異世界人？

この世界は、龍神が作られた世界だ。名前を『龍玉』と呼ぶ。意味は龍の宝……まんまだ。

そしてこの世界はいまだにそんな神話が生きており、生き神が住んでいるらしい。らしいというのは、一般庶民は神様にあう事が出来ないからだ。会えるのは王族のみ。一般庶民がもしも願い事があるならば、神殿に行く必要があるそうだ。

自分という意識がはつきりしてから、私はずっと情報を求めた。そうでなければ狂ってしまいそうなほどに私は混乱し、知識に飢えていた。そしてさまざまな情報を聞いていくうちに自分の中にある仮定ができた。

「私って、もしかして前世が異世界人なんじゃ……」

確かに私にはオクトとしての数年間の記憶はある。母親と一緒に旅芸人の一座に身を置いており、時折見世物として舞台に立ち歌ったりしていた。夢見心地で少し頼りない記憶だが、間違いなく自分のものだ。

それと一緒に、今は別の記憶が私には存在した。その記憶の持ち主がどんな人物だったのかは分からないけれど、オクトでは知りえない膨大な記憶で、私の人格は確かにその記憶がもとに形成されているように思う。逆にいえばオクトの記憶だけでは人格形成が出来ると思えないほど、経験も知識も何も詰まっていなかった。

オクトではない方の記憶では『日本』と呼ばれた国に住んでいた。子供は皆学校へ通うようで、私もまたそこに通っていたらしい。この世界ではほとんどの国が、金と才能がなければ学校に通えないのだから、そこからまず大きな違いだ。また日本ではあまり宗教は信

じられていなかったように思う。少なくとも一神教な国ではなかった。

もしかしたら私が知らないだけでこの世界のどこかにある国なのかもしれない。最初はそう考えもみた。それでもなお異世界ではないかと思っただけは、日本には『人族』しか知的生命体は存在しない事だ。

「その知識で行くと、自分を全否定だもんなあ」

龍玉には、『人族』を含め、様々な種族が住んでいる。大きな割合を占めているのは、『エルフ族』、『獣人族』、『翼族』、『魔族』、『精霊族』だ。ただし獣人族は中でもさらに細かく分類される上、少数民族は星の数だ。

そして私は『人族』と『エルフ族』と『獣人族』と『精霊族』の血を持った『混ぜモノ』と呼ばれる存在だった。『混ぜモノ』は2種以上の血が混血したものであり、忌み嫌われる存在だったりする。というのも、種族が違えば成長も違うわけで、『混ぜモノ』はどう成長するか分からないからだ。

初めて聞かされた時は、何だそれ。生まれは選べないしいきなり迫害って酷くない？と思った。どうやら日本という国は身分というものがほぼない状態で、迫害というものは悪として認識されていたようだ。しかしよくよく理由を聞くと、嫌われる理由がよく分かった。『混ぜモノ』は成長度合いも寿命も知能も魔力も未知数なのだ。つまり産まれて一週間で成長きり死んでしまう例もあれば、百年たっても赤子のままでその後いきなり成長したということもある。魔力や知能が異常に高い事もあれば、その逆もある。今まで普通だったのに、いきなり老化スピードが上がったりと、予測がつかない爆弾みたいな存在なのだ。

異常な成長は病気ではないので他人にうつったりはしない。しかし日本ほど治安が良くなく、必ず子供が成人できるとは限らないこ

の世界では、次世代に残すべきではない血なのだ。だから忌み嫌われる。

私の場合は、どうやら体は『人族』のスピードで成長したが、知能の方はいつまでも赤子と大差なかったらしい。まともに言葉を話す事も出来なければ、日常生活もままならないレベルだったそうだ。それが突然一か月前に『精霊族』と『獣人族』のハーフだった母親の死をきっかけに、知能および精神が急激に成長したのだ。それも成長度合いが今度は肉体を追い越しているのだから、他人からしたら気味が悪いだろう。忌み嫌われるのは、理解できないからという事も含まれるのかもしれない。

それでも今私が死んでいないという事は、『混ぜモノ』だろうと殺してはいけないという倫理がこの世界にも存在するらしい。

「かといって、今更演技してもなあ」

日本人は空気を読むのが上手い。空気の読めない人をKYなんて呼ぶ単語ができるほどに普通のスキルだ。しかし状況が分からない状態ではその能力の発動は無理だった。結果、私は旅芸人一座の間からも少し浮いてしまった状態である。

今更子供ぶったところで、余計に気味悪がられるだけだろう。かといって逆にペラペラと年相応ではない言葉をしゃべっても気味悪がられそうなので、今のところ無口キャラで通している。

では今後楽に生きるにはどうしたらいいのだろう。そこで将来的に迫害されない為、『混ぜモノ』であることを隠しておけばいいんじゃないかと考えた。しかし現実はそのなりに甘くはなかった。『混ぜモノ』には大きな特徴として、顔にあざがあるのだ。かく言う私は、目じりに隈のようなあざがあり、それがばっちり身分証になっている。

隠すためにはお面をかぶるか、フードで顔を隠すしかない。その格好を想像してみたのだが、……混ぜモノでなくても気味悪がられそうなくらい怪しい。

本気で生きにくい世の中だ。しょっぱすぎる。少しぐらいグレてもいいレベルだと思う。

「オクト、だんちよーがあそんできていいって」

そんな中でも、私を恐れない子供が一人いた。しかも精神が異常に成長してしまった今でも、年齢的には僅かに年上であろう彼は、私を妹のように扱う。

「クロ」

テントの外から顔をのぞかせたクロは私を見るとぱっと笑顔になり駆け寄ってきた。ちなみに今の私を普通の子供のように扱うのは、彼の母親と団長だけである。まったくもって希少価値の高い子供だ。「きょうはビラくばれば、あとはあそんでもいいんだって。オクト、いこう?」

につこりと邪気のない笑顔で私の手をつかむと、クロはずんずんとテントの外に進もうとする。

「クロ、待って。まだナイフ磨けてない」

この一座に身を置く為には働くしかない。今までは母親が働き、自分は舞台で見世物になっていればよかったのだが、母親が居なくなつた今、雑務などをしなければ置いてもらえそうもなかった。『混ぜモノ』は確かに珍しいが、世の中にいないわけではないので到底目玉にはなれない。

とにかく使える人材だとアピールが必要だった。

そんなわけで、私は現状把握しながら、団員の道具の手入れを日々行っていたりする。

「そんなの、アイリスのしごとだろ。オクトがやるひつようないよ。母さん、じぶんのしょうばいどうぐをちゃんとかたづけられないのは、プロしっかくって言ってたよ」

「駄目」

私はきっぱりというと首を振った。確かにそうかもしれないが、



頼まれたものを放棄すれば、今後どんな嫌がらせを受けるか分からない。あいにくと私は格闘技のプロでもなければ、暗殺スキルとも持っていないイタイゲな子供だ。殴られれば、本気で死にかねない。

そこで異世界とはいえ、前世の記憶を持ち合わせている自分が考えたうえで結論は。

「長いものには巻かれた方が安全」

「ながい……まかれる？」

繰り返すクロに私は頷いた。

特に大きな害でないならば、甘んじておいた方が今後の為だ。上手い事動きまわれれば、とりあえずは痛い事もないし、最低限の人権は守られるだろう。

「よくわかんないけど、ならオレもてつだうよ」

ぺちよりと地べたに座り込むと、クロは私が使っていた布を取り上げ、刃を磨き始めた。小さな子供に手伝いをさせて、万が一刃物で怪我をされては困るのだが、クロは結構頑固だ。一度決めたらたから終わるまでずっと手伝うだろう。

「ありがとう」

「おれがおにいちゃんだから、オクトをまもるのはあたりまえなんだよ」

気にするなど、小さな手で私の頭をわしわしとかき混ぜる。これは彼の母親がよくやる行動なので、彼なりの愛情表現なのだが、私の髪の毛はぐちゃぐちゃになった。ちよつと有難迷惑だ。

私もさっさと終わらせる為に、切れ味が悪くなっているナイフだけをオイルをかけた砥石で研ぐ。この方法は前世の知識にはなかったので、アイリスに一通り教えてもらったものだ。赤ん坊から脱出したばかりの脳は簡単にその技術を吸収してくれた。

ありがたいけれど、……自分って結構器用貧乏かもしれない。

「できた」

最後の一本についたオイルを綺麗にふき取って、道具箱にしまつと、私は額の汗を服の袖で拭った。子供の力だと、この程度でも結構重労働だ。

「よし。じゃあ母さんのところに、行くぞ」

何で？

確かビラを配りに行くんじゃないかなかっただろうか。首をかしげると、クロは私の腕を掴んで立たせた。

「そんなよごれたなりだと、この町のれんちゅうになめられるだろうなほど。」

確かに、私もクロも汚れてしまった。クロは私の手を握り今度こそテントから外へ向かった。

私が身を寄せている旅芸人一座は、テントを張って生活する。さつき私がいいた場所は道具がしまつてある物置のような場所だ。

寝る場所は下っ端は基本一つの大きめなテントで雑魚寝だが、一座の中でも稼ぎ頭たちは小さいながらも自分の部屋をもらえる。もしくは都会で実入りがいい時は、稼ぎ頭たちだけは宿に泊まっていた。そしてクロのお母さんは剣の達人で剣舞踊や模擬戦などが好評の稼ぎ頭だった。私は本来雑魚寝なのだが、クロのお母さんが自分のママと友達だった為、一緒に部屋に置いてもらっていた。

「母さん、よごれた。たおるない？」

「あら。派手に汚したわね。クロは上着も着替えちゃいなさい。」

オクトは、とりあえず顔洗うだけでいいわね」

「すみません」

部屋には黒髪の女性がいた。仕事道具である剣を磨いてたらしい女性はクロを見ると笑みを浮かべた。目元がきつめの美女だが、笑うと少し可愛らしい。クロに続いて部屋に入った、私は頭を下げた。

「これはオレらがわるいんじゃないんだからな。アイリスのやつが、オクトにしごとをおしつけるからいけないんだ」

「違う」

私はクロの後ろで首を横に振った。

私は基本雑用係だ。仕事道具を片づけるのも仕事である。まあナイフを研ぐまでやるのはやり過ぎというか、やらせ過ぎかもしれないが、依頼があつたのならば仕方がない。

それに仕事があるから私はここに置いてもらえている。ならばアイリスを恨むのはお門違いだ。

「ちがわない。オクトは人がよすぎるんだ」

「それも違う」

「はいはい。分かったから、喧嘩は後にしてクロは早く着替えなさい。濡れタオルは母さんが用意しておいてあげるから。それと、オクト。今のアイリスじゃそんなに売れっ子にはなれないから、媚売ってもしかたないわよ。売るなら、もっと上の人に売るか青田買いをしなさい」

それもどうなんだろう。

私は困ったように首をかしげた。そもそも私をいじめたりしそうなのは、アイリスみたいな中途半端なレベルの人だ。売れっ子は逆にアイリス辺りをこき使う。なのでアイリスの不興を買わないのは対策としてはあっていると思う。

確かに売れっ子のお気に入りになれば、うかつに手は出せないだろうけど。

しかし売れっ子の役に立てるような事が今の私にできるとは思えない。もう少し大きくなれば力仕事もできるのだけど、いかにせんこの小さな体ではできる事の方が少なかった。

青田買いの方だって、もう少し知識が増えなければ見抜く事は無理だ。

私はぐるぐると考えながらクロのお母さんである、アルファさんについていく。アルファさんは洗濯場で水をもらうとタオルを濡らし、私に差し出した。

「ほら、眉間にしわ寄せてないで、早く拭いちゃいなさい」

「ありがとうございます」

「これぐらいいいわよ。あ、ちなみに私はすでにオクト鼻屑だから、媚売っても無駄だからね」

ああ、そう言えばアルファさんも売れっ子だっけ。最終的にはそこにたどり着きそうだったが、まだそこまで考えていなかった私は、先にくぎを刺されてしまった。

「仕事ならいくらでもあげるわ。でもそんなのより、技を盗みんで色々考えなさい。その方が、いじめられなくなる為の早道よ」

それはつまり売れっ子になれという事……。つまり無理という事です。分かります。

私は理解できないふりをして、タオルで顔をぬぐった。

いう事は無茶苦茶だが、アルファさんには感謝だ。もしも濡れタオルを用意してもらえなければ、私は明日の水浴び時間まで汚れたままだった。私だけでは洗濯場でタオルなんて貸してもらえないだろうし、混ぜモノというだけで、井戸を借りることも難しかっただろう。

つくづく運のない生い立ちだ。

部屋へ戻ると、クロはすでに服を着替え終わっていた。アルファさんからタオルを受け取り顔をふく。

「そうだ。オレたち、これからビラくばってくるから。で、その後あそんでくるから」

「ふうん。だったらもっと、派手な服着て行きなさいよ。折角可愛い顔に産んであげたんだから、もっと活かしなさい」

「ええつ。そのあとあそぶから、よごすとおこるだろ」

「汚さないように遊ぶの。汚すことするなら一度戻ってきて汚してもいい服にしなさい。ちゃんと看板になる事も一流の芸人よ」

そう言っただけアルファさんは水兵みたいなセーラー服型の舞台衣装をクロに渡す。襟の部分がキラキラとラメっついていて遠くからでも目立ちそうだ。そしてさらにもう一着子供用の服を取り出した。

「はい。オクトもこれに着替えなさい」

私は逆にピンクのセーラー服だ。クロが青だから反対色を持ってきてくれたんだろうけど、ちょっとためらう。ちなみにクロが短パンで、私がスカートだ。年齢考えれば微笑ましい感じなのだが、前世の記憶が可愛らし過ぎるそれに躊躇いを覚えさせる。

……これはほぼ、どこの美少女戦士の恰好ではないだろうか。

コスプレの四文字が頭をめぐる。

「私は」

「着替えなさい」

「はい」

似合わなかったら、逆に道化っぽくて看板になるかもしれない。  
うん。前向きに考えよう。

これも仕事とわりきり服を脱ぐ。そう言えば前世の記憶がある割に、裸になることにはあまり抵抗がない。クロとは兄弟みたいなものだし、そもそもクロは六歳だ。恥ずかしいと思える年齢でもないからかもしれないけれど……。

私の前世って、性別どっちだ？

一般常識的な記憶は存在するのだが、どうも当の本人の事になるとかなりあやふやで欠如が多い。もしかしたら今は生物学的には女だが、前世が男だった可能性もある。

とはいえ、前世がどちらでも関係はない。混ぜモノである自分には、結婚とかまずあり得ない行事なので、性別とか考えるだけ無駄だ。

「うん。さすが親友の娘ね。かわいすぎるわ。さあ、行ってきなさい！」

パンと背中を叩かれると、そのままテントの外に押し出された。下手に鏡を見て行く気が失せる前なのである意味良かったと思うしかない。うん、知らぬが仏作戦だ。

「オクト、いこうぜ！」

クロに急かされ、私はコクリと頷いた。

自分の場合、まだ幼すぎる事もあって、買いだしなどの町に出る仕事はまわってこない。ここ一カ月間は休みがなかった事もあって、町へ出るのは久々だった。なので行きたくないわけではない。

「このまちは、ふんすいがあるところに、人があつまるんだってさ。」

へたに店の前とかでビラくばると、おこられるからそっちでくばろう」

そついうものなのか。

ビラくばりと言うので、駅前テイッシュくばりが頭に浮かんでいた。大抵そついうのは商店街で行われていたように思う。というのも不特定多数の人が流れていき、比較的多くの人にもらって貰えるからだ。

首をかしげると、クロがさらに説明してくれた。

「みせがいっぱいあるとこでえいぎょうするには、なんかえらい人にし……しんせい？しなないとイケないんだって」

「偉い人って？」

「わかんねえ。いいじゃん。ふんすいとこならおこられないし」

まあ、その通りだ。ただ噴水のところが公園みたいな役割だとすると、こつちから人を集めるようにしなれば中々終わらないかもしれない。

噴水を目指して歩いて行くと、商店街にでた。商店街は先ほどまでと少しだけ雰囲気が変わり、地面がタイル張りになった。またレングで作ったような店が立ち並び外観が統一されている。まるで中世ヨーロッパだ。そこを時折馬車が走っていく。

「クロ。ここは何の店があるの？」

馬車はバスや電車のような役割をしており一般客も使うが、こつちいった店まで乗りつけて来るのは貴族や金持ちだけだ。つまりはそついった客に対応した店があるという事になる。

「んーっと、そこがレストランで、そつちがざっか。あとまほうぐの店とかほうせきの店とか、ぶきうつてるところもあつたはず」

「ふーん」

まるでRPGな世界だ。魔法具の店とか、武器を売っていると、子供が入っても大丈夫なら一度見てみたい。

この世界は、日本ではゲームにしか出てこないファンタジーな種族がいるだけあって、魔法というものが存在した。学校で学び資格をとったものを魔術師と呼び、そうでない者を魔法使いと呼ぶそうだ。魔法使いも試験さえ通れば魔術師と名乗れるのだが、なかなかその試験が難しいらしい。

ちよつとした魔法具なら一般人も使えるそうなので、機会があれば触ってみたいと思っていた。所詮は二次元に憧れたミーハー魂だけど、魔法はロマンだ。仕方がないと思う。

「あと、くすりの店と……えっと。そうだ。いかいやがあるってだんちよーいつてたな」

「イカイヤ？」

何の店だろう。

あてはまる字も思い浮かばず首をかしげる。イカ嫌？以下胃や？  
「いかいの物、えっとここことはちがうせかいでつくられた物がうられてるんだって」

「……そんなのあるの？」

つまり、『いかいや』というのは、『異界屋』ということだろう。文字があてはまった瞬間、落雷を受けたような衝撃が走った。

「うん。たまにコンユウコにながれつくってさ。きほんつかい方わからなくてガラクタだけど、マニアが高くかうんだって」

異界。私の妄想だけじゃなくて、本当にあるんだ。

ドキドキと心臓が脈打つ。その異界は、私が知っている所だろうか。この頭の中にあるのは妄想じゃないと教えてくれるのだろうか。不安と期待がぐるぐると渦巻く。

「オクト、あとで行ってみる？」

私の動揺がクロに伝わったらしい。

それでも私はクロの言葉に、私は一も二もなくうなづいた。





噴水がある広場は、確かに人は多かった。

いい憩いの場であり、旅行者にとっては観光の名所なのだろう。広場は噴水を中心に円形になっており、下のタイルが魔法陣のような幾何学模様となっている。原理は分からないが、この噴水は魔法が関わっており、シンボルのようなものになっているのだろう。

周りには出店もあり、とてもにぎわっている。……ただし、私の周り以外では。

「どうみても避けられてるよね」

噴水に腰かけた私の周りには、誰もいない。さつきまでは確かに獣人族のカップル達がイチャイチャしていたはずなのに。

私はクロと半分にしたビラをパラパラめくりながらため息をついた。さつきから一枚も配れていないビラが憎い。それにしても混ぜモノってのはどれだけ嫌われているのだろう。特にスリをしようとかそんな邪念は一切ないのに、近づけば逃げられ、普通に歩いているだけで大きく避けられる。

まだ一座の方がマシだ。少なくとも蜘蛛の子散らすように私から逃げる事はない。

「結構かわいらしい外見してると思うんだけどなあ」

噴水が止まるタイミングで中を覗けば、蜜色の髪をおかつぱくらしいに切りそろえた子供が水に映った。耳は獣人族のように大きく、エルフのように先がとがっていてぬいぐるみのようなようだ。青色の瞳は大きく、その所為で人形のように見えた。右目の目じりにある青黒い色をした痣さえなければ、自惚れではなくマジで美少女を自称したっていいと思う。

外見はイタイゲな幼児なのに、混ぜモノってだけで避けられるっ

て、世知辛い世の中だ。でもまだ石とかぶつけられるわけではないし、イジメレベルで考えれば、まだいい方かもしれないと自分を慰めてみる。

「オクト、なにさぼってるんだよ」

ぼんやりと再び噴き出した噴水を見つめっていると、クロが腰に手をやって私を睨みつけてきた。自分だけ働かされていたのだから怒るのはわかる。

と、言われてもなあ。

「受けとつて貰えないから」

「あつ……」

クロはすぐに理由に思い当たたらしく、顔を歪めた。それは同情するものでもはなく、悔しそうな表情だった。

「オクトはこんなにかわいいのに」

うん。それは将来、本気で好きになった人に言おうね。たぶん母親が影響していると分かってはいるのだが、私としてはクロがフェミニストどころではなく、タラシに成長しないか心配だ。

「クロはどう？」

「オレもほとんどもらってもらえなかった」

クロの手の中にもまだまだまだビラは残っていた。結構、広い広場だ。人がこつちによって来てくれない限り、配るのは大変だろう。

そこでふと私は気がついた。

……そうか。寄つて来てもらえばいいのか。

「クロ、今から私がいう言葉を大きな声で言って」

私はクロの耳元に口を近づけると、こつそりと今思いついた事を伝えた。まわりに人がいないのだから普通に喋ったって構わないだろうけど、なんとなく打ち合わせはこつそりした方が仕事っぽい。

それに仕事と割り切らなければ、これからする事は凄く目立つので恥ずかしいのだ。

「わかった。でも、オクトはへいき？」

「うん。早く終わらせよう」

気遣うクロに、私は頷くとピラをすべてクロに渡した。

そして私は体から力を抜き、目を閉じる。大丈夫。できるはず。というかやるしかない。

「さあさあ、みなさん、おたちあい。ごようといそぎでないかたは、きいといで」

子供っぽくないクロの口調に、人がいつせいにこっちを見たのが気配で分かった。

「とおでのやまごしかさのうち、きかざるときはものの黒白、ぜんあくがとんとわからない」

こちらへやってくる足音が聞こえ、私の耳が震える。獣人の血のおかげで、私の耳はとても性能が良かった。

「さておたちあい。ここにすわるは、あわれなまぜモノのむすめ」  
ドキドキと心臓が五月蠅いが、まだ動かない。できるだけ人形のように見えるように表情を出さないように気をつける。

「まぜモノともうしましても、ただのまぜモノとはちがう。母がしぬまでことばをはなせず、母がしんでもその口からでは、いかいのうたのみ。せんとうたをしろうと、なにもわからぬにんぎょうのうた。しかしなぜだかみにこちよい。さーて、おたちあい。さいこのこうえんせまる、『グリム一座』！ほんじつしゅっちようこ  
うえんだっ！」

よく言った。

クロにお願いした言葉は長い上に喋りにくいものだったはずだ。それでもクロは一言一句間違えず喋りきった。ここから先は私の仕事だ。

ぱっと目を開ける。思った以上にまわりに人の輪が出来ていた。しかしそれが何なのか分からないといったように、私は表情を動か

さないように気をつける。そして息を吸った。

『今、私のー、願ーいごはー、叶うならば、翼がほしーい』

私は精霊譲りの透き通るような声を披露した。内容は合唱コンクールレベルの歌だけど、日本語だ。聞いたこともない言葉はきつと神秘的な感じに聞こえるだろう。

特にこの世界は魔法がある為か、電気というものがなく、テレビどころかラジオもない。またCDやカセットテープどころか、レコードすら発明されていなかった。つまり娯楽というものが生演奏のみなのだ。そしてそれが聞ける場所は限られている。無料で変わった歌、しかもきれいな音色で聞けるなら、ホイホイ人が集まってくるはずだ。

案の定、歌が聞こえ始めると、どんどん人が集まってきた。そこへすかさずクログが、ビラを配っていく。これなら、ビラがはけるのも早いだろう。

『父さーんが残したー、あつーい思い。母さんがくれたー、あのまなざーし』

それにしても、千の歌は言いすぎたなと少し反省する。合唱コンクールの歌意外には、流行りの歌や童謡、それらがなくなると、アニソンや、本家本元歌う人形の歌しか知らない。ネギを振り回す人形の歌は中毒性はあるが、どうなんだろう。人前で熱唱すべき歌だろうか？

いやでもそれはアニソンも同様だ。超能力者や宇宙人、未来人と友人の少女の歌はまだいいとしても、オタクな女の子が織りなすアニメの歌は、ちょっとアレだ。テンション高すぎてあまり手を出したくない。……というより、それを完璧に覚えている前世の自分に絶望しそうだ。うん、前世は前世。深く考えてはいけない。

『どーかとうしてくだしゃんせ。御用のないものとおさせぬー』

段々アニソンORボーカロイドの歌に近づいてきたぞという辺りで、クログの持っているビラは全てはけた。その事にほっとする。良

かった。本当に、良かった。

「では、しゅっちようこうえんは、ここでお待ちます。かのじょのうたがきになるかたは、ぜひ『グリム一座』までおこし下さい」  
ぺこりとクロがお辞儀をしたところで、私も歌うのを止めた。

久々に大きな声を出し続けたので喉が痛い。しかしそれをおくびにも出さず、私は再び噴水に腰かけ目を閉じた。ゼンマイが切れてしまった人形をイメージして体の力を抜く。

しばらくがやがやしていたが、それでも徐々に人の気配がなくなっていく。動かなくなってしまうえば、何にも面白くないし、私は混ぜモノだ。人がいなくなるのは早いだろう。ほとんど気がなくなつたところで、私は目を開いた。

パチパチパチ。

突然拍手がなつて、私は目を瞬かせた。

「凄いね。楽しかったよ、ありがとう」

キャベツのような緑の髪をした少年がにっこりと笑いかける。どうしていいのか分からず、私は曖昧に笑った。混ぜモノに笑いかけるなんて、変な奴だ。

「是非公演を見に行かせてもらおうね」

その言葉に、私は頭を下げる。クロに話させた設定だと、私は歌以外話せないことになっている。まだお客がいる以上、その設定を崩すわけにはいかない。

少年は動かない私の近くまで歩み寄ってきた。近くで見ると瞳も同じく、キャベツのような色をしている。顔はパーツの一つ一つが整っており、まるでファンタジーの権現のような美少年だとぼんやり思う。

「でも異界の歌はあまり披露しない方がいいよ。悪い人に捕まっちゃうから」

耳元でささやかれた言葉にどきりとする。私が危うく声を出しか

けた所で、クロが私と少年の間に入った。

「おきやくさま。つきはいちぎのぶたいでのごうえんがありますので、ぜひきてください」

「うん、そうさせてもらう。じゃあね、ドールちゃん」

少年は手を振ると、さっとその身をひるがえした。

一体なんだったのだろう。……年齢の割に落ち着いているし、言葉も綺麗な発音だ。なまりを感じられない。お忍びできた貴族かなにかだろうか。

それにしても疲れた。

私は、今度は演技なしでぐったりと噴水にもたれた。

「オクト。すごいで。ぜんぶなくなった」

「うん」

興奮気味なクロに、私は相槌を打つ。それにしても、ここまで上手いくとは思わなかった。私はほっと息をはく。

それと同時に先ほどの声をかけてきた少年が脳裏に浮かんだ。彼は何故、あの歌が異界の歌だと信じたのだろう。それとも少年の言葉は演技と思った上での冗談だろうか。

まあ関係ないか。私は気を取り直すと、いまだ興奮気味話すクロに手を伸ばした。

折角町に出てきたのに、このままじっとしているのは、時間が惜しい。

「異界屋にいこう?」

## 2 - 1話 小さな賢者様

異界屋は商店街でも少し奥まった場所に存在した。

店先には共通語である漢字ような形の龍玉語と、今滞在しているアールベロ国の言語を併記した看板が飾ってある。ただし残念な事に私は文字を書いたり読んだりできないので、たぶん異界屋と書いていあるのだろうと想像するしかない。

しかしそれは決して私が混ぜモノだから知識不足というわけではないと思う。多分この世界の識字率は高くないんじゃないだろうか。商店街を歩いたが、店先の看板には必ず分かりやすい絵が描いてあり、場合によっては絵しか描いてない所もあった。

「い、か、い、や。うん。ここだここ。だんちよーがいつてたの」「クロって、文字読めるの?」

隣で看板を見つめるクロを見て驚いた。

「おう。母さんがおしえてくれたんだ。じはおぼえといった方がとくだってさ」

確かにそうだけど、それで教えられるって、凄くない?

アルファさんって剣の達人だし、一体どういう人何だろう。まあ、一座にはわけあり系の人も身を寄せていたりするらしいので、きつとそういった類なのだろうけど。

異界屋はあまり客が入らないのか、とても静かだった。扉をくぐるとカウンターの座ってる猫男がちらりとこちらを見て顔をしかめる。それでも今はお客と商談をしているようで、あえて追い出すところちらへは来ない。

これ幸いと私達はそのまま奥へ進んだ。

棚に並べられたものたちは、新品ではなくどこか破損している事もあれば、汚れてしまっていたりもした。変な形のつばや蛇のよう



なオブジェなど、不思議なものが沢山ある。ただ問題は、そのどれもが私の記憶には刺激をしてこないのだ。簡単にいえば、どれも良く分からないガラクタなのである。用途がさっぱり分からない。

ここから導き出される可能性は3つ。

? 異界といっても私が知っている異界ではない、さらに別の世界から流れ着いている。

? ここにあるのは日本以外の国のものであるため、前世の人も知らない。

? 私の頭の中の記憶はただの妄想である。

? は除外してしまいたいが、記憶につながるものが何もなければ、私もそうではない自信がない。

できる事なら、手にとってじっくりと見て考えたいが、? であつた場合、呪いの類でないと限らない。なんといつてもこの世界がすでに、RPGもどきなのだ。装備したら外せないよ的なアイテムだつたらマジ怖い。

「んー……ないな」

店自体はさほど広くはなさそうだ。

少し歩いただけなのに、すぐに行き止まりにきてしまった。それにしても、せめて系統だけでも同じものを固めておいて欲しい。ざっくばらんに置かれているせいで、見落としもありそうな気がする。私はもう一度戻ろうとまわれ右をした。

ビビビビビビッ!!

振り向いた瞬間、突如鳴り響いた音に私はドキリとした。まるで警報機のような音だ。音源の先を見れば、クロが尻もちをついている。

「なにやってんだっ?!」

茫然としているクロの襟元を猫男がつまみあげた。クロの体が軽々と中に持ち上がる。その手には卵型の何かを握っていた。音源はたぶんそれだ。足元にカランと金属製のものが落ちる。

「はなせよっ!!」

「店のものを壊しやがって。ここは子供遊ぶ場所じゃないぞ」

「こわしてねーよ。さわっただけだった」

このままでは、お役所につき出されかねない。

私は咄嗟にクロが持っているそれが何なのか閃くと、足元に落ちた金属を拾った。

「クロ。貸して」

クロが握りしめていたものを受け取ると、穴の部分にフックを突っ込んだ。するとけたたましく鳴り響いていたベルがピタリと止まった。

よかった。上手くいった事にホッと胸を撫ぜおろす。

「……何したんだ」

「壊してない」

私はもう鳴かなくなった防犯ブザーを訝しげな猫男につきつけた。「防犯ブザーが正常に動いただけ。クロを放して」

確かにいきなり音を鳴らしたのは悪かったが、首根っこをいきなりつままれるほどの事ではないと思う。子供だって、混ぜモノだって人権があるのだ。

ブザーを受け取った猫男はとりあえずクロをその場に下ろした。

「いやー、嬢ちゃん凄いな」

先ほどまで猫男と商談をしていたらしい男が近づいてきた。多分魔族と思わしき、紅目の男は私を見下ろした。

「ところで嬢ちゃん。そんな事何処で知ったんだ？」

「えっ……」

何処？

ふと今言った言葉が、本来私が知っているはずのない言葉だと気がついて固まった。正直に前世の話をしてもいいだろうか。いや、駄目だろ。そんな話をして、頭がおかしい人扱いされるの関の山だ。それに異界の歌を歌った後に言われた『悪い人に攫われちゃう』の言葉が私の中で引っかかる。

というのも本来知っていなければいけない異界屋の店員が、商品の使い方を知らなかったのだ。つまり異界の知識はほとんど知られていないのが現状ではないだろうか。もしそうだとしたら、知っているという事は、その知識だけでもかなり価値があるはずだ。

……危険すぎる。

「……ママが教えてくれた」

私は嘘がばれないようにうつむく。

ママ、勝手に擦り付けてごめんなさい。でも私を守って下さいと心の中で懺悔する。

「混ぜモノの母親が？ 一体、どんな」

「オクトがかなしんでんだからそれいじょうきくなよ。オクトのあさんはしんだんだ」

私の前でクロが両手を広げた。

クロかっこいい。でもクロごめん。うつむいているのは、そういう理由じゃないんだ。ただ、都合良く大人たちも勘違いしてくれそうなので、そのままにしておく。うん。私、悪くない。

「それは悪かった。混ぜモノの子もごめんな。ところで、他には何か聞いていないのかい？」

私は怯えているように見えるようクロの背中にしがみついた。そしてこっそりと、相手を盗み見る。

猫男は毛むくじゃらで、あんまり表情が読めない。魔族の男は笑顔だが、だからっていい人とは限らない。今すぐにも、テントへ戻った方がいいんじゃないだろうかとまわりをうかがう。

「もしもこの後鳴らなかつたりしたら、嬢ちゃんたちが壊したって

疑われるよ？これは永久的になるものなのかい？」

「……電池が切れたらもう鳴らないから」

私はぼそりと付け加えた。

それにしても、凄く嫌な聞き方をする人だ。今鳴るのだから、今後鳴らなくても私たちの責任ではない。それなのにその言い方では、そうではない事になる。今の話を聞いた猫男が、そうやって言いがかりをつけてこないとは限らない。

それに彼はたぶん私たちが、旅芸人でそれほどお金を持っておらず、社会的地位も低いと踏んで発言しているのだろう。衣装を見れば芸人という事は一目瞭然だし旅芸人はそれほど儲かる仕事でもない。それに私たちが子どもであり、私が混ぜモノであるという事も不利だ。猫男とどちらの話を信じると言ったら、まず負けるに違いない。

「電池つてなんだい？」

「……動かす力になる元。頭の部分のねじを外すと中に入っているから」

猫男は手に持っている防犯ブザーをしげしげと眺めた。

これだけ話せば十分だろう。私はクロの服を引っ張った。

「クロ、帰ろう？」

早く帰ってしまった方がいいと、頭の中で警報がなる。すでに自分の生まれからして厄介なのだ。これ以上厄介事はいらぬ。

「嬢ちゃん、待った。折角だからもう少しゆっくりしていかないか？なあ店主」

「ああ。是非そうしてくれ。お菓子もあるぞ」

……それ、人攫いが使う手口だから。私は呆れたように二人をみた。お菓子なんかで釣られるなんて馬鹿、いまだき。

「おかし？」

クロが凄い興味津津という顔をした。そうだよ。クロは私と違って真正正銘、純粋な子供だもんね。しかもお菓子なんてほとんど食べられないしね。

「クロ、駄目」

「でも」

「駄目」

これではどっちが年上か分からないが、私はきっぱり首を振った。

「おいしい話には裏がある」

「おかしにうらがあるのか？」

「あー……お菓子にあるんじゃない」

「ほら持ってきたぞ」

クッキーらしきものがのった皿を持つ猫男の目は糸目だった。たぶんこれが彼の笑顔なんだろう。その笑顔に雑念が見える私は間違っていない。

「あーん」

魔族の男に差し出されたクッキーをパクリと食べたクロを見て、私の顔は引きつった。

「……いくらですか？」

「払えるの？」

「たぶん払えません。」

私は心の中で滂沱の涙を流した。こうなったら頑張って、金持ちになろう。そう決意した瞬間だった。

## 2 - 2 話

さてどうしよう。

店内のど真ん中で話し合いも他のお客の迷惑になるという事で、カウンター横に特設机が設置された。確かに通路の途中じゃ迷惑だとは思うけれど、嘘を付けと声高々に言っただりしたい。そもそも店内は迷惑になるほどの客がいないはず。

「私は全てを知っているわけじゃないから」

言いたい事は色々あだが、それでもこれだけは伝えておかなければと席に座った私は開口一番そう伝えた。というかクッキーを勝手に持ってきたのはそちらなんだから、よく考えれば私たちが気にする必要はない。食べていいと言っておきながら、後からお金を請求するって詐欺だ。犯罪に負けちゃいけない。

「そんなの分かっているさ。嬢ちゃんがここにあるものすべてを知っていたら、それこそ何者だって話だからね。それでも知っている範囲で協力して欲しいんだよね」

協力とか言ってるけど、どうせ強制なくせに。

この魔族、口調は柔らかめだけれど、私たちを逃がすつもりはないというのが節々に感じられる。というのもも入口から通り場所に座らせ、自分が入り口に背を向ける形で座っているのだ。子供の足なら逃げられるはずもないのに、万が一逃げようとした時のためを考えて座ったとしか思えない。用意周到さに本気で腹が立つ。……禿げてしまえ。

「見返りは？」

でも実際これ以上関わったりしたくないので、悪態は飲み込む。必要最低限で取引を終えて、早く店を出よう。

「クッキーもらったよ？」

「それは電池の事を教えたぶん。音を鳴らして店に迷惑をかけた分は、音の止め方と使い道を言った事でチャラ。今は対等」

少々強引だが、それぐらい強気で言わないと、どんどん請求されてとんでもない事になってしまふ。立ち位置が上であればなおいいが、そうでなくても下になつてはいけない。

「面白い混ぜモノだな。よし教えてくれた情報によつては、何か商品をやろう。モノによつてはやれないが」

「くれるモノに得に欲しいものがない場合は？」

「何か欲しくて来たんだろ。それ次第だ。やれないというのは、すでに買い手が付いているものと、使い方が分かっている、高額取引のものだ」

つまり使い方が分かつてさえいれば、高額取引アイテムになるという事だろうか。後は今のところガラクタ。好きにしていいたいという事だろう。

「さっきのブザー」

「あれが欲しいのか？」

アレでも良いにはいいんだけど。私は首を横に振つた。

「アレじゃなくてもいい。アレと同じ世界から来たものが欲しい」

あのアイテムが唯一私の前世を肯定してくれるものだ。誰にも話せない事だからこそ、肯定してくれるものは欲しかった。自分の気がくるつてるんじゃないかなんて、考えずにすむ。

「つまり嬢ちゃん之母ちゃんは、その道具がある世界の事を嬢ちゃんに教えたというわけか」

魔族の言葉に私はコクリと頷いた。

きつと私が欲しがっている理由が形見がわりとか、そんな風に勘違いしてくれるだろう。

「分かった。3つ使い方を教えてくれたら、その中の1つをやるよ」

マジで?!

猫男、いい人だな。

たったそれだけでくれるなんて、太っ腹じゃないだろうか。やっぱり形見攻撃が効いたのだろうか。目が潤んでいる気がするし。

「教える3つにはそのブザーは含まない。店主、そういう事だよな」

「ああ、それはもちろん」

「……分かってる」

そして魔族の男は優しくない。

自分だって、そこまでセコク考えてないから。大げさに取引なんて言っただけ情報の元手はタダなんだし。問題はどうかやって日本のものを探し出すかだ。この店内広くはないが狭くもない。地道に探すと日が暮れる気がする。

「じゃあそれっぽいのを持て来るから、そこで座って、くつろいでいてくれ。なんならジュースもってくるぞ」

「へ?」

「今自分で、どうやって探そうって思っていた。いまどきの異界屋は、ネジとか文字とかで、ある程度は世界ごとに分類されているんだよ」

マジか。

いや確かに。驚いたが、すぐに納得する。

ただ収集するだけでは、異界屋では偽物が多発してしまう。何か分からなければ異界のものなんてアバウトな取引ではギャンブル過ぎる。となれば何か見分ける方法が必要だ。そしてそういう技能があれば、世界ごとの分類とかもしているだろう。

「ふーん。そういえば、なんでいせかいのだってわかるわけ?」

「世界の壁を越えたものは、一定の種類の魔力を帯びるんだ。それを魔術師が見分ける。人為的にはその種類の魔力を帯びさせるのは難しいからね。パチモンもでない寸法さ」



なるほど。

魔術師にはそういった仕事もあるのか。てつきり、RPGよろしく、魔物でも退治したり、王宮で仕えたりしてるのかと思っていた。

「あんたは、まじゅつしなのか？」

「あんたじゃなくて、お兄さんね。そうだよ。異世界のものは新しい技術が多いからね。色々研究させてもらっている」

この魔族の職業は魔術師か。しかも研究という事はそれなりの所に勤めているんじゃないだろうか。

「そついや嬢ちゃんはお母さん亡くなっただよ。お父さんは？」

「……知らない」

そついうと、魔族は口の端を上げた。その表情で背筋がぞくりとする。何今の質問？意図が読めなくて怖いんだけど。

私は魔族から目をそらしすと、店内へ目を向けた。それにしてもこれだけ色々と異世界から流れ着くって、この世界は一体どういう作りになっているのだろう。

「待たせたな。ちょっと見てくれ」

段ボールいっぱい持ってきた猫男は、机の上に3分の1ほど取り出した。

腕時計、コンタクトケース、ドライヤー……分らないのもちらほらあるけれど、これならば大丈夫そう。ただここからが問題である。私がいかにいろいろ知っていると暴露するのはヤバいんじゃないだろうか。

ならば適当に3つ選べばいいのだけれど、教えたところで使えないものでは意味がない気がする。それとも使えないという情報すら彼らは欲しいのだろうか。今の段階では何が一番いいのが私には選べない。情報料としてもらう限り、それなりの事はしたいのだけだ。

「何だったら、手にとって見ても構わないぞ。どうだ、分かるのはあるか？」

「どうやら私に分からなくて道具とにらめっこしているのだと思ったらしい。」

「……おじさんはどれが知りたいの？」

「お兄さんね。もしかして、全部分かるのかい？」

その言葉に私は慌てて頭を振る。本当は結構な確率で分かっているけど、そんなこと言ったら危険な気がした。ガラクタが、情報次第で高値段という事だし。

「重点的にそういうのを調べてみるだけ。それと聞いているのは魔術師のお兄さんじゃなくて店主」

よく考えれば、何故アンタはいるんだ。自分と同じお客の立場なのに。店主とは友達かなんかなのだろうか。……分からない。

「ならこれなんか綺麗だが、何か分かるか？」

私は店主に指差された綺麗なものとやらを見た。キラキラした石で飾られているそれは確かに綺麗にデコレーションされている。

手にとって、二つ折りのそれを開いてみた。画面は黒くなっているが、割れたりなどはしていないようだ。下のボタンも無事である。でもなあ。

裏を見てカバーを開けるとちゃんと電池が入っていたが、その下のシールが赤く滲んでいる。

「これは携帯電話」

「けいたいでんわ？」

「そう、遠くの相手と話す為の道具で持ち運び可能なタイプ。ただこれは水に濡れて壊れる。キラキラしているのは、そういうシールが貼って飾ってあるだけで、宝石ではないよ」

さっそく1個目から意味ないものを選んでくれてありがとございます。胸が痛い。電池のカバーを戻しながら目をそらす。き

つと見た目が派手だから目が行ってしまったんだろうけど、これなら自分で選べば良かった。

「へえ。そういう便利な道具があるんだ。テレパシーみたいなもの？」

「あ、いや。特別な能力がなくても誰でも使える。ただし同じものがもう一台必要なのと、電波塔がない場所では使えない。でもカメラ機能や音楽機能、ゲーム機能は使えると思う。後はこれもさっきの防犯ブザーと同じで電池が切れたら動かない」

私が心を痛める必要ないぐらい、魔族は全然残念そうではなかった。むしろ楽しそうに私の話を聴いている。って、あんたじゃなくて、得しなきゃいけないのは店主だから。

「誰でも使えるっていいのがいいねえ。カメラとか、ゲームっていう機能も気になるなあ。店主、他に同じやつはない？」

「これと同じのは入ってきてないな」

同じというのは何を見て同じとするのか少し気になった。

同じをデコつてある所で判断されてたらないかもしれない。案外段ボールの中には一個くらい混じっていきそうな気がするが、言わないでおいた。携帯電話の使い方は、1個教えるだけでも凄く時間がかかってしまい割に合わない。

私は机に投げ出されたもの見て、次は自分で選んだほうがいいのかもなあところそりため息をついた。

## 2 - 3 話

さてと。私自身で選んだほうがまだましと分かったならさっさと選んでしまおう。

そうは思ったが、優柔不断な自分は中々選ぶ事が出来ない。色々考えた上で私は一つのペンを選びだした。ペン類ならば、なんとか使えるのではないだろうか。お土産系と思しきそれは、シャーペンかボールペンだろう。カチリと押すと先っぽがでてきた。どうやらシャーペンだと分かると私は数度押す。しかし芯は出てこない。

「オクト、それなに？」

「シャーペンシル。文字を書く道具だけど……」

とりあえずふたを外して逆さを向ければ中から芯が2本出てきた。良かった。これで芯がなかったら、またも使えないものを教えてしまるところだった。1本を中に戻すと、もう一本を先から入れる。

多分短い芯が残ってしまったているのだろう。最初は抵抗があったが、しばらくするとすんなりと中に入った。私はふたをはずすと、折れた芯だけ取り出す。

「これで大丈夫。これは紙に字を書く道具。中に入っている芯がなくなると、使えなくなる」

「芯って、これの事か？」

猫男が折れた芯を拾い上げた。

「うん。でもある程度の長さがないと使えない」

「この物質は何でできているの？」

「炭素と呼ばれるもの。鉱物の一種。作り方は知らない」

魔族も興味津津で芯を見つめていたので、私は手に持っていたシャーペンを差し出した。実際に書いてもらった方が分かりやすいだろう。

「上を押すと芯がでる仕組み。芯さえあれば、紙に文字が書ける。」

「ただど出し過ぎると折れるから」

魔族は力チ力チと興味深げに押ししている。そしてポトンと全部出してしまった所で、ふたを開け再び中に芯をしまった。

「これだけ細いものだと、ドワーフ族やエルフ族でも作るの難しそうだね」

エルフは自分にも血のつながりがあるので多少は知っているが、ドワーフとはどんな人たちなのだろう。例として上げるという事は手先が器用な種族のだろうか。

「なあなあ。そいつらって、どんなやつ？」

私が首をかしげていると、先にクロが聞いてくれた。

「ああ。ドワーフは鉋物の扱いが得意な奴らで、地中に住んでるんだよ。エルフ族は頭がいいから作り方を知っているかもしれないんだ。手先がいちばん器用なのは人族だけど、手先が器用だけじゃ無理だし。それに本体の方も単純そうでかなり技術が高い……この穴とかどうやって開けるんだろ？」

シャーペン片手に魔族は唸った。まるで匠の技を見たかのような感じだけど、日本では当たり前の商品だ。しかも量産系。それだけ文化が違うだけ何だろうけど、ちよつと騙している感じで申し訳ない。

とにかくあと一つだ。良心の呵責に苛まれる前に、さっさと終わらせようと見渡した。どれが手ごろだろうと悩んでいると、魔族が私の目の前に拾い上げたものを差し出した。

「では最後に、この造形は何か教えてもらえないかな？」

彼が手に持っているのは、車のプラモデルだった。教えてもいいが、ちらりと猫男を見る。私が教えている相手はあくまでも猫男であって、この魔族ではない。

「いいの？」

「ああ。先生にはいつも無理を聞いてもらってるしな。もし知って

いたら、教えてくれないか？」

「……それは車の形をした置物。車は馬車と同じ役割をするけれど、馬は使わずに走る乗り物の事。本来は人が乗れるぐらいの大きさをしている」

猫男がそれで良いというならと、私は車について話した。たぶんプラモデルについてではなく、車について話した方が、魔族には有益な気がする。

「馬がないのにどうして走るんだい？」

「エンジンというものがあって、それがタイヤを回しているから。エンジンを回す燃料はガソリン……と聞いた事があるだけで、私も詳しくは知らない」

残念な事にシャーペン同様使い方を知っているだけで、私の記憶には作り方などの知識は入っていなかった。たぶんそれを知らなくても困らない人生だったのだろう。

「なるほど。車ねえ。それが馬車の代わりに使われているという事か。わざわざそんなものを作るという事は、その世界には馬はいないのかい？」

「……たぶん馬よりも効率がいいからだと思う。走る分だけのガソリンはいるけれど、毎日の餌はいらない。それと糞などの処分にも困らないから……ってママが言っていた」

何処まで話してもいいものか。

あまり向こうの世界の事を話すと、いらぬ厄介事が増える気がする。どうしてそこまで知っているのかと聞かれても困る。だが魔族は特にその事に大して聞いてくる事はなかった。ただぶつぶつとつぶやきながら車のおもちゃをこねくり回す。

少し自意識過剰すぎたかもしれない。その事実にはホッと胸をなでおろす。とにかくこれで終わりだ。

「これで3つ」

私は猫男の顔を見た。

約束はここまでだ。さてどう出るかと、ドキドキしながら相手の反応を待つ。自分は混ぜモノで、なおかつ子供なのだから、情報料を踏み倒されたとしても仕方がないくらいは思っている。とにかく無事に一座に戻りたかった。

「分かった。約束だからな、好きなものを選べ」

猫男はにやりと犬歯を出して笑った。ごねるつもりはないらしい。

……本当にこの猫男いい奴だな。

私は内心びっくりしつつ、机に目を落とした。あまり大きなものだと思立つので、貰ったはいいが、他の団員にとりあげられると予想できる。

「なら携帯電話がいい」

悩んだ末、私は最初のそれを選んだ。

もう壊れてしまっただけで使えないと分かっていたとしても、一番懐かしいと感じたのだ。きっと前世では携帯電話を持ち歩いていたのだろう。

「確か壊れているんじゃないか？」

「うん。でもこれがいい」

「なら持っていきな」

使えなくても、あるというだけで十分だ。それだけで、自分は空っぽではないと分かっただけで救われる。

私は携帯電話を大切な宝物のようにそっと拾い上げるとポケットにしまった。

「じゃ、オクト。いこうぜ」

私は頷くとクロの手を握り椅子から立ち上がった。それと一緒に魔族も立ちあがる。そして彼は入口へ進んだ。

もしやついてくる気かと睨むと、入口のドアのところで立ち止まった。

「どうぞ、小さな賢者様」

にっこりと笑って魔族は扉を開けたまま支えていた。どうやら見送りをしてくれるらしい。

行動は善意の塊なのに、何か企んでいるように思えてならないのは、私の考え過ぎだろうか。是非とも、そうであって欲しい。自意識過剰、万歳。

私は魔族を睨みながら、入口を潜る。

「またね」

『また』なんてもうないから。

ニコニコと赤い目を細めて手を振る魔族から私は顔をそむけた。クロは律義に手を振っているが、とてもそんな気分にはなれない。

異界屋が見えないぐらい離れた場所であろうやく私は肩の力を抜く事が出来た。振り向くが、誰かが後をつけている様子もない。

「……疲れた」

「じゃあ、テントにもどろう?」

クロの言葉にコクリと頷く。

「でも、いいの?」

クロは行きたいところはなかったのだろうか。どう考えても私の用事につき合って貰っただけだ。

「オレはオクトとあそべればそれでいいんだ」

何て優しいんだろう。

私のササクレた心が一気に癒された気がする。子供って何て可愛いんだろう。自分も子供だけど、この純粹さは前世に捨ててきてしまっている。

「ありがとう」

私は上手く言葉だけでは伝えきれない気持ちを伝えたくてとギョッとクロの手を強く握った。



### 3 - 1話 理不尽な選択

「あれ？母さんいないね」

テントに戻ったが、アルファさんの姿はそこにはなかった。たださつきまで居たらしく、飲みかけのコーヒーが置きっぱなしだ。その隣には新聞が開いてある。

「トイレかな？ま、いいや。よごれるまえにきがえよ」

クロの言う通りだと私も元の服に着替える。ゴアゴアとした麻の服に着替えると、なんとなくほっとした。やっぱり舞台衣装は肩がこる。

携帯電話を衣装のポケットから取り出すと、忘れないうちに自分の鞆に入れた。私の荷物はこの小さなカバンに詰まったものだけだ。基本的に服は着まわしというか、団員のお古がまわってくるし、ママもあまり荷物をもつ方ではなかったので鞆一つで事足りている。服をたたみ衣装ケースに戻した私たちは地べたに座った。

仕事が全くないというのはあまりないので、こういう時何をすればいいのか分からない。困ったすえ私は机の上にあった新聞を手にとった。

「クロ。何が書いてあるか分かる？」

新聞は龍玉語で書かれているのは分かるが、縦書きか横書きかさえ分からない。一応イラストを入れてくれているがそのイラストにすら文字が入っており、さっぱりだ。

「……んーと、えーっと……んんん」

「ごめん。そんなに読みたいわけじゃないから」

新聞とにらめっこをして唸るクロに、私はすぐさま謝った。どうやらクロにとって新聞はまだ難易度が高いようだ。確かに6歳で新聞がすらすら読めたらかなり凄いだろう。

「えっと。ならクロって、どう書くの？」

「それならわかる。ちよっと待ってって」

そう言っでごそそと道具箱をあさったクロは、羽ペンと紙を取り出した。そこに大きく文字を書くと私に渡してくれた。

「ク・ロー・ド。これがりゆうぎよくごで、こっちがホンニこくご。オレはホンニこくごまれだから母さんがおしえてくれたんだ」

「えっ。クロ ド？」

アルファさんをはじめ、皆クロクロ言っていたので、てっきりクロが名前だと思っていた。そうか、愛称だったのか。新たな事実だ。「なまえをかくときは、くろーどってかけて、母さんいつてたんだ。で、ひとまえでは、クロってなのれってさ。だれにもいっちゃいけないって言ってたけど、オクトはとくべつな」

それって……本当に愛称？

特別は嬉しいが、ちよっと荷が重い気がするのは気のせいだろうか。とりあえずクロがくれた紙をどうするべきかと迷う。

「えっと……」

「それやるな。オレのサインはきつとしようらいたかくつれるから返そうと差し出したが、断られてしまった。どうしよう。」

悩んだ末、とりあえず後でアルファさんに相談する事にした。もしかしたら考え過ぎかもしれない。ドキドキしながら、私はクロのサインをカバンの中にした。これも携帯電話と同様見つからないように奥の方に入れる。

「あら、もう帰ってたの？早かったじゃない」

「母さんただいま」

突然声をかけられて、私は慌ててサインから手を離した。

「クロ、オクト、おかえりなさい」

「ただいま」

サインの事を早く伝えてしまったかったが、挨拶をしないとアルファさんが怖いので、先にちゃんと挨拶をする。

「ちようどよかったわ。2人に大切な話があるからちよつと聞いてくれる」

いざ名前の事を話そうとすると、先にアルファさんが話し始めてしまった。大切な話とは何だろう。この旅芸人一座の事だろうか。

話の腰を折るのもアレだし、名前の事ならばいつでも聞けるので、私はコクリと頷いた。

「たいせつなはなしてなに？」

アルファさんは私たちと同様に地面に座ると、黒い瞳でまっすぐ私とクロを見た。

「この町での公演が終わったら、この一座を抜けるわ」

……へ？

思ってもみない言葉に私は目を見開いた。稼ぎ頭のアルファさんが抜ける？

「団長にも許可はとれているから、明後日の公演が最後ね」

何の話をされているのか理解できずに私はアルファさんをただ見つめた。今は凄く安定しているはずなのに何故？しかも団長が許可したって。

どんな風に話したのかは分からないが、この話は希望ではなく決定事項という事だというのは分かった。

「母さん！じゃあオクトはどうするんだよ」

「それでね、オクト。もし良かったら、私たちについてこない？」

「えっ、オクトもいっしょ？」

「ええ。ただし、オクトが承諾してくれたらだけど」

「もちろん、くるよな！」

クロがニコニコと私に笑いかけてくる。

でも私はどう答えていいのか分からなかった。一緒にテントに入れて貰っているが、私とアルファさんは赤の他人だ。

「……どうして？」

「それはどうして抜けるかってこと？それともどうして一緒にこないかと誘っているのかっていう意味？」

「どちらも」

いきなりすぎて、私は混乱していた。

何が最善なのか理解するだけの情報と時間が欲しかった。ここでアルファさんの話を承諾しつついて行くのが一番簡単で楽だと分かっている。でも本当にそれでいいのだろうか。

「まずなんで出ていくことを決めたのか。それはこの一座が次はホン二国へ行くことが決まったからよ。でもね、この新聞にホン二国の王様が殺された事が書かれてたの。次に控えているのはその弟。きつとしばらく荒れるわ。そんな危険な場所に行きたいわけがないでしょ」

「……詳しい」

「ええ。一応腐っても生まれ故郷だから、チェックは欠かさないようになっているの」

「いやいや。生まれ故郷は腐りません。そんなどうでもいいツッコミが心をよぎるのは、たぶんまだ頭がちゃんと働いていないからだろう。」

「団長にそれだけ危険だと伝えれば……」

「団長の考えでは、弟が即位するから、国中がお祭りになるだろうという予想よ。だから祭り会場で公演をさせて貰おうって思っているの。それも確かに一理あると認めるわ。私の意見と団長の意見があれば、団長の意見が優先されるのは当然。でも私は行きたくない。だから抜けるの」

アルファさんの話は筋が通っているような気がする。でもどこがおかしい気もした。

何故荒れると思うのだろうか。兄が殺されたのは、弟が関係して

いるのだろうか。だとしたら兄弟の仲が悪のはホン二国では公然の秘密だったりするとか？……分からない。

「それと、何でオクトを引き取りたいかだったわね。それはオクトが親友の娘だからよ。ここで一人で生活をするのは大変だわ。オクトは一人で生きるにはまだ幼すぎると思うの」

アルファさんの言い分は正しい。はたしてアルファさん達が居なくなつた後、私はここでやっていけるだろうか。残念な事に私は、まだ買いだしもまともにはできない年齢なのだ。

特技も歌うだけで、混ぜモノである物珍しさぐらいしか売りが無い。そして混ぜモノである事は、いい面と悪い面を両方兼ね備えていて、どちらかと言えば後者寄りだ。

「ただ一緒に来てもここよりもいい生活はできないわ。むしろ悪くなる可能性が大きいわね。だけど貴方にはまだ保護者がいると思うの。そして私はそれになれるわ」

赤の他人である自分に、そんな事を言って貰えるのがどれだけありがたいことかは分かっている。

ただどう判断していいのかはやっぱり分からなかった。まだ働く事の出来ない自分は、ついに行つたとしても、アルファさんに迷惑をかける事しか出来ない。

「分かつたわ。これはオクトにとって大切な事だものね。明後日まで、よく考えておいて」

何も返事する事ができない私に、アルファさんは考える猶予を与えた。私は5歳児なのだから問答無用という事もできたはずだ。それどころか、いい面しか話さない事だつてできる。でもアルファさんは違った。私が考えられるように情報を与え、なおかつ返事を待っていてくれる。それだけでも、何ていい人なんだろうと思う。

でもだからこそ私はどうしていいのか分からなかった。



出ていくか、出ていかないか。付いていくか、付いていかないか。

悩んでいても日にちは経っていくもので、あつという間に公演の日を迎えてしまった。公演は午前と午後の2回に分かれていて、朝から大忙しである。その為今のところまだアルファさんと話せていない。

会場のセッティングが終了したところで、私はパンと薄いスープ、一かけらのチーズをようやく口に入れる事が出来た。この世界での平民の食事は2回。朝食と夕食だ。ここに貴族や金持ち達は昼の軽い軽食が入る。一座も例にもれず2回なのでこれを逃したら夜まで空腹と対決をしなければならなのでありがたい。

「ほらほら、さっさと食べて仕事に行くんだよ」

他の団員と食事をしていると、副団長に急かされた。食事の後は、外で客寄せの為に歌を歌う事になっている。といっても、知能の発達が遅かった事もあって私はこの世界の歌を知らない。以前も母さんが鳴らす楽器に合わせて、ララララと適当に声を出さだけだった。精霊族は産まれた時から歌を歌うそうで、私にもその血が混じっている。そのおかげで適当に出した声でも、ちゃんと歌として聞こえていたようだ。今も音感には健在のようなので、ありがたい。

「オクト、いたっ！ いっしょにきやくよせしようぜ！」

スープを飲みほしたところで、クロが食堂に入ってきた。

「クロは食べた？」

「うん。母さんとすこしまえにな」

私は食器を返却場所へ持っていくと、クロの後についていった。そして道具置き場に寄ってから、敷地の外へ出る。

テントの外ではすでに一座に所属している魔法使いが、雲を使って今日の公演の告知をしていた。まばらだがお客は徐々に着始めているようで賑やかな声がする。

「さすが、さいしゅう日だね。すごいちからはいつてる」

「クロ、遊んでねえでちゃんと客呼べよ」

「わかってるよ。おじさんもちゃんとしごとなよ」

テントの周りでは、すでにグッズや食べ物物の店が並んでいた。食べ物には通常価格より少し割高となるが、ここで買った商品は公演中に食べてもマナー違反とはならない為比較的売れる。また子供が好きそうなものが置いてあるのも、親の財布のひもを緩める一因だろう。この販売も収益に大きく関係してくると前に団長に聞いた。

店がある場所から少し離れた場所でクロは立ち止まる。

「だんちよーがこのあたりりでがつきならして、きやくをあんないしろだって」

クロの手には、アコーティオンが抱えられていた。

私は【グリム一座、会場はこちら】と多分書かれている看板を掲げる。矢印が入っているし、私とクロの服装は、舞台用なので文字が読めなくても多分理解してもらえるだろう。

「オクトもてきとうにうたったりやすんだりしてればいいから」

クロはそういってアコーティオンをならした。確か音楽もアルファさんに教えてもらったと聞いたところがある。……剣が出来て楽器もできるって、アルファさん何者？

まあ今はそんな事考えても仕方がない。私も邪気の含まない笑顔を浮かべた。混ぜモノではあるが、見目は良いと思う。無表情さらしめているよりは、いいは。

「オクトかわいいっ！ー！ー」

「ぶひゃっ?!」



クロがアコーデオンごと私にタツクルしてきた。腕に当たって地味に痛い。

「クロ？」

「かわいい。マジかわいい！！おっし、やるきでた！！だんちよーに、オレらのじつりよくみせつけるぞ！！」

……まあ、やる気が出たならいいか。

腕をさすりながら、私は落としてしまった看板を拾いもう一度掲げる。その隣で、クロがアコーデオンを鳴らした。その音楽はとも子供が鳴らしているとは思えないほど流暢だ。

音楽に合わせて私も、ラだけで声を出す。

しばらくはそうしていたが、ふと気がつくと、クロの音楽が聞き覚えがあるものになってきた。ん？つとクロを見ればニツと私に笑いかける。

「このあいだ、オクトがうたってたきよく。だいたいあってるだろ」  
「大体っていうか……」

ほぼ完璧だ。

嘘、アレは1回しか歌ってないよ？これ、アルファさんが凄いいじゃなくて、クロが凄いいんじゃない？そんな簡単に耳コピできるなんて信じられない。

「クロ、凄い」

「お兄ちゃん、だからな」

えっへんと胸をそらす、世の中のお兄ちゃんはそんなハイスペツクではないと思う。

ただ懐かしい音楽を聞いていると、もっと聞いてみたくなった。それも私が多分一番知っていると思われる、アニソンやボーカロイドの歌を。

どうしよう。聞けるって分かったら、無性に聞きたい。ピラくばりの時も、イメージ壊れそうだから歌えなかったけど、でも聞きたい。たぶん前世の私はそんな曲ばかり聞いていたのだろう。

「クロ……」

「なに？オクト？」

キラキラ純粹なまなざしが苦しい。でも自分の中に産まれた渴望は消せない。汚れた人間でごめんなさい。でも聞きたいんです。ニコニコしたいんです。

「今から歌う歌、それで演奏してくれる？」

「いいよー」

返事が軽い。

多分クロにとってはそれほど難しいものではないのだろう。せめてあまりにも場違いな歌にはならないように気をつけようと心に決める。

そして私はドキドキとしながら口を開いた。

「君は王女おー、僕は召使いー。運命分かっ、哀れな……」

私が始めに選択したのはボーカロイドの曲でも無難に感動できる歌だ。某金髪双子の歌である。今の私なら高音も楽々とできるのでりがたい。

間奏部分の音楽は表現できないけれど、歌詞があるところは多分音の外しもないはず。精霊族の血よありがとう。私は生れて初めて自分のご先祖様に感謝した。ママありがとう。

歌い終わったところで、クロを見た。期待のまなざしを止められない。パチパチパチとクロは拍手すると、歌詞があるところから音を鳴らした。

多少違つかもしれないが、ほぼ記憶のそれと同じ音に私は感動する。

すごいすごい。嘘みたい。

そこから私の中でたかが外れてしまったようだ。興奮が冷めやらぬ前にクロの音楽に合わせて私はもう一度熱唱する。そしてさらに次の歌をクロに強請った。私がアカペラで熱唱し、その後クロのア

コーディオンに合わせてもう一度熱唱する。それを飽きることもなく何度も繰り返し返した。

気がつくとも、まわりに人だかりができてしまうほど楽しんでしまった。

……オタクの記憶って怖い。

「いこくのうたもきける、グリムいちざ！ほんじつさいしゅうこうえん。かいじょうはあちらだよ！！」

クロが慌てて周りのお客を案内したところで、一度歌を休憩した。想像以上にハイテンションになってしまった自分に反省する。次は気をつけよう。

「ねえ、それも異世界の歌？」

顔を上げると、キャベツ色の髪が目飛び込む。緑の髪の人はこの国に多いが、珍しいほどの鮮やかさなそれは、数日前の記憶を揺さぶった。

何故、あの時の子供がいるんだろう。

「僕もチラシを貰ったからね。本当に今日で終わりなんだ。残念だなあ」

顔に出てしまったらしい。にこりと笑いながら少年は私にピラをみせる。

「君も舞台に出るの？」

その言葉に、私は首を横に振った。最終公演は、花形の人たちが全員出るの、私が舞台に立つタイミングはない。私が出る時は、誰かが休みをとったりする時の代役と決まっている。

「そっか。残念。なら見る必要はないな」

少年はチラシをびりびりと破ると捨てた。何をされたか咄嗟に理解できなくて、風に乗って飛んでいく紙を見つめる。

「僕は君の歌の方が聞きたかったんだけどね」

「……私なんかより、皆の方が凄い」

わざと怒らせようとしているのだろうか。

何が目的か分からないが、私はとりあえず思っている事実をできるだけ平然と伝える。私の歌は所詮、精霊の恩恵と前世の記憶の恩恵であり、切磋琢磨している彼らと並び立つものではない。

「何だ。喋れたんだ。残念。本当に喋る事の出来ないドールちゃんだったら連れ去ろうと思ったけど。ほら絵本だったら、悪い人に囚われたお姫様を王子様が助けるものでしょ？」

……コイツ、何言ってるんだ？

私は少年の言葉にドン引きする。王子様って何？

「でもこの場合は僕が悪人になるかな。それは困るなあ。仕方ないか。じゃあまたね、ドールちゃん。悪い人に攫われないようにね」

問答無用で攫わないだけの常識はあるらしい。もしかしたら攫うとかは彼なりのジョークだったのかもしれない。笑えないけれど。キャベツ色の髪の少年は、手を振るとテントとは反対方向に歩いて行った。本当に公演を見る気はないようだ。

「オクト！きゆうけいにはいつていつてきー」

少し離れた場所でクロが手招きする。私もこれ以上変な人に絡まれないので、クロの方へ足早に近づいた。

「クロ……さっきはごめん」

「なにが？」

「歌いすぎたから」

クロもきつと耳コピばかりさせられて疲れたはずだ。しかしクロはにこりと笑うと、私の頭を撫ぜる。

「オレはお兄ちゃんだからだいじょうぶ。それにオクトがたのしいと、オレもたのしいから。あとでまたやるう？」

その言葉は胸が痛くなるぐらい嬉しくて、私は何も言えなかった。それでも感謝を伝えたくて、ギュッとクロの手を握る。そしてでき

る事なら、この先もずっと彼の手を握っていらねえばいいのと  
私はそう願った。

最後の公演も無事終了し、私は片づけを手伝っていた。力仕事はできないので、もっぱら道具を磨いたり保全をする。今もフラフープの数を数えている最中だった。

「オクト、ちょっといいかい？」

アルファさんに声をかけられ、私は立ち上がった。ドキドキと心臓が打つが、もう答えは決まっている。私は道具置き場から外へ出た。

空には満天の星が広がっている。この星が消えたら、アルファさんとクロはここから立ち去るのだ。そしてこの一座もこの町から出ていく。

「この間の、答えをそろそろ聞きたくて・・・」

「おい。アルファと混ぜモノ、団長に呼ばれてるぞっ!!」

アルファの声をさえぎるように、遠くから他の団員が大声が聞こえた。

「こっちは、今大事な話をしてんだよ」

「団長が至急って言うてるんだってっ!!頼むよっ!!」

「まったくもう。あいつは本当に自分勝手なんだから。オクト、悪いけれど話は後にしよう」

どうせいつ返事をしようとも意思が変わる事はない。私はこくりと頷いた。

アルファさんに手を引かれ団員の元へ行く。

「それで、肝心の団長は何処にいるんだい？」

「団長室だよ。何か上客が来てるんだ。公演依頼かな」

「何で公演依頼で私たちが呼ばれるのさ」

そういえばと団員も笑った。

しかし団員は上品な人でさと楽しげに説明続ける。私の頭の中には、キャベツ頭……じゃなくて、キャベツ色の髪の少年が思い浮かんだ。彼は私の歌が聞きたいと言っていたので、私が呼び出されるといったらそれぐらいだ。ただし彼は上品かもしれないが、公演依頼するような年齢には見えない。となればきつと誰か知り合いに頼んだのだろう。

アルファさんが私を引き取りたいと言ってくれている事はきつと団長も知っている。だからアルファさんと私の2人を呼んでいるのだろう。

「分かった、分かったから。ほら、オクト、行くよ」

アルファさんは団員の賛辞を片手で止めると団長がいるテントの方へ足を向けた。他の団員もまるで王族や貴族が来たかのような騒ぎっぷりだ。

「失礼します」

「失礼します」

アルファさんがテントの扉を開いたので、私も慌てて頭を下げる。本当に貴族ならば、公演を受ける受けないに関わらず、粗相をするわけにはいかない。もし何かをしでかしたら、二度とこの国へは来れないと前に団長からきいた。

「やっと来たか。アルファ、オクト、入れ」

団長と向かい合う様に、黒髪の男が中央で腰かけていた。マントを羽織っており服は見えないが、その止め具は多分大粒の宝石だろう。団員達が騒ぐのもなんとなく分かった。

もし本当に貴族からの依頼で公演をするならば、一座に箔がつくし、給金もかなり貰えることだろう。

「用事はなんですか？まだ片づけの途中なので忙しいのですが」

片づけは確かに途中だけど、一流の芸人であるアルファさんはそんなこと気にする必要ない。多分、客がいるから言葉のあやだろう。「ああ。まあ用事と言うのは、アルファというよりも、オクトに

だな。オクトこつちへこい」

団長に手招きされて、私はアルファさんを見上げた。アルファさんも仕方がないと肩をすくめると、私の手を放す。行って来いという事だろう。

団長はアルファさんよりもさらに大きいので、近づくと顔を見るのが困難だ。多分二メートルぐらいあるんじゃないだろうか。首が痛い。

「オクト。こちらは、王宮の魔術師である、アスタリスク様だ。お前を引き取りたいと申し出て下さっている」

「やあ、小さな賢者様。またあつたね」

そこにいたのは、異界屋にいた魔族だった。私を見下ろす紅い目は楽しげだ。だが私は楽しむ余裕もない。今団長は何て言った？

引き取りたいって、えっ?! どういう事？

「ちよつと、待って下さい。オクトは私が引き取る事なつたはずですよ」

混乱して何も言えない私より先に、アルファさんが抗議した。まだアルファさんには何も言っていないが間違つてはいない。申し訳ないけれど、アルファさんの好意に甘えようと私は決めていた。

「そもそも、お前には引き取れないだろ。混ぜモノがいたら、宿もまともに使えないんだぞ。お前から自身どこかに定住する気はないくせに。毎日野宿でもするつもりか？」

えっ。

私は団長の言葉に耳を疑った。混ぜモノは宿が使えない? なんぞ? そんなの初耳だ。

「混ぜモノはね、いつ何が起きるのか分からないからね。だから宿などはよっぽどランクが上な、保険に入っているような場所でないと思わせてもらえないんだよ」



知識不足で困惑している私へ、アスタリスクが説明する。

「そしてそんなホテルを使えるのはまず、貴族ぐらいだろうね」

つまり私やアルファさんでは到底無理だという事か。嫌な現実というか、混ぜモノの人権のなさっぷりが酷い。混ぜモノって、本当に嫌われているだと、しみじみ実感した。

「それは、私になんとか・・・」

「なんとかって、何だ。オクトに顔を隠させて生きて行かせるつもりか？そんな事ノエルが願っていたとでも思うのか？」

アルファさんは団長の言葉に、唇をかみしめる。

ママの願いなんて、きつと誰にも分からない。私自身は顔を隠して生きても、別にいいかとは思う。それだけ嫌われていて、その方が楽に生きられるなら問題ない。

でも私の所為で、アルファさんやクロに迷惑がかかるのは嫌だ。

「それに俺も慈善事業でこの一座をしてるんじゃないんだ。もちろん引き取り手がないなら面倒をみるぐらいの情は持ち合わせている。でもな、アスタリスク様はお前を引き取りたいとおっしゃられているんだ。オクト分かるか？」

その言葉は嫌というほど分かった。

私だけではこの一座ではやっていけない。力仕事も出来なければ、何か凄い見世物になる特技があるわけでもない。クロがいなければピラー一枚配れない。ここでも私は足を引っ張るだけなのだ。

「……アスタリスク様の家に行く」

「オクト?!」

私はアルファさんの顔を見ないようにアスタリスクだけを視界に入れる。今アルファさんを見たら流石に心が折れそうだ。

悠然と笑う、アスタリスクはまるで悪魔のように見えた。彼が欲しがっているのはきつと私の前世の記憶だ。アルファさんのように私を思つての事では断じてないだろう。ただ理由がしっかりしている分安全だ。そして彼は私を引き取っても問題ないほどの金を持つ

ている。

「よろしく願います」

産まれはどうしようもない。こんなの、とても理不尽な選択だ。

……自分が何も分からないただの5歳児だったら良かったのにと思  
った。

それでも、そうはなれないので、私は悪魔へ静かに頭を垂れた。

#### 4 - 1話 不安な新生活

ドサドサドサ。

何かが崩れる音と、痛みで目が覚めた。目を開けるがどうやら生き埋め状態になっているようで目の前が暗い。そして重い。

窒息死も圧死も避けたい私は、それを必死にかき分け体を起こした。

「汚いにも限度がある」

這い出した先は本、本、本。本の山だ。本棚も部屋の端いくつかにあるが、その中はすでにいっぱいな為、床に積んでいるようだ。

付け加えるなら飛び石のような足場しかない部屋は決して狭いというわけではない。本の量が部屋の収納量とあっていないだけだ。

命の危機になるほどの本って……。

ため息をついて、上を見上げた。そこには壁紙が貼られた天井がある。……こんな場所で寝るのは初めてだ。私の頭の上はいつも布製のテントか、満天の星だった為、何だか変化気分になる。

アスタリスクは私を引き取りに来たその日のうちに、この屋敷へ連れてきた。転移魔法というものを使ったらしく、私自身は今どこにいるのかも分からない。ただ宮廷魔術師の宿舎だとだけ説明されている。家に帰るのが面倒なので、もっぱらここで生活しているそうだ。

宿舎ならもう少し綺麗に使えよと思うが、私が口にする前に魔術師は皆似たり寄つたりの部屋だと言われてしまった。嘘をつけ。

玄関先から全てが本で埋め尽くされているなんてありえないと思う。人間の生活する場ではないと声高々に言いたいが、引き取ってもらった身としては雨風しのげるだけで満足しなければいけない

いだろう。昨日は寝られる場所として、ソファアを発掘したところで、睡魔に負けた。おかげで今朝死にかけたわけだが。

「……起きよう」

疲れから考えると少し寝足りないが、一座ならこれぐらいの睡眠で働くのが当たり前だった。寝過ぎると逆に体の調子がおかしくなるだろう。

本を踏まないように気をつけながら部屋の外へ出る。すでにドアを閉める事は諦めているようで、開けっぱなしになっていた。

隣の部屋にはキッチンスペースがあつたが、さっきまでの部屋と似通った状態で、本で埋まっている。あの男、今までどうやって生活していたのだろう。昨日見せてもらった他の部屋も、バスルームを含め、全て本に埋まっていた。家主に許してもらえらるなら、その辺りから最低限の生活スペースを作らせてもらおう。

「……一体アイツは何を考えてるんだ？」

この宿舎の事もそうだが、アスタリスクは私に何をしろとか、何故引き取ったとか、何も言わない。昨日は夜も遅かったから説明がなかったのだろうけれど、その辺りの事をきっちり教えてくれなければ、どうふるまうていいのかわからない。

大方前世の異世界知識が目的に達しない。立場としては使用人又は奴隷として引き取られと思うのが妥当な線だ。しかし宿舎の方には私と同じ使用人の立場の人がいない為指示を貰う事も出来ない。ただし家の方には使用人もいるらしいので、今日はそちらに行つて指導を受けるのだろうか。

「不安だ」

分からない事だらけで推測しても、結局無意味だと分かっている。しかし何をしたいのか分からないというのは不安で、思考がぐるぐると廻る。

とりあえずキッチンに何か食べ物があれば朝食ぐらいは用意して

おこつ思つたのだが、甘かった。戸棚には固くなったパンと調味料しか入っていない。……本気でどうやって今まで生活していたのだろう。

これで朝食作れと言つたら、アイツは魔族ではなく悪魔だ。

「オクト、おはよ」

「あつ、おはようございます。アスタリスク様」

探すのに夢中になっていて、背後から近付かれた事に気がつかなかった私は慌てて頭を下げた。今までメイドなんて経験した事がないので、どうしたらいいのか分からないが、とにかく敬語は使つた方がいいだろう。

「ああ。俺、堅いの嫌いだから。アスタでいいよ。そんな所で何しているの？」

「……朝食の準備をしようと思いましたが」

「とりあえず、頭上げてね。そんな堅くならなくていいから。それより、オクトって料理できるの？」

アスタに言われ私は顔を上げた。黒色のパジャマを着たアスタは、とても宮廷魔術師とは思えないラフさだ。生地はいいものを使っているのだろうが、言葉も砕けているせいで一座の人とそんなに変わらないように見える。

いや駄目駄目。見た目に惑わされてはいけない。昨日だって大粒の宝石が付いたマントを羽織っていたのだ。一般庶民と同じはずがない。これはきつと最初は優しくおいて、何か粗相をしたらお仕置きする作戦に違いない。私とアスタどちらが上か間違えないように。

「簡単なものでしたらできます。しかし申し訳ございません。ここにあるものだけでは、私では作る事ができません」

きつと、私以外でもこの材料じゃ無理だけど。

でももし、彼が鬼畜なら、『作れるなら作って?』なんて無理難題言いだすかもしれない。そして作れなくてお仕置き。痛い思いをするのは最低限がいい私は先に謝っておく。謝ったなら、お仕置きも多少軽くなるんじゃないだろうか。

「そりゃそうだ。結構前に買ったパンしか入ってなかったでしょ。俺、もっぱら食堂ばっかで食べてるから。でも材料さえあれば料理ができるなら、オクトに頼みたいな。時間の縛りがあるし、色々制限もあって、食堂で食べるのは面倒なんだよね」

良かった。お仕置きはないらしい。

私は心の中でホッと胸をなでおろす。この分だと、少なくとも奴隷ではなく使用人として扱って貰えるんじゃないだろうか。

「分かりました」

「それとさ、何ビクビクしてるわけ?」

「……何のことでしょうか。もしも私の言動でお気に召されない事があったなら、申し訳……」

「その敬語だって。異界屋であった時は、もっとぶてぶてしい子供だったよね」

今思えば、あの時の私はよく無事だったな。

宮廷魔術師という事は、彼は何かしらの爵位を持っているはずだ。彼自身ではなくても、その親は爵位があるとみて間違いない。兵士と違い、魔術師はその職業につくまでに普通は学校に通う。そして通えるのは金持ちだけなのだ。たまに試験だけを受けて受かる魔法使いもいるが、そういう魔術師は宮廷には勤めないとあの後、アルファさんに聞いた。

「あの時のご無礼をお許し下さい。私は無知な子供でございました。今はアスタ様に拾われた身。精一杯お仕えしたいと思っております」

「ふーん。感謝してくれてるんだ」

「もちろんでございます」

聞かされたばかりの時は、内心腸が煮えくり返りそうだったが、一晩寝ると仕方がないと思えた。それよりも危うくアルファさんやク口を不幸にするところだったので、それを止めてもらえた事に感謝している。もう少し遅く、私が返事した後だったら、アルファさんは彼と真っ向勝負したかもしれない。タイミング的にもナイスだった。

「じゃあ話は早いや。そのへりぐだった、敬語は禁止。俺の方が年上だから、場所によっては多少の敬語は使ってくれた方がいいけど、普段は今まで通りで」

「はっ？」

「それと何か勘違いしているみたいだけど、俺は引き取ると言ったんだよ？」

「アスタ様の使用人として、引きつとつていただけたんじゃ……」

何かおかしいだろうか？

私は首をかしげた。どこかに預けるつもりで引き受けたのだろうか。いや、でもそれだと料理ができない。料理の方はは一時的とか？分からん。

「様も禁止。せめて、さんでよろしく。もしくはお父様なら可かな。永遠のお兄さん自称してるけど、一回くらいは可愛い子に『お父様？』って呼ばれてみたかったんだよね」

「えつと……」

何だ、その気持ち悪い発言は。

可哀そうなものを見るような目になってしまったが、これは生理的な現象なので仕方がない。無礼だと思ったら、そもそも顔を上げさせないで欲しい。

「賢者様のくせに理解が遅いなあ。それほど意外？俺がオクトを養子として引き取ったって事」

「……はあ?!」

用紙でも容姿でもなくて、養子？

驚きすぎで、私は大声を出してしまった。文脈からすると、私の頭には、養子の文字しか浮かばないけれど、もしかして違う意味があるのだろうか。

「そう。つまり君は俺の養女という事。俺がパパで、オクトが娘」何か言いたいが、言葉にならない。

旅芸人から一転。私は知らない間に魔術師の娘にジョブチェンジしていた。



## 4 - 2 話

「何で？」

養女という恐ろしい話で、脳みそがフリーズした私からようやく出てきた言葉は疑問だった。何を企んでいるのかさっぱり読めない。「ひどなあ。こういう時は、『ありがとうございます。お父様？』だろ？」

ゾワリと鳥肌が立った。

頼むからわざわざ裏声を出してまで娘役の声を出さないで欲しい。一瞬、キモイと面と向かって言っただけで済ませようと思ったじゃないか。

「……どういう意味でしょうか？」

「オクトは頑固だねえ。だから、家族なら敬語はなしだろ。ただし貴族にはそういうのも五月蠅い奴いるから、外ではソレな。俺も一応伯爵家の一員で、子爵の称号は持っているし、今後そういう場所に行く事もあるだろうしね」

伯爵って言った？で、自分自身は子爵？その子供が私？家族？は？一体、こいつは何を話してるんだ。

「……宇宙人め」

「えっ、宇宙人って何？」

そうか。異界言語じゃ嫌味にもならないか。それどころか、いい情報ありがとうございますか。このやろっ。

「この世界以外の生命体の事。それで、何故私がアスタの子供なん……です？」

「おっ。大分と砕けてきたね。でもそんなに理由が気になるのか。そっちなあ。しいて言うなら、俺が面白いから？」

「……馬鹿？」

本音がぼろっと出てしまい、私は慌てて口をふさいだ。貴族相手に、馬鹿はない。

でもあまりに回答が馬鹿ばかしすぎたのだからしょうがない。面白そうなんて、そんな答えあつてたまるか。これも彼なりの冗談に違いない。笑えないけど。

となれば考えられる理由は……私から情報を取り出して売りさばくなら、使用人よりも養子の方が効率がいいとか辺りだろうか。使用人なら情報に対していちいちお金が絡んでくるが、養子ならばそれはない。

でもホテルすらまともに使えないほど嫌われた混ぜモノを養子にするって、リスクの方が大き過ぎるようにも思う。もしも私がそれほど知識がなかったらどうするのか。もしかしてこの世界は養子縁組を組むのも解除するのも、使用人の解雇並みに簡単だったりするのだろうか。

「はいはい。思考の渦に入り込まない。まあ結局はそれが面白いと思っただ理由だけ。オクトは色々考える生きものみたいだからね。俺は頭使うやつが好きなんだよね。ちょうど結婚しろって言われて、いろいろ五月蠅かったし、いいかなと思って」

「ば、馬鹿か?! そんな理由なら、今すぐ取り消せ」  
私との養子縁組を結婚しない理由に使ったら、伯爵様であるコイツの父親に睨まれてしまう。跡取りにもならない混ぜモノ連れて行って『これ俺の娘? だから結婚しない』なんて言い出したら、普通に暗殺されるだろ。不本意な選択だったのに、何でそれが死亡ルルト直結なんだ。ありえない。

私は敬語を使うのも忘れて怒鳴りつけた。

「何で。俺の勝手だろ」

「世の中、俺様だけで生きれるほど甘くない。私が跡取りになれるはずないから。私は混ぜモノだ。親の気持ち考えろ」

もしかしたら、こんな怒鳴りつけたら、使用人の話までパーかもしれない。それでも言わずにいられなかった。もうどうとでもなれ

だ。私はまだ死にたくない。

「混ぜモノには違いないね。あ、悪い。勘違いさせたかな。オクトが継がなくても、俺の息子が継ぐから、窮屈な思いはさせないよ。最低限のマナーは覚えてもらおうけど」

……は？息子？

駄目だ。話が分からなくなってきた。結婚しろと言われてるのに、息子がいると言うことは、再婚しろって言われているという事だろう。それで養子を迎えて、黙らせる？黙るはずがない。

「もう少し分かりやすく、最初から説明してもらえませんか？」

私は頭痛がしてきて、頭を抱えた。アスタの行動が意味が分からな過ぎる。

「だから伯爵は俺の息子が継ぐから問題ないんだよ。周りが再婚しろって五月蠅いけど、混ぜモノの親になりたがる酔狂な貴族は少ないからな。小さな混ぜモノの子供が居るって言えば、しばらくは見合いを断れるだろ」

……なんだこの、悪知恵。確かに理由を聞けば、言っている事は間違いない。私にまったく優しくないだけで。

「アスタはいいの？」

「俺はオクトが気に入ったから大丈夫」

利害の一致ってやつね。

そしてアスタはあまり人の目を気にしないのだろう。伯爵は息子に継がせるという事は、貴族の立場もどうでもいいのかもしれない。

「気に入ったのは、異界の知識？」

もうこうなれば、全てぶっちゃけてもらおう。これだけ混ぜモノが嫌われている事をいいように使っているのだ。性格が悪い事は良く分かった。今更取り繕われるより、私がすべきことをしっかり教えておいてもらいたい。

「ああ。それは、どっちでもいいよ。何か知っている事があって、気が向いたら教えて」

「はっ?!」

どっちでもいい?

取り繕っているわけではなさそうだから、余計にアスタの事が分からない。思考回路が無茶苦茶過ぎる。

「オクトは難しく考えすぎる傾向があるみたいだね。だからさつきから言っているように俺は、考える奴が好きなんだよ。異界屋の時の最後の質問。何で馬じゃなくて車を異界では利用するのかの答え。あれはオクトが考えたんだろ?」

確かにそうだ。あの世界には馬もいる。でも車が主流になった理由は、知らなかった。だから今持っている情報で推測をした。

私が頷くと、アスタは楽しげに笑う。

「オクトは頭も悪くなさそうだし、魔術師目指してもらいたいなと思ってるんだ」

話が見えません。

どうもアスタは色々話を飛ばす傾向にあるようだ。言葉が足りないと言うよりも、相手のペースに合わせる事を知らないように思える。もしくはその気がないか。

「何故?」

「嫌ならいいよ。でも勉強して、賢くなってね」

「いや。裏の意味なく、普通に疑問」

別に引き取ってもらったのだから、魔術師目指せというなら目指すし、親の言う事を聞くいい子でいるつもりだ。お父様と呼ぶかどうかは別として。

「今の魔術師は馬鹿が多いんだ。何にも考えずに、魔法をぶっぱなせばいいとか思っている奴が多くて、俺がつまらない。魔法は喧嘩

に使うものじゃなくて、もつと頭を使つて原理を解析して、大衆に知識を落としていくべきものだと思つてる。でもそのレベルで話せる奴がほとんどいないんだ」

馬鹿が多いつて……あれは賢い人がとれる職業資格じゃなかっただろうか。一座の魔法使いは、やっぱり他の人よりも頭がよく、まわりを馬鹿にしている節があつた。実際それぐらいの知識差があるのだ。でもそんな奴でも魔術師にはなれなかつた。

「オクトなら勉強するうちに分かると思つよ。そして賢くなつたら、俺の話相手して、研究を手伝う事。うん。それを引き取る条件にしようかな。職業は別に何でもいいよ。ただ魔術師になるだけだと、混ぜモノはその後の就職に苦労するから良く考えてね」

曖昧に私は頷いた。

彼の考えが分かるようになるという事は、私もああいう性悪な思考回路になると言つ事だろうか。……それもどうなんだろう。

ただ知識に飢えているのは間違いないので、かなりありがたい申し出だと思つ。それにアスタの言う通り、混ぜモノでも生きていけるように、ちゃんと今後を考えなければならぬだろう。凄い資格であるはずの魔術師になつたとしても就職に苦労するという事は普通の就職はほぼ絶望的ということだ。本来最低目標である自立が、最終目標並みにハードルが高いなんて……私は前世でそんなに悪い事をしたのだろうか。

今後を思つと、憂鬱になつた。

#### 4 - 3 話

「そついや、オクトは文字は分かるか？」

人生を夢んでいた私だったが、アスタはそんな事知った事ではないようで普通に質問してきた。まあ当たり前なんだけど。

聞かれた質問を少し考えてから、首を横に振る。アスタの言う文字は日本語ではなく、龍玉語の事だろう。なんとか話し言葉はできるが、読み書きはさっぱりである。

「そうか。まずはそこから……。なら数は数えられる？」

「それは多分大丈夫」

一通りの数学基礎は前世の記憶でカバーできるだろう。宇宙人と数学でなら会話ができるとかなんとか言った人間が居た気がするが、確かにその通りだと思った。読み方は変わっても、異世界でも計算は変わらない。0は0だし、1は1だ。

「それができるなら、まずは買い物にいくか」

「へ？」

「どんな話の流れだ。」

唐突に言われ、目が点になる。この男の動きが全く読めない。何故数の質問がいきなり、買い物につながるのか。

「何事もまずは腹ごしらえから。オクトも食堂でジロジロみられたら嫌だろ。となると、部屋で食べられそうなもの買わないとな。あと服もいるし、洗面用具と……」

「待つて。アスタ、服はある」

「あるつて、どこに？」

勝手に話が進んでいく事に慌てた私は、急いで自分が寝ていた場所から靴を持ってきた。

「アルファさんがくれた。だから洗いまわして大丈夫」

「じゃないな。部屋着として着るのは構わないけれど、外に出る時は駄目だから。それと、それっぽっちでいいわけないだろ。行くよ」私の言葉をさえぎって、アスタは否定した。折角アルファさんがくれたものなのに……。そんなにみすぼらしく見えるだろうか。

混ぜモノとしてさげすまれた時より、なんだか悔しかった。でも引き取ってもらった私に、そんな事を言う資格はないのも分かっている。私は彼に生かされている立場だ。

「金ないから」

だから買えない。せめてもの拒絶で私は言った。

「俺が持つてるから大丈夫。子供に出してもらおうほど落ちぶれてないつもりだよ」

ちっ。

表情には一切出さず心の中で舌打ちする。もっとも私に払わせようとしないうちには分かっていた。働く能力がない私を引き取ったのだから、それぐらいの考えはあるはずだ。

「悔しいなら、何も言われただけの力を付ける事だよ」  
「バレた？」

言われた言葉にどきりとする。不機嫌になってしまった事は極力顔に出さないように気を付けたのに。アスタはすつとしゃがむと、私と同じ目の高さに合わせて。

「俺だつて誰にも何も言われないうちに子爵の位をわざわざ貰ったんだ。そしてやりたい事をやる為に宮廷魔術師なんて堅苦しい仕事をしているんだよ。ここでは貴族や王族がルールで、力がないなら彼らの常識に従わなければいけない。好きな服を着て、自分の常識をつきとっしたいなら、よく考えるんだ」

私は頷いた。

貴族に引き取られたならば、貴族に合わせるべきなのは間違いない。それが嫌なら、文句を言われないうちにどうしたらいいか対策を練るべきだ。悔しいがアスタの言い分の方が正しい。

そして私の荷物を捨てようとしないうちあたり、彼なりの譲歩してくれているのも分かった。それなのに彼に恥をかかせるわけにもいかない。

「よし、じゃあ行こう。今日はその格好で良いよ。まずは買い物を買ってもらって、必要最低限のものを買えるようになってもらわないと。しばらくは一緒に、この寮で暮らしてもらおうから」

今度は私も反論せず頷いた。ここでは彼がルールだ。

私は歩き始めたアスタについていく。外へ出ると、宿舎の隣に大きな塀があるのが見えた。塀の向こうには、さらにそれよりも高い建物がいくつも見える。初めてみるが、きっとあれは王宮だ。つまりここは王都なのだろう。

「通勤が徒歩1分なのが気に入ってるんだよね。王宮の中にも宿舎はあるんだけど、そっちは逆に近すぎて、何かあるとすぐにいいように使われるから嫌なんだ。最近は移れって五月蠅いんだけど」

「……私が居れば、それも断れると？」

「そう。王宮に混ぜモノ連れこむのは嫌がるだろうし、小さい子を1人で育てているって言えば、無茶な召集もかけられないからね」  
なんとなく分かってしまった自分が物悲しい。まあいいように利用してくれていた方が、捨てられない理由になるので、自分としてはありがたいけれど。でも何だろう。話を聞けば聞くほど、自分の人生が無理ゲーっぽく見えてきた。

「……混ぜモノにも、ものを売ってくれるだろうか」

かなり色々な場所で嫌われているこの現状。もしかしたら、最終ライフスタイルは、誰も住んでいない山で自給自足だろうか。でもそれが一番確実な生き方な気がしてきた。

職業農民。うん。いいかもしれない。

「この町の人は金さえあれば何でも売るよ。多少嫌な顔はするかも



しれないけれど、混ぜモノの金も、貴族の金も同じだからね。ただ飲食店は断られる可能性が高いかな。俺と一緒に通してくれるけど」

「アスタが貴族だから？」

「いや、俺が魔術師だから。混ぜモノは忌み嫌われているけど、それは蔑みからじゃなく、恐れからだ。魔術師なら混ぜモノが暴走してもなんとかしてくれるだろうと皆思ってる。もちろん貴族として金をちらつかせても入れるだろうけど」

ふと、何故混ぜモノがそれほどまでに嫌われているのか不思議になった。

私は同じ人がない為、その姿や成長の仕方が不気味に見えるのだと推測していた。また上手く育たない事の方が多いようなので、その脆弱さも嫌われる要因だと思っていた。しかし恐れられるのは差別ともどこか違う気がする。

アスタの歩く速さに置いてかれないよう、小走りになりながら考えるがしっくりとした答えに行きつかない。

「同胞は、一体何をした？」

「そうだなあ。最近あった大きな事件だと、今から100年ぐらい前。黄の大地にある国で、混ぜモノが暴走。結果王都が消し飛んだのかな。これは結構有名だね。もっと昔だと、国自体が一夜にして消えたという文献も残っている」

「は？消えた？」

「そう。混ぜモノの魔力が暴走して、文字通り何も残らなかったらしい。でもそんなに大事になるのは、本当に稀だよ」

……むしろ、そんな事があってよく自分は生かされているなと思ってしまった。私の人権は何処に行ったと思ったが、これでも生まれてすぐに処分されないだけ、倫理や人権があったという事だ。

「ただし稀ではあるけれど、混ぜモノが危険だとみなす動きはあったんだ。千年ほど前には混ぜモノ狩りという大きな出来事も起こっ

た。でもそれも今は誰もやらない。何故だと思う？」

「倫理的にまずいから？」

「ハズレ。そっちの方が被害が大きかったからだよ。どうも1人殺すたびに村や町が消えたみたいだね。さっき話した国が消えたというのもちょうどその時代だったはずだよ。狩りに関係しているかどうかは分からないけれどね。とにかく、そんな黒歴史のおかげで今はどの国も混ぜモノには手を出さない」

アスタの言葉に、私は何と云っていいか分からなかった。

歩く爆弾がいたら、誰だって避けて通りたいたろう。これで嫌うなんて無茶だ。しかも爆弾を先に解体しようとするれば、さらに大きな被害……何て迷惑な最終兵器。そしてそれが自分だという。

「暴走は、何で起こるの？」

とりあえず、そんな大迷惑な死に方だけはしたくないと思った。

「さあ。今もまだ研究段階だね。データも少ないし。良かったらオクトも研究するといいよ。今のところは精神と密接な関係があるんじゃないかとされてるかな。百年前の事件は結構情報が残ってたから」

研究するといいつて、自分自身ですか？いつ爆発するかもしれないのに、怖すぎるわ。なにその迷惑な自虐。

ただツッコミ入れるよりも、話の続きの方が気になるので私は黙って聞く事に徹した。

「あの事件は六番目の王女が王位継承するのを兄王子が阻止しようとして、混ぜモノを使って暗殺を図ったのが発端らしい。その時混ぜモノは恋人を人質に取られて無理やり従わされていたそうだし、しかし事故か自殺かは定かではないが人質は死んでしまい、その後暴走が起こっている。そこから感情の高ぶりが暴走引き起こしているのではないかと仮説がたてられているんだ」

……大切な人が死んで、感情の高ぶり。

あれ？それって、もしかしたら、つい最近起こっていませんか？

その事実に行きついた時、頭から血の気が一気に引いた。

百年前の話は私という自我が目覚めた、母親が死んだあの時の状況にとても酷似している。今思えばクロのおかげで私は暴走を踏みとどまれたんじゃないだろうか。クロがいなかったらと思うとぞつとした。

クロ、マジ勇者。二度と足をクロの方に向けて眠れない。

「ありがとう。よく分かった」

とにかくまずは、自分の感情コントロールを確実にできるようにしようと思心に誓った。

## 5 - 1話 危険な外出

アスタに一通り買い物方法を教えてもらった私は、その後料理を始めた家事のすべてを請け負った。

というか、それぐらいしかやる事がないのが現実だ。

「暇……」

私が外出するのは買い物ぐらいである。他に遊びに行きたい場所もないし、そもそも出かけたくない。それならば室内で遊べばいいのだろうが、どう遊べばいいのかわからなかった。一座にいた時はとにかく雑用を買って出て、暇になればクロと遊ぶか、アルファさんや団長にこの世界の事を色々聞くかしていたのだ。自分の時間というもを持つのは初めてだった。

前世の知識に頼ると子供の遊びと言えば、ままごとや人形遊びなのだが、さすがに今更する気も起きない。むしろ自分がやっている姿を想像するとうすら寒い。結果やっぱりやれる事なんて家事ぐらいだった。

もちろん1日中家事をするわけにはいかないの、それ以外の時間は文字の練習をしている。アスタから文字の基本を教わったのでそれを元に最近はイラストの多い本を読みあさっていた。幸いこの家は、本だけは不必要なぐらい充実している。魔法や異世界に関する本が多いが、それ以外も結構あった。アスタはきつと活字中毒者なのだろう。

とにかくアスタに育児放棄されていると言っても過言じゃないくらい放置されている為、私は自由な時間を持て余していた。本を読むのは嫌いではないが、そればかりでは流石に疲れる。テレビもラジオもゲームもないなんて、なんてニートにつらい世界だろう。

「あー……小麦粉がなくなそう」

台所の棚を整頓しながら私はぼやいた。この量では明日の朝食のパンケーキ分ぐらいしかない。ちょうどパンや麺も切れているし、そろそろ買い出しが必要だ。

来たばかりの時は本の森と化していた台所だが、今は私の努力の結果、調味料も並びきっちり使えるようになっていた。水道も完備されていたので共同の井戸を使う必要もなく、その点は本気でありがたい。「ベーコンとか、野菜もそろそろ買わないと」

時間は有り余っているので、買い出しくらい余裕だ。暇もつぶせる。それでもできれば外出したくなかった。ジロジロ見られるのも嫌だし、あまり歓迎されていないのもよく分かる。

できる限り最低限の買い物で済むように、私は必要なものを紙に書き出した。

「せめて冷蔵庫があれば、もう少しまとめて買いためできるのに」魔法でも電気でも何てもいいので、誰か作ってくれないだろうか」と本気で思う。夏場とか、ほぼ毎日買い出しに行くのかと思うと憂鬱だ。冷蔵庫が無理ならネットショッピングでも良い。とにかく家から出たくない。……だんだん発言が二トどころか、引きこもりになってきている気がするのがちょっと嫌だ。

とはいえ、嫌だ嫌だと言っても、誰かが変わってくれるわけではないので私は鞆を手を取った。

「今日も何もありませんように」

私は返しそびれたクロのサインを取り出すと手を合わせて祈った。最近を外出前にそれが日課になっている。混ぜモノの力が暴走しない為に精神統一しようと考えた結果こうなった。外の世界マジ怖い状態なので、とにかく心のよりどころを作って、安定を図っている。

「本当に、本当に、何もありませんように」

パンパンと最後に柏手をうち、サインをカバンの奥底へしまう。

なんとか気持ちを切り替えると私は外へ出た。

宿舎のはずだが、私は一度も誰かにあつた事がない。まるで私とアスタしか住んでいない気がするが、時折隣の部屋からよく分からない音が聞こえたり、反対側から不気味な声が聞こえたりするので、人が住んでいないわけではないと思う。会わない理由は私を外に極力出ないようにしている事と、きっと活動時間のズレの為にただできる事なら、そんな奇怪な音を出す隣人とは会いたくないなと思っっている。

「駄目だ。思考がどんどん駄目人間になつてる」

隣人には笑顔で挨拶。助け合いが大切だ。それなのにできる限り、顔を合わせないようにしようって、完璧引きこもりの思考である。これではいけない。

一座にいた時は仕事と割り切れば人目もそれほど気にならなかったのだが、人に会わなくても済む生活をしていると、どんどん億劫になつていく。

「行こう。とにかく、早く済ませよう」

買い物には行くのだから引きこもりじゃないと自分に言い聞かせ、商店街へ向かう。その途中、すれ違う人に必要以上に大きく避けられ、さらに離れた場所にいる人からは、遠慮ない視線を貰った。

「フードが欲しい」

平日の為人通りはまばらなのだが、早くもめげそうになつた私は小さくぼやく。顔を隠してしまいたかったが、アスタはその手の服や小物は買ってくれないのだ。ドレスはボンと一括払いで買ってくれるのにと恨めしく思う。

とはいえ今日はドレスではなく、シャツにズボンと男のような格好をしていた。楽なのでよく着るのだが、この服自体は1人で出歩く時に貴族の女性の装いをするのは危険だろうとアスタが買ってくれたものだ。……ただ顔を隠さない限り、例えばドレスを着ていたと

しても何も危険はないように思う。誰ひとり近づくと人が居ない為、スリの心配すらない。流石混ぜモノ。嬉しくない天然の防犯だ。

「……もしかしてそれを狙って、買って欲しくないのかも」

とても合理的のようだが、財布は鞆に入れるのではなく、首から下げ服の中に入れるという対策しているので、スラれるなんて事ない。

ため息をつきつつも、パン屋で食パンを買おうと、私は八百屋に向かう。初日にアスタと一緒にまわった場所な為売ってくれないという意地悪もされない。

「おや、アスタ様のところの混ぜモノじゃないか。今日は何を買うんだい？」

八百屋につくと、店の親父が気さくに声をかけてきた。アスタと元々知り合いだったらしい、狐耳のの獣人は、私を怖がるそぶりを見せた事がない。きっと類は友を呼ぶで、アスタの知り合いだから少し人と違う思考をしているのだろう。

「キャベツとニンジン2本。じゃが芋2個。キノコ3個。あとオレンジ2個」

「玉ねぎはどうだい。今が旬だよ。薄暗い所に上にぶら下げておけば、長持ちもするぞ」

長持ちするのか。だとしたら買っても大丈夫だろう。2人暮らしで、しかも私がそれほど食べない為、食材は使いきれなくなってしまう事があった。

「ならそれも。後できたら、キャベツは半玉か4分の1玉で売って欲しい」

「はあ？何でまた。金はあるんだろ」

「私とアスタだけじゃ、食べきれない。値段は少し割高でも、量を少なく売ってくれるとありがたい」

「なるほど。一人暮らし用かあ。よし。お前さんに言われた通り、食べ方や保管方法を教えながら売ったら客も増えた事だしな。キャ

ベツは半玉、おまけしてやるよ」

ありがたいので私は素直に受け取っておく。貴族のくせにと言われるかもしれないが、不必要なところでお金を使う必要はないはずだ。それに貴族であるのはアスタだけで私は違う。身の丈に合った生活をしていくべきだろう。

「ありがとう。あとは食べ方は口答だけでなく、紙に料理の作り方を書いて配るとより親切で、購買欲が上がると思う。イラストが入っているとなおいい」

「紙を配るのかあ。ちよつと考えてみるよ。それにしてもアスタ様が言った通り、本当にお前さんは賢者様だな。よくそれだけポンポンアイデアが出るよ」

「賢者は言い過ぎ」

むしろ恥ずかしいので止めて欲下さい。

今おじさんに教えた事は、私の純粋なアイデアではなく、前世のスーパーを思い浮かべたに過ぎない。

買い物袋に一通り荷物を入れると、かなり重たくなった。このまま連続で他の店にも行ってしまいたいところだが、私の腕力は5歳児と同じだ。たぶん持てなくなるのが目に見えるので、一度荷物を置きに引き返すことにする。私はぺこりと店主に頭を下げた。

「アスタ様によるしくな」

私は頷くと、小走りに来た道を戻る。

コンパスの短い脚では、歩くのにも時間がかかった。早く大きくなりたい。しかしエルフは成長が遅く、精霊は心の成長に合わせて一瞬で成長すると本に書いてあったので自分がどのタイプになるのかは運まかせだ。せめて体は子供、頭脳は大人な状態だけは、マジ止めて欲しい。

「考えるの止めよ」

外に出るとナーバスになるので、思考が悪い方ばかりに向かってしまう。とにかく早く買い物が終わらせて、家に引きこもるのが一



番だ。

「そつえば……」

ふと商店街の途中にあるわき道は、宿舎への近道ではないかかど気がついた。若干薄暗いが、私なら誰も近づいてこないで、危ない事もないだろう。

早く帰りたいしな。

私は急がば回れという言葉にあえてふたをして、わき道に入った。

## 5 - 2 話

何故、あの時わき道に入ってしまったのだろうか。

「はあ……」

私はいく度目かになる深いため息をついた。ため息をついても、牢屋のカギは開いてくれないけれど。私より少し離れた場所からはしくしくと鳴き声が聞こえ、とても辛気臭い。

急がば回れ。何故あの時そうしなかったのか。数時間前の自分を罵ってやりたいが、後悔先に立たずだ。私は人攫いに攫われるという失態を犯してしまった。

もちろん混ぜモノである私が積極的に攫われるはずもない。あの時近道だと思つた道の前には人攫いにあつてゐる女性がいた。そしてそれを目撃してしまつた為、に鳩尾に一発拳を入られたのだ。その後気が付いたら牢屋で転がっていたわけだから、確実に巻き込まれただけだろう。

どうせなら昏倒した後は、そのまま捨てておいてくれてよかつたのに。私なんか攫つても何の役にも立たないはずだ。むしろ相手も扱いに困つてゐるようを感じる。遠くでこそこそと、話しあつてゐるのを聞いてしまった。

「はあ」

まわりをちらりと見れば、一緒に攫われたはずの人達がビクリと肩を揺らした。私も被害者なんだけどなあと思わなくもないが、私が混ぜモノである事を考えれば仕方がない気もする。誰だつて、爆弾と一緒に閉じ込められたくないだろう。一緒に助かる為に頑張ろうと慰め合つなんて、夢のまた夢だ。

「とういか、私が暴走したらどうするつもりだったんだろ」

そう考えると、さらった相手は、それほど頭がよくないのかも知れない。少なくとも混ぜモノの知識は薄いのだろう。知っていたら私はこんな目にあわなかつたはずだ。

「アスタ、探してくれるかな」

まだ連れ去られた事に気が付いていない可能性もあるが、それ以前に気がついても探してくれるかどうかも分からない。数週間一緒に過ごした仲ではあるが、私とアスタは赤の他人だ。面倒だと思えば、何もしないかもしれない。ニート生活な私が、それほどアスタの役に立っているとも思えない。

そう考えると自分で何とか脱出する方法を考える方が賢明だ。

入口は鉄格子となっており、南京錠でドアは止められていた。窓は部屋の中に一つだけしかない。しかも私ですら通れるかどうか微妙な大きな上、かなり高い場所にあるのでそこから脱出は難しいだろう。また牢屋は薄暗く、光は牢屋の向こうにかけてあるランブだけだ。

「おい。飯もつてきたぞ」

声の方を見れば、鉄格子前に12、3歳ぐらいの少年がいた。段ボール箱を抱えた少年は、ニツと歯を出して笑う。バンドナから赤茶の髪を覗ぞかせてたその顔はまだあどけなさを残している。それでも彼もまた人攫いの一味だ。私は注意深く少年を見つめた。これぐらいの子だったら上手く出し抜けるかもしれない。

「俺だったらなんとかなるかもなんて思っても無駄だからな。ここには、俺以外にも仲間が居るから簡単に外には出られないぞ」

私の考えている事がばれたのかと一瞬思ったのだが、全員に対する忠告だと気がつきこっさり力を抜く。この少年なら何とかなるかもと、皆考えるのだろう。

「パンと水を配るから並べ」

鉄格子の向こうから少年が声をかける。しかし誰1人として動くとしなかった。

「まあ1日や2日食べなくても死なないから、俺は構わないんだけどな。いざ逃げたくても動けないって方が俺的には助かるし」

ニヤニヤしながら少年がいうと、誘拐された人たちはひそひそと相談し始めた。そして1人が立ち上がると、釣られたように1人、また1人と立ち上がり、少年からパンと水を貰って行く。全員が貰い終わったところを見計らって、私も立ち上がった。

「あんたが最後か。って、ちっさ。何？ママと一緒に攫われたのか？」

私は少年の言葉に首を横に振った。

「そっか。普通はそんなに小さい奴は攫わないのに。あんた運が悪いなあ。しかも混ぜモノの男かよ。あいつらどうするつもりだ？」

本当にその通りだと思う。私を攫っても風俗に売りつける事は出来ないし……と考えたところで、自分の恰好が男である事を思い出した。まわりを見ると女性しかいないので、この少年も私が巻き込まれたのだと考えたようだ。

「混ぜモノならあいつらも下手に殺す事だけはないと思うから、安心しろよ。ほら、パン食べな」

おしつけられるようにパンを渡され、私は頷いた。少年もおびえた様子がないので、私はその場に座り込むとパンにかぶりついた。食べれるときに食べなければという習慣が身についている為、どんな時でも食べられないという事はない。

「いい食べっぷりだな。そんなに、腹減ってたのか？」

私はコクリと頷き、水を口に含む。生ぬるかっただが変な味はしなかったので、ありがたく飲み込んだ。その様子を少年は立ち去らず、ニコニコと見つめる。

それにしてもこの少年、一体どんな立場なのだろう。パンの渡し

方等考えると、結構頭がいいように感じる。脅すわけではなく、食べる事が正解だと全員に思わせる言葉回しだった。もしあそこで、暴力に訴えたら、誰も彼に近寄らず、パンを食べなかったに違いない。まさに北風と太陽だ。

「俺はライ。アンタ、名前は？」

「……オクト」

喋れない設定でいつて油断させても良かったが、私の場合出し抜くよりも、何か交渉した方が家へ早く帰れる気がした。交渉の為に言葉が必要なので喋れない設定はむしろジヤマだ。

「何だ喋れるのか。お前、親はどうした？」

「いない」

アスタが脳裏に浮かんだが、素直にそれを言う必要はない。本当の親はいないのだから嘘でもないわけだしと自分に言い聞かせる。

「ふーん。結構いい生地の服着だし、どこかの酔狂な貴族の下働きでもしているのか。ちっさいのに大変だな」

……怖ッ。

服の生地から一瞬で本当に近い答えを導き出された私は、内心冷や汗をかく。流石に貴族に引き取られたとは思わないだろうが、貴族と繋がりがあると分かれば何か交渉材料になるかもと思われそう  
だ。

「ライは、何している？」

「俺？俺は泣く子も黙る海賊だよ」

話を換えようと出した話題だが、あっさりとその集団が何かを教えてくださいました。頭がいいと思ったのだけど、そうでもないのだろうか。もしかしたら私が幼児だから油断しているのかもしれない。

だとしたらチャンスだ。

「海賊？」

「そう。海にいる荒くれ者さ。でもソレばかりでもやっていけない

いから、たまにこつやって陸に上がって、裏の仕事も引き受けるわけ」

「裏の仕事？」

「若い娘が欲しいんだってさ。その後どうするかは俺も聞いてないけど」

奴隷か何かだろうか。女性に限定するなら、性的な可能性も高い。……どちらにしろ、私は完璧にとばかりを受けた事には変わらない。

「おい、ライ。飯を配ったら、病人の世話に戻れ」

「はいはい。今行くよ」

ここからは見えないが、仲間が近くにいるのだろう。声がよく聞こえた。確かに少年を何とかしても、ここから抜け出すのは難しそうだ。

「病人がいるの？」

「ああ。海の精霊に好かれちまうとなる怖い病気だ。といっても精霊相手に俺らは何もできないしな。看病って言っても飯を持ってくだけだよ。長く航海をしてとなるけれど、陸に戻れば治るやつもいるし」

「海に精霊？どんな人？」

私も精霊族の血が入っているはずだ。海にいるなんて初耳だ。

「さあ。姿が見えないから精霊なんだし」

……精霊って何者？姿が見えないなら、どうやってママが生まれたのか。ただ確かに今まで精霊族の人とはあつた事がない。もしかして見えないだけで、結構すれ違っていたりしたのだろうか。

「病気はどんなの？」

「お前質問はぼんぼん喋るんだな。まあ、いいけどさ。海の精霊に好かれた奴になるだけで、うつる病気じゃないから安心しろよ。ただ壮絶だぜ。歯茎から血が出て歯は抜けて、全身に青あざができるし。そんでもって酷い場合は死んじゃう」

あれ？

海賊と青あざ。航海が長いとかかるといっ話。そこから私は精霊が引き起こすのではない、別の病気が頭に浮かんだ。異世界なので前世と同じとは限らない。しかしこの世界の食べ物、とてもよく似ている。

「じゃあ、俺行くから。大人しく今日は寝ろよ」

「待つて」

立ち去ろうとするライを私は慌てて呼びとめた。混ぜモノの私を怖がらず、普通に話してくれる貴重な人材だ。明日も彼が来るか分からないのだから、交渉するなら今しかない。

「その病気、私なら治せる」

失敗したらもつととんでもない事になるかもしれない。しかしこのまま何もしなくても事態が好転しないと踏んだ私は賭けにでる事にした。

カツン。

歩きかけていた足を止め、ライは私を振り返った。透き通るような琥珀色の瞳が私を映す。何の感情も見えない瞳をまっすぐ向けられ、私は逃げ出したくなかった。タイミングを間違えたかもしれないと一瞬後悔するが、何とか踏みとどまる。

「本当か？」

「……本当」

ビビった所為で、少し反応は遅れてしまったが、ライは牢屋の前に戻ってきてくれた。

「逃げる為に、嘘つくとか大変だぞ。ここにいたら、少なくともオクトは何もされないんだからな」

確かに何もされないだろうが、何もされずにこの牢屋に一人取り残された方がもっと怖い。海賊たちは混ぜモノについてあまり知らないようだし、取り残された恐怖からバッドエンド直行になるかもしれないなんて考えてもないだろう。自分の手で殺さなければいいとか思っていたらアウトだ。

「治せるよ」

「なんでそんな事知ってるんだよ。誰にも治せない、奇病なんだぞ」  
「……死んだママに聞いた」

私は嘘がばれないように下を向いた。悲しくてうつつむいたと思って貰えるように言葉を選ぶのも忘れない。ここで前世の知識からとか本当の事を言ったら、頭の可哀そうな子認定までされて、2度と話を聞いてもらえないだろう。

「ふーん。それが本当なら、オクトのママは何者だよ」

「知らない」



私が聞きたいくらいだ。死ぬ時も何も残さず突然目の前で消えるとか、普通じゃありえない死に方だった。それに目に見えない精霊が親とか、意味がわからない。無事帰れたら、アスタに色々聞こうと思う。あれだけ本を読んでいるのだから何か知っているはずだ。「分かった。信じるよ。で、どうやって治すんだ？」

「取引したい」

ここからが本題だ。私は震えそうになる手を握りしめ、顔を上げた。ここまできたらもう逃げられない。後はライに騙されないようにして、確実な交渉をするだけだ。

「それは俺と？」

「違う。海賊の一番偉い人」

人攫いをするぐらいだから、正義の味方みたいな海賊ではないのは確かだ。約束もちゃんと守ってくれるとは限らないのも分かっている。それでも、まずは話をしなければ進まない。

「それだけの価値がある情報だと思う」

海の精霊に好かれた呪いだと思われる奇病。そう思っている限り、きつと治す事はできないだろう。多くの船乗りの命をこれまでに奪ってきて、これからも奪っていくはずだ。

船長とてこの病気にかからないとは限らなければ、その治療法は喉から手が出るぐらい欲しいはず。

「ま、そうだな。その話が本当なら、船長も会うだろ。分かった。連れてってやるよ。ちよつと待ってる」

ようやく見せてくれた笑顔に、心の中でそつと胸をなでおろす。怖かった。

ライは一度その場を離れたが、すぐに鍵の束を持って現れる。思ったより近くに鍵があったのか、誰かがもっていたのだろう。そのカギを使い、南京錠を外した。

「来いよ」

「どけえええつ!!」

さしのばされた手を取ろうとした瞬間、ライの方へ向かって女性が叫びながら走ってきた。ライよりも大きな背丈なのでそのまま体当たりすれば、ライは吹き飛ぶんじゃないかと思う。外に仲間がいるって分かっているはずなんだけどなあ。

それでも逃げられると、彼女は踏んだのだろう。しかし次の瞬間、女性の顔は驚愕に代わり、体が宙を飛ぶ。バシンと音がして地面にたたきつけられた事に気がついた。

「ちよつと、傷つけるなって言われてるんだから、無駄な努力とか止めるよ。怒られるだろ。どうしても言うなら仕方ないけどさ。言っておくけど俺一般人に負けるほど弱くないから」

にやりと笑って、ライはパキパキと指の関節を鳴らす。誰もが状況についていけず、啞然としていた。それは私も同じだ。体格から考えると、女性が吹っ飛ぶなんてありえない。

「じゃ、オクト行くぞ。ちなみに逃げようとしたら、アレだから」  
地面にたたきつけられたまま動かない女性を指差されて、私は慌てて頭を上下に振った。そもそも私の体重から考えると、あの女性よりももっと軽々と吹っ飛ばす事ができるだろう。そしてライは女性とか子供とかが理由で手加減なんてしてくれそうになかった。

私は立ち上げると、牢屋のドアを潜る。もう誰もこちらへ近づこうとしない。皆こちらを注目しているが、逃げる気は失せたみたいだ。それでもライは私が外に出ると、南京錠を再びつけた。

「こつちだ」

歩いていくライの後ろを小走りについていく。

「おい、何勝手に混ぜモノを外に出してるんだよ」

階段近くまで行くと、縦にも横にも大柄の男がギロリと睨みつけてきた。座っているはずなのに、ライがまるで小人のように見える。「あんたらだって、どうしたらいいか困ってただろうが。俺の方が混ぜモノの事を知ってるから、面倒みるように言われたの忘れたのか？」

「ふん。そんな小さな混ぜモノなら、殺しまえば楽なのによ」  
待て待て。何いきなり、死亡フラグ立ってるのさ。しかも殴り殺させそうになったら、絶対暴走テロ自殺間違えないから。私平然と殺される自信ないから。この脳みそ筋肉族め。私はライの服の裾を掴んで後ろに隠れた。

ライも怖いけど、少なくともライはいきなり私を殺そうとしたりしない。

「だからアンタは万年下っ端なんだよ。混ぜモノはどれだけ小さくても殺すな。そんなのどこの国も知ってることだろ。馬鹿なの？死ぬの？」

「待てよ」

「俺、今から船長のところ行くんだけど」

階段をのぼりかけたところで、肩を掴まれたライは面倒くさそうに男を見た。

「それとも何？アンタを倒してからしか行けないようになってるわけ？」

「いや。……行けよ」

睨まれた男は顔色を悪くすると、ライから手を離れた。大きな男が一回り以上に小さな少年を怖がるのは、何だか不思議な光景だ。ただライはさも当然のように、その横を通り抜けた。

「俺最近一味に入ったんだけどさ、入団試験でここのNO3を倒しちゃったんだよ。だからあいつビビってるわけ。あんなデカイ形してるのに、笑えるよな」

どうやら私が不思議そうにしていたから教えてくれたみたいだ。

でも私は笑えない。自分より体格のいい相手をやすやすと倒すなんて、まるで漫画の主人公みたいな奴だ。正直関わりたくない。

それにさっきの話から察するに、最初から私があつた牢屋にいる事が分かっていて近づいてきたという事だ。パンを配っている時は、さも今知りましたという顔をしていたのに。やっぱり信用はしない方がいい。うん早々に彼とはおさらばしよう。

「私の荷物、何処？」

「何で荷物？逃げないならいらないだろ」

「必要だから」

嘘ではない。治療に必要なのは買い物で買ったものだが、私が本当に必要なのは最初から持っていた鞆の方だ。あの中には、クロのサインも、携帯電話も入っている。置いていくわけにはいかない。「分かった。確か一か所にまとめてあつたはずだし、まだ売られてないだろ」

階段を登りきると、窓があつた。どうやらすでに夜になってしまったようで、外は真つ暗だ。何があるかよく分からない。

せめて私が連れ去られた場所から近いのかどうかだけでも分かればよかったのに。無事ここから出る事が出来ても、帰れるかどうかも問題だ。私では馬車とか門前払いされる可能性が高い。

「おい、オクト。どれがアンタの荷物？」

考え事をしている間に、荷物置き場についたようだ。薄暗い部屋の中に、ごちゃごちゃと色んな荷物が押し込められている。鞆以外に置物などがあるが……全部盗品だろうか？統一感が全くない。

「これ。あとこの買い物袋もそう」

律義に拾ってもらえたようで、私の鞆と買い物袋は同じ場所に置いてあつた。鞆を首からかけ、両手で野菜たちを持ち上げる。

「ふーん。これが必要なもの？まあいいか。貸せよ」

ひょいと私から荷物を取り上げるとライはすたすたと出口へ向かう。

「取引したいんだろ？早く来いよ」

親切？

女の人でも投げ飛ばしたりと容赦なくせに、行動がよく分からない。重い荷物を持たせると、ただでさえ歩きが遅いのが、もっと遅くなると思ったのだろうか。

まあ案内してもらったまでの付き合いだし、どちらでもいいけど。私は置いていかれないよう、小走りでライを追いかけた。

## 6 - 1話 嘘つきな海賊

「船長入りますよ」

ライはノックし、ためらうことなく開ける。うん。緊張しているのは私だけと分かっているのだけど、もう少しゆっくり開けて欲しかった。

あの後さらに階段を上った私は、船長のいる部屋の前にいた。1階なら窓から逃げられるけれど、3階から飛び降りる勇氣はない。何かあったら、大人しく観念して、心の中で般若心境を唱えよう。死にたくないけど、暴走の末に死ぬのはもっと嫌だ。

「なんだ、ライか。どうした」

どうやら酒を飲んでいたようで、部屋の中に入るとアルコールの臭いが鼻を突く。船長は獣の特徴や長く尖った耳や紅い目をしていないので、たぶん人族だろう。黒髪に黒目とクロと同じ色だ。若いのか若づくりか知らないが、ロン毛を後ろで一つに束ねている。30代又は40代くらいだろうか。

「さっき俺が担当する事になった混ぜモノなんだけど、なんか面白い事知ってるんだって」  
「ほっ」

黒い目が興味深げに私を映す。その目は私の中に詰まっているものを見透かそうとしているように思えた。正直、もっと単純馬鹿な人を想定していたので冷や汗が出る。何で筋肉馬鹿の上司が狡猾そうなのだろう。こういうのは、NO.2とかで、船長は強いけどちよっとお馬鹿とかそういうものじゃないの?!……漫画の読み過ぎですね。すみません。

「オクト。アイツが、この海賊の船長。ちなみに魔法使いでもあるから、嘘とか止めた方がいいぞ」

大きな声で説明ありがとう。もう逃げたい。

だから何で船長が魔法まで使えるチートなわけ？そういうのは部下に任せろよと思うが、もし彼がNO.2だとしたら、どうして船長やらないんだろうと思ったはずだ。

それにしても夜なのに船長の顔が見えるぐらい部屋の中が明るいの、多分魔法の力だろう。簡単な魔法なのかどうかは分からないが、そんなに力を見せつけなくて欲しい。

「初めまして、混ぜモノのお嬢さん。俺はネロだ」

「えっ。アンタ、女?!」

「そんなことも分からないのか。男なら、女ぐらい見分ける」

それは無理だと思います。

自分で言うのもなんだが、5歳児の体はつるぺたなので男の服を着れば男にしか見えない。むしろ分かるネロの方が怖い。子供に女も男もないだろうに。これ以上無駄話の所為で、私の気力をそがれたくないの、早々に話を切り出す事にした。

「私はこの海賊で起こっている奇病の治し方を知っている。取引したい」

ネロの顔が楽しげなものになった。5歳児が取引したいなんて微笑ましいなあと思ってるならいいのだが、何となく面白い玩具みつけた と思つてそんな笑みに思えた。嫌だ、この人マジ怖い。そういうえば、アスタと最初にあつた時も凄く嫌な奴認定した覚えがある。魔法関係者はきつと頭がどこかおかしいに違いない。

蛇に睨まれた蛙のごとく、目がそらせない。嫌な汗が背中を伝う。

「ほう。あの呪いを解く方法を知っているのか。あれは魔術師でも解決できない奇病なんだがな」

「魔法は使わない」

それは解決させようと魔術師に無理やり協力させた結果なのか、一般論なのか気になる所だが、精神安定の為私は貝になる事にする。

「薬師も同じだ。治療薬らしいものを作らせたが、効いたためしがない」

「く、薬もつかわない」

作らせたという言葉に不穏なものを感じて、言葉がどもってしまふ。アスタは嫌なやつで済んだけど、この人は怖い。考えるな考えるなど呪文のように心の中で唱える。薬師がどうなったかとか、今後の参考の為としても、聞くべきじゃない。

「まあ奴なりに頑張ったようだから、薬師は奴隷商に売り飛ばしてやったはずだ」

何故、それを今教える。そしてそれは全然慈悲じゃない。なんだ、殺されないだけましだろってか?! 奴隷って最悪じゃないか。怖いよ。怖すぎるよ。私はライの服の裾を握り後ろに隠れた。

取引しようなんて馬鹿な発想でした。すみません。逃げていいですか？

「船長。混ぜモノをあまり苛めないでよ。精神が不安定になると暴走しやすいんだから」

「だから鍛えてやってるんじゃないか。そんな小さな形で取引しようところまで出向いてくれた褒美だ。俺なりの好意だからありがとう受け取れ」

いらんわ、このドSめ。そんな褒美、不燃ごみに出してしまえ。

早くアスタの家に帰って、引きこもりたい。……でもその為には逃げなければ。だけど普通に逃げられなければ、取引するしかない。あと少しの我慢だ。頑張れ私。

意を決してもう1度ライの後ろから前に出た。

「私が売りたい情報は、奇病の治療法。それと航海中に奇病を発生させない方法の2つ」

「えっ?! 治療法だけじゃないのか?」

ライの素っ頓狂な声に私は頷いた。その様子からすると、本当に



奇病の治療法は見つかっていないのだろう。後は私が想像している病気と同じである事を祈るのみだ。

「それでその情報と何を引きかえたいんだ？金か？」

私は首を横に振った。金はあるにこした事はないだろうけど、アスタに養われている今はいらぬ。今後貯めるにしても、できるだけ危険な橋を渡らなくても済む方法にしなければ、また同じような目にあう気がする。

「1つは、私を無事に家まで返して欲しい。もう1つは、今捕まっている女性の解放」

情報は2つ。条件も2つ。情報を考えれば、こんな条件なんてお釣りがくるぐらい些細なものだろう。さあ領け。ほら、領け。……マジで領いて下さい。お願いします。

「今捕まっているだけでいいのか？」

「うん。解放するのは、私が捕まっけてその上で取引をした事を知っている人だけでいい」

船長の言葉に私は領いた。正直、正義の味方にはなる気はない。

むしろ助けて欲しいのはこっちの方だ。ただし恨まれる悪役にもなりたくない。ただでさえ混ぜモノは嫌われているのに、ここで恨みまで買ったら、いつか暗殺バットエンドが待っているかもしれない。そういう危ない芽は早めに摘み取ってしまうべきだ。

ベストは毒にも薬にもなりそうにないと、放っておかれるようになる事。それは今後の努力次第でできるはずだ。

「ふーん。それだとこちらがお釣りが出そうだな。他に希望はないのか？」

……意外に公正な取引してくれるんだな。

人攫いをするぐらいだから、極悪非道には間違いないはずだ。実はいい人って事もないだろう。DSだし。もしかしたら取引する事に何か信念があるのかもしれない。

「また考えておく」

下手に条件を増やして、最初の条件が消されたら困る。特に何かしてもらいたい事はないので、このまま消えても問題ない。

「分かった。取引に応じよう。うちの船員の病状が回復したら、そちらの条件を叶えると言う事でいいか？」

まあ教えてすぐに、はいさよならはできない事は分かっていた。

すぐに治療が完了するわけでもないので、長期戦は覚悟の上だ。私は頷く。

「ではまず、治療法を教えてください」

「……その奇病の名前は【壊血病】。ビタミンCの欠乏により、タンパク質組成であるアミノ酸の1つが上手く作れなくなる。結果、血管の損傷などにより死にいたる」

「ちよつとまで。一体何話してるんだよ」

……何語って、何語だろう。基本は龍玉語だが、固有名詞は日本語だ。こちらの言葉であてはまるものを知らないのだから仕方がない。もしかしたら、まだその単語は生れてない可能性もある。そうするとやはり日本語を使わなければ説明できない。どうしよう。

「つまり、ビタミンCとやらを補えば、この病気は治るといふことか」

ネロの言葉に私は頷いた。そうだ。細かい話は抜きにして、とにかく治療方法だけ教えればいいのだ。この船長DSで怖いけど、魔法使いだから頭はいい。拙い説明でも何とか理解してくれるはずだ。「この病気は、干し肉などにはない栄養、ビタミンCの不足が原因。ビタミンCは野菜や果物に多く含まれている」

「なら果物のジュースとか野菜スープを飲めばいいわけ？」

「ビタミンCは熱を加えると壊れる。だから私は生のサラダやジュースでも、絞らたての方が効果的だと思う」

確かビタミンCは酸化も早かったはずだ。また水に溶けやすい原理を使って、ジュースとかの保存料に使われていた記憶がある。と

り過ぎは結石を作るが、食べ物から摂取するだけならとり過ぎほど食べる事はない。なのでとにかく食べる方式で大丈夫だろう。

「よし。分かった。今から、オクトを料理長に任命してやる」  
「は？」

「ようは食べ物改善すればいい話だろ。働いた分の給料も出してやるから、しっかり働け。上手く治ったら、航海中にならない方法とやらも聞いてやる」

かなり上から目線だが、何とか合格ラインに立てたらしい。まだ安心するのは早いと分かっているが、ホッと息をはく。

でも料理長はまずいよな。私の腕はそれほど良くないし、その上身長は足りないし、重たいものとも持てない。できないづくして涙が出そうだ。

あと少し頑張ろう。私は船長の説得を引き続きする事にした。

「先生。ベーコンはこれでいいですか？」

フライパンの上でカリカリに焼かれたベーコンを見せられ、私は頷いた。おいしそうな香ばしい臭いがする。

「先生。キウイ輪切りにできました」

「ありがとうございます」

私は頷きながら、内心ため息をついた。先生ってなんだ。私はそんなものになつた覚えはない。笑顔の海賊たちに若干引き気味になりながらも、私は皿に料理を盛り付けた。本日の朝食は鶏肉のオレソージソース煮とパン。カリカリベーコン入りサラダにじゃが芋のスープとキウイフルーツ。朝からヘビーだが、海賊たちはこれらをペロりと平らげる。2食しか食べないのに運動量が半端ないのだからと理屈としてはかっているが、見ているだけで胸やけしそうだ。ただし料理長に相談の上で、私が立てた献立なのでその感想は胸にしまっておく。

私自身は、サラダとスープと一口分のパンだ。アレは無理。

「いやー、すごい。先生の料理は本当に独創的だな」

「はあ」

「褒めてるんだから、もっと喜べって」

1 回りどころか、3 回り以上年と体格がかけ離れた調理長に背中を叩かれ、危うく椅子の上から落ちそうになる。独創的って褒め言葉だったのか。

「いや。作れるのは料理長のおかげ」

「よく解ってるじゃないかっ!!」

バンバンとさらに背中を叩かれ、私は椅子にしがみついた。大人と子供の力の違いにそろそろ気がついて欲しい。

「痛いから止めて。でもこれも、そろそろ終わりか……」

怒涛の日々を思い返せば感慨深い気持ちになる。よく生き残った。

2週間ほど前に船長に調理長任命された私は、慌ててその役目を辞退した。その後必死なお願いの結果、妥協案として献立は全て私が立てる事で一応話はまとまったのは奇跡といえよう。しかしそこからがまた大変だった。

今まで海賊のご飯なんて作った事がない私は、ビタミンを多くとする為のメニューは思い浮かんでもどう組み合わせればいいか分からなかったのだ。今までどんなものを食べていたかを聞きながら必死に献立をたて、その後ライに間に入ってもらい調理長達に作ってもらうという作業が続いた。

初めは私が混ぜモノである事と5歳児であることから意思疎通はなかなか上手くいかなくて、泣きたくなくなった。命の危険と隣り合わせな状態で頑張り、1週間後ぐらいから病状の改善が見られた時はホツとして泣きそうになった。そして海賊たちになんとか認めてもらえた時は正直泣くと思った。結局一度も泣いてないけど、涙腺が緩むぎりぎり状態になるぐらい私は必死だった。その後先生と呼ばれるようになり、今では献立の相談にも気軽に乘ってもらえる。本気でありがたい。

「仲間の病気が治ったら、出ていくって約束だもんな」

「先生。ここに残ればいいじゃないっすか」

いや、それはない。

涙もろい料理長が鼻をすすっているが、実際はそんなに感動できる場面ではない。なんといってもここは海賊の根城。根っから悪い人たちではないとは分かったが、元々私は人攫いにあつた被害者なのだ。仲間になる選択肢は絶対ない。それに犯罪者になるのは最後の手段。できるなら、捕まってバッドエンドコースなんて危険は冒さず、清く正しく生きたい。

「オクト、飯できたか？」

「完成したところ」

サラダにベーコンをまぶしたところで、ライが厨房に入ってきた。

「お、旨い」

「食うな」

「味見だつて」

何が味見だ。ライ達海賊の味見の量が半端ない事は、すでに知っている。こいつらの味見は味見の域を超えているのだ。そもそも何故鶏肉を食べる。そこはソースを舐めるべきだろ。

「運べ。大盛りにするから」

それでもそこを咎めても話が進まないのです、初めから他の餌で釣る方がいいと2週間で私は学んだ。

料理当番達とライに手伝って貰い料理を運ぶ。

「朝ご飯持ってきたぞ」

「待つてましたっ!」

ドアの向こうにはポーカーで遊んでいる海賊たちがいた。威勢のいい声が飛び、ヒューっと口笛まで聞こえる。これだけで、すでに病人ではないだろと思う。最近は何人も普段の仕事に混じっているわけだし完治したといつてもいい。

私はスープをよそいながら、いい加減ネロに会わないとな考える。すでに2週間もたつてしまったのだ。私を含め、捕まった女性達も限界に近いだろう。

最近見に行っていないけど あれ？

「……色々不味くない？」

「えっ、味が？」

ぼつりとつぶやいた言葉に、パンを配っていたライが反応する。

私はなんでもないと首を横に振った。

私は船長と取引して以来、ライと同じ部屋で寝起きしている。なので体的に問題はないのだが、あの牢屋に取り残された人たちは、

今もベットもトイレもないあそこに閉じ込められているのだ。あんな場所じゃ、発狂している可能性がある。

「ネロに会わないと」

もう一つの条件である、航海中にどうしたらいいのかを早く教えて、女性達を開放しなければ。病状は改善したのだから、もう信じてもらえるはずだ。少なくとも船長以外の海賊は、壊血病に関しては私を信頼してくれていると思う。彼らを味方につければ、何とかなるはずだ。

「船長かあ。今日客が来るらしいけど、それまでは本でも読んでるんじゃないか？」

海賊つてそんなに暇でいいものか。

もっと仕事しろと思ったが、すぐに私はそれを否定した。彼らの仕事＝犯罪。うん、仕事せずにただらだらしてて下さい。むしろ一生働くな。

「ライ、よろしく」

私は一人でウロウロする事を認められたわけではない。料理中は調理長や、料理当番がいるのでライから離れるが、それ以外はほぼ一緒だ。ある意味私もよく発狂しないなと自分で感心してしまう。

まあライは怖いけど、問答無用で怖い事をするわけではないから安心していられるのかもしれない。人に観察されるのは嫌いだけど慣れてはいる。

「じゃあ、船長の飯を持っていくついででいいか？」

別に飯のついでだろうと何だろうと問題はない。早いに越した事はないと思うので、頷く。

一通り配り終わったところで私たちは料理を持って、船長がいる部屋に向かった。

「そういえば、NO.2って誰？」

ふと私は、NO.2やライが倒したというNO.3に会った事がない事に気がついた。会いたいわけではないが、どんな人なのだろう

う。

「えーっと、副船長達は外回りの仕事で中だつたはず」

どうしてだろう。彼らがいう仕事は、不穏なものしか感じられない。……まあ海賊だからなんだろうけど。それにしても外回りって、何だか営業みたいだ。

「海賊の仕事って色々なんだ」

「そ、色々だな。船の修繕が終わったら、また航海に行くけど、それだけじゃないって事だな。海賊とその家族だけが住んでる島もあるんだぞ」

絶対近づかない方がいい場所ですね、分かります。

島がどれほどの大きさかは分からないが、それはすでに国家じゃないだろうか。私は周囲にどう思われようと、できる限り家に引きこもるべきだと悟った。彼らと二度と関わりたくない。

「船長、飯持ってきました」

ライは相変わらず中の返事を待たずに部屋に入った。敬う気があるのかなのかよく分からない。それでも船長が咎める事はないので、私としてはどちらでも良いんだけど。

「メニューは何だ」

ライがちらりと私を見た。どうやら私が説明しろということらしい。一応私が立てた献立だし、仕方がない。

「鶏肉のオレンジソース煮、カリカリベーコンサラダ、じゃが芋のスープ、キウイフルーツとパン」

私が喋ると、船長はようやくこちらを振り向いた。私がいると思わなかったようだ。少し目を見開いた後、にやりと笑う。嫌な笑みだ。私が必要最低限しか近寄らないようにしていた事を船長も分かっているのだろう。

「先生が直々に持ってきて下さったのか」

「……先生とか止める」

「どうしてだ？皆言っているのだから？」



ネロがいうと、嫌味っぽいんだよ。

心の中でののしるが、口には出さない。ビビりと罵られようと、私は私の命の方が大切だ。

「それでもできたら止めて欲しい。私は先生ではない」

「ふーん。それにしても来いと言っても、忙しいやらなんやらと言つて来ないくせに、今日はどういう風の吹きまわしだ？」

そんなの精神的に苛められる事が分かっていて、素直に近づくと私はMではないからだ。避けて通れる危険はできるだけ避けるに決まっている。

「献立を立てることに慣れていなかったのです。時間が取れず、申し訳ない事をした。今日来たのは、船員の病状が改善した事の報告と、航海中の病気予防方法を聞いてもらうため」

「まだ完治したわけじゃないだろ？」

「ほぼ完治した。それは他の船員も納得してくれている。もう普通どおりの食生活で問題ない。だからそろそろ女性達を開放する為の取引がしたい」

私を引き止めてもネロにとっていい事なんてないはずなので、これはただ嫌がらせだ。このドSな生き物は、きつと損得抜きで嫌がらせをする事に生きがいを感じているに違いない。マジ関わりたくない人種だ。

「そうか。言つてなかったな」

ぼんとネロはわざとらしく手を打ち鳴らした。ネロの笑顔を見ると嫌な予感しかしないのは何故だろう。何をされたわけでもないのに、顔が引きつりそうになる。

「女性はもう解放したぞ？」

「は？」

突然の言葉に私は理解が追いつかず、ぼかんと口を開けたまま固まった。

「オクトが壊血病を治してくれたからな。約束通り、1週間前ぐらいに解放してやったぞ。俺は、優しいからな」

いや、待て。おかしくない？

何故2つめの願いから先に聞かれているんだろう。大切なのは、私を無事に家まで送ってくれる事であって、そっちじゃない。そっちはおまけだ。

「伝えようと思ったのだが、お前は忙しいの一点張りで、全然来なかったからなあ」

「……ライに伝えてくれれば」

「俺は大切な事は自分で言う主義だ。そうでなければ、面白くないだろ」

大変いい主義だと思うが、最後についた言葉が残念だ。隠された言葉は、『相手をいたぶれなくて』に違いない。禿げてしまえ。

知っていて黙ってのかとライを見れば、首を横に振られた。どうやらきつちり分らないように隠していたみたいだ。その辺りからモドS感をヒシヒシ感る。

「とにかく……壊血病の治療が成功した事は認めてるということでもいい？」

これ以上考えても私が必要以上に疲れるだけだ。終わった事は仕方がない。私は色々無視して話を進める事にした。

「ああ。いい仕事だった。ご苦労だった。褒めてつかわすと言えばいいか？」

「言わなくていい。ただネロが、航海中の対策方法を聞けばいいだけ」

「それなんだが、それが効果あるとどうやって証明するつもりだ？」

あれ？

ネロの言葉に、私は雲行きのあやしさを感じた。嫌な予感しかない。

「壊血病に効くビタミンCとやらは、熱に弱く、果物や野菜に含まれているのだから？俺たちの航海は何日もかかるんだ。オクトが今までやった方法は海では使えない。つまりは教えようとしているのは今までとは違う新しい方法ということだろう。それが正しいか俺には分からない」

ならどうしろというのか……という言葉は絶対言わない方がいい気がする。証明する為には、実践しかないのだ。もしもここでどうしたらいいかを聞いたなら、航海についてこいという返答が返ってくるに違いない。

航海という密室空間に混ぜモノを入れるなんて正気の沙汰ではない話だ。それでもコイツはやると言ったらやる男だという事は身にしみて分かってている。こうなったら、『航海についてこい』という言葉を使わないように気を付けるしかない。

「ならば、交渉は決裂だ。女性の解放はもういい。私を家に帰せ」

「女性はもう解放した。それはできない話だな」

「私は私より先に女性を解放しろなどと言っていない」

「どちらを先にしろとは俺も聞いていないのだが？」

このやろつ。普通は他人より、自分優先だろうが。ネロはその事も十分分かってているはずだ。だから私に承諾を得る前に解放したに違いない。

「分かった。ならば教えた後に壊血病の事で何か不都合があれば、いつでも無償で相談にのる」

「海に出れば、一月は陸地に戻らないというのに、どうやって相談にのるつもりだ？」

ニヤニヤとネロが笑う。私が根競べに負けて、乗船を承諾するのを待っているのが見え見えだ。そんなあからさまな罠にはまってるかと思うが、逃げ道が徐々になくなっている気がするのは何故

だろう。

「……壊血病はビタミンCの欠乏により起こる病気。体にはある程度の貯蓄があり、それがなくなると、壊血病が発症する。しかし欠乏状態にまでには60日から90日はかかる。状態が悪くなる前に陸に帰ればいい。その時苦情を聞く」

それにしても、こいつのDS病は常軌を逸している。いくら面白いからといって、船長が船員の危険リスクを上げていいはずない。発症するまでの期間まで教えたのだから、この辺りで引いてくれないうだろうかと思いをかけて、私はネ口を見上げた。

「分かった。まどろっこしい言い方は止めよう。ここに残って、仲間になれ」

「船長?!」

「だが、断る」

ライの驚く声も無視して、私は反射的に答えた。

何でそうなる。私がじっと見つめたのは、仲間にして欲しいからじゃなくて、早く私の条件を受け入れるという意味からだ。何が悲しくて犯罪者にならなければいけないのか。

「何故だ?」

「それはこっちのセリフ」

むしろ何で引き受けると思っのか謎だ。

その様子を見て、ライはくすくすと笑った。くそつ。笑うんじやなくて私を助けてくれ。私はライを睨んだ。私を助けて海賊にさせない事が、将来海賊の命を救う事になるんだぞ。

「オクト、諦めたら? 船長は言った事はどんな手を使っても叶えるぞ」

「嫌」

私の答えは完結だ。絶対嫌だ。こうなれば問答無用で壊血病の予防方法教えておこつ。私が教えたら、私を家へ送るといふ事はネ口もちゃんと承諾した。言った事はどんな手を使っても叶えるならば、

必ず一度は家に戻してくれるはずだ。その後は私が引きこもって彼らに関わらなければ済む。あそこは王宮管理の寮だし、家には魔術師のアスタもいる。防犯もばっちりだし、何とかなるだろう。

「約束は果たしてもらおう。壊血病にならない方法は、航海の時にキヤベツを漬け物にして持っていく事だ。火を通さなければビタミンCは多く残る」

「……漬け物？」

「キヤベツを千切りにして、そこに2%程度の塩と、香辛料をいれて、上に重しを置いた料理。酸味が出てくるがこれは乳酸菌の働きで、腐敗ではない」

ネロが私の言葉に反応した。ドSより、知識欲の方が勝つたらしい。ライは、理解したのかどうか分からないが、ヘーと相槌をうつている。詳しい作り方と食べ方は料理長に教えておいた方がいいだろう。

「乳酸菌とはなんだ」

「……目に見えないほど小さな生き物。乳酸菌はその一種。人にとって害があるものは腐敗を起こし、害がなければ発酵を起こす。今回は発酵」

「精霊とも違うんだな」

「たぶん」

精霊＝菌だったら、私が泣けてくる。祖母又は祖父のどちらかが菌。いやいやいや。それはない。

コンコン。

ドアの向こうからノック音が聞こえ、全員がドアを見た。

「なんだ？」

ネロが声をかけると、ピラが開いた。うん。このタイミングだな。ライの場合は返事をまたないので早すぎる。

「船長に会いたいと客がきました。どうします？」

ドアの前には大柄の船員がいた。その後ろにフードを被った不審人物がいる。フードの奥にある顔はベネチアンマスクのようなお面を付けており、顔も分からない。背丈は小柄で、ライとそれほど変わらないくらいだ。……子供か、または小柄な種族なのだろう。

「何だ。もう来たのか。通せ。お前は仕事に戻ってろ」

この不審人物とお知り合いですか？

そういえば、今日は来客があるとライが言っていた気がする。まさかこんな不審人物とは思わなかったけれど。

私たちも一度出ていくべきだろうか。ライを見上げると、彼も驚いたようで、目を見開きマスクマンを凝視している。あの姿をみれば無理もない。

「また後で来る」

客なら仕方がない。私は出て行こうと踵をかえした。

「待て。ここにいろ」

「は？」

さっき、船員を追い返したじゃん。

私もまだご飯を食べていないので、できたら一度腹ごしらえをしたい。

「女どもを逃がしたのは、コイツが原因だ」

待て待て待て。どういう話の流れだ、それ。

今部屋にいるのは、私とライとマスクマン。私やライに言った言葉ではないという事は、マスクマンに対して話しかけているのだろう。捕まった女性の事を知っているという事は、つまり女性を攫う様に指示したのは彼か、その上司という事だ。

売りやがった。

私は一気に血の気が引いた。慌てて、ライの後ろに隠れる。依頼主が来る事が分かっていたら、キャベツの漬け物の件や欠乏症にな

る期間を先に教えなかったのに。今の私はネロにとって、さほど価値がない状態だ。このドSめ。最悪すぎだ。

「へえ。面白い混ぜモノはやっぱり君の事だったのか」

フードの奥から聞こえた声は思ったより高い。子供だろうか。マスクマンがフードを外すと、そこからキャベツ色の髪の毛が出てくる。

……凄く見おぼえがある気がするのには気のせいだろうか？

「またあったね。ドールちゃん」

マスクを外すと、そこには旅芸人一座で会った、キャベツ色の髪の毛の少年がいた。開いた口がふさがらないとはまさにこの事だ。状況がつかめず、茫然とする。

何故あの時の少年が、海賊の船長と知り合いなのか。いい身なりをしているし、犯罪者と関わりがあるようには見えない。

「王子……何でここに？」

「いつまでたつても、君らが仕事をしないから見に来たんだよ」

ライの口から出た、聞いてはいけない単語に私の気は一気に遠くなる。王……げふんという事は、彼はこの国で前から数えた方が早いぐらい偉い方だ。さらに具体的にいえば、アスタの寮の隣に住んでいたりするわけで。

このまま気を失えばいいのにと切実に思うが、残念な事に私の神経は図太かった。

「やはり、ライは王子の差し金か」

「そうだよ。役立ったでしょ？僕からの仕事が終わるまでは貸してあげるよ。ただあまり時間がかかるのは困るなあ。今回の仕事の遅れた分は彼女を貰う事で手をうつよ」

勝手にうつな。反射的に私は心の中で反論する。もちろん不敬罪になりたくないの、口にはしないけど。それにしてもなぜ王子と海賊が知り合いで取引までする仲なのか。意味がわからない。

「それは困る。俺は今、オクトと取引の最中だ。確かに仕事の遅れはこちらに非があるから、何らかの形で償おう」

私の意をくみ取ったかのように、ネロが反対した。正直意外過ぎて、マジマジとネロを見る。私の事はもう用なしで、ついに売られるのかと思っていた。

「人が嫌がる事が大好きという性格、いい加減に治した方がいいと思うよ」

王子の言葉に、私はすぐさま納得した。なるほど、だから反対したのか。

「お生憎さまだな。そういう性格じゃなかったら、海賊の船長なんてやらん。ただ今回は別だ。この混ぜモノは使える」

「……それなら、こちらもそれなりのお金を出すから売ってくれないかな？」

「やらんと言ってるだろ」

女性なら一度は夢見る憧れのシーンだろう。しかし私は2人の男に取り合いされても全然嬉しくなかった。きっと2人とも、私と関わりのないところで生きて欲しい人種だからに違いない。争うなら私と無関係なところで、無関係な話をお願いします。私なんて全然役立ちませんよと心の中で叫ぶ。

何故こうなった。

とりあえずネロがただの海賊ではないという事は分かった。国家権力と取引する海賊なんて普通じゃない。そして王子が何の理由もなく自分の国の女性を攫わせる事もないだろう。

「……騙された」

私は色々無駄な事をしていたのではないかと今更ながらに気がついた。





7 - 1 話 引きこもりな生活

引きこもりたい。

王子VS海賊なんて頭の痛いものを見せられて、私は逃げ出したくなった。ああ。もし私が魔法使い、または魔術師ならば、簡単にアスタのところへ帰って、引きこもりになれるのに……。

ふとその考えは凄くいいように思えた。そうだ。魔法使いになれば、こんな面倒事に巻き込まれずに、瞬時に逃げる事ができるはず。「オクト、あいつら止めてくれ」

「……嫌」

というが無理。関わりたくない。

私の事を話しあっているのは分かるし、ライの願いを叶えてあげたいが、近寄りたくない。巻き込まれたくない。私に自己犠牲精神を求めても無駄だ。

「ちょっと、賢者様。君の事を話してるんだよ。何他人事みたいなふりしているの？」

「ん？賢者なのか？」

無理に話に加わらせないで下さい。

しかも賢者ってなんだ、賢者って……。お前は私の事をいつもドールちゃんとかふざけた名前前で呼んでいただけ。そう呼ばれたいわけではないが、賢者なんて恥ずかしい呼び方も止めてほしい。

「私は賢者じゃない……です」

「でも、君のお父様にそうやって聞いたんだけど」

「へ？」

お父様？私の父は不明で……お父様？！

脳内検索が、1件のヒットを導き出した。お父様？と呼べなんて寒い事を言いだした魔族が確かにいた。

「アスタ？」

「そう。アスタリスク魔術師が、君が帰ってこないから仕事が手につかないとか言って、さぼるんだよ。だから正直、早く戻ってもらいたいだね。あの魔族、魔術師としてはかなり優秀だから、仕事をしないのは困るんだよ」

アスタが私を待っている？

もしかしたらさぼる口実ができてラッキー程度の発言かもしれない。それでも私の事を忘れたわけではないという事だ。

「帰ります……。帰りたいです」

そこに私の居場所があるならば、そこが私の帰る場所だ。

「ライが親はいないと言っていたが、嘘だったのか」

「……嘘じゃない。アスタは私を捨ててくれただけ」

養子縁組を勝手にされているらしいけれど、細かい事は知らない。実際アスタとの関係は親子は違うと思う。友人という関係でもない。主従という関係はアスタが否定している。あえてこの関係に名前を付けるならば……協力者だろう。

「少し遅かったというわけか」

「だからいい加減諦めててよ。そして早く僕からの依頼をこなしてくれないかな？」

そういえば、そうだった。王子は海賊に、女性を攫う事を命令していたのだった。何故という言葉が頭に浮かぶが、口には出さないように気を付ける。聞いてしまったら、おかしなことに巻き込まれるに違いない。ここは全力でフラグを回避するべきだ。

「それに賢者様は大きくなってからの方が、もっと面白くなると思うよ。彼女の親は魔術師であり、この国の研究者だからね」

ぞわぞわと鳥肌が立った。面白くなるってなんだ。ここで縁が切れたら、二度と関わるつもりないから。

「ふーん」

ネ口はニヤニヤと笑いながら、値踏みするように私を見た。この悪人めと罵りたいが、海賊にとってそれは果たして罵り言葉になる

のか。

「なら。将来就職する時は、俺のところに来い」

「海賊は、職業か？」

私の言葉にライが腹を抱えて笑いだしたが、そこは切実な問題だ  
と思う。会社員ではないだろうし、自営業でもない。船乗りではな  
く賊なのだから、ただの犯罪集団……。

うん、やっぱり二度と近づかない。

「ああ。いい職場だ。仕方がないから待っていてやる。ただし出て  
行く前に、料理長に先ほど話した予防方法を伝えておけ。それとラ  
イに手伝ってもらって、紙にも残せ。それがお前を家まで返す条件  
だ」

こうして、私はようやくネロとの交渉を終える事ができたのだっ  
た。

「先生。風邪引くなよ」

「先生、俺、先生が戻ってくるの待ってるっす」

いや、戻らないからね。

海賊って、人情が厚い奴が多いのだろうか。一緒に料理をした船  
員や、病気を治した船員たちが私をぐるっと囲っている。

というのも、私がこれから家に帰る所だからだ。

ネロとの交渉の後、ご飯を食べ、すぐさま壊血病の予防方法を紙に書く作業に取り掛かった。といっても、まだ文字を書く事が苦手な私はライにかなりご協力いただく事になった。その間紙を何枚か駄目にしてしまったが仕方がない事だと思う。早くこの世界でも鉛筆と消しゴムを開発して欲しい。

1日かかって何とかできたそれを料理長に説明した時には、どっぷり日が暮れてしまった。それでも何とか任務完了した私は、家に帰る為に王子様の近くにいます。

「ほれ。新しい野菜だ。持って帰れ」  
「ありがとう」

調理長に渡された買い物袋には、私がここに来る前に買った材料と全く同じ材料が入っていた。腐ってしまうので確かにここで使ったが、まさか新しくもらえるとは。意外に律義な海賊だ。

「これも持っていけ」  
ネロが麻袋に入った何かを私に投げた。野菜を下に置き、慌てて受け取る。小さな袋だが、思ったより重量があった。危ないだろ。頭に当たったらどうするつもりだ……と思ったけれど、どうするつもりかはすぐに想像がたった。強制的に助けられて、助けたお礼をせびられるんですね。分かります。

中身は何かと開いて、私は固まった。金貨や、宝石と思われるものが詰まっている。

「何、これ」  
「ん？知らないのか。黄金色の物が金貨で」  
「そうじゃなくて、何でこれを私に？」

この世界でも、金や宝石は高価なものだ。相場は知らないが、それが一般庶民ではなかなか手に入らないものだという事くらいは分かる。

「2週間の給料と、壊血病の情報料だ」  
「多すぎる。こんなに貰えない」  
「安心しろ。貰いものだ」

言葉は正しく使え。それは貰ったんじゃない、奪ったの間違いだ。そんなもの、国家権力の前で見せていいのかと思うが、王子はいたって平然としている。まあ海賊とお付き合いして、人攫いまでさせるぐらいクレイジーな王子様だ。盗品程度じゃ今さら驚かないのだろう。

「それと王子。オクトの親に、情報の値段相場をきっちり叩きこむように伝えておいてくれ」

「分かってるよ」

どういう意味だそれ。私がまるで価値観がずれているような言い草だ。納得できないが、麻袋を突き返しても受け取ってもらえそうにないので、鞆の中にしまう。

後から返せって言ったって、知らないからな。けっ。

「そろそろいいかい？賢者様」

「……私は賢者じゃないです」

「ならなんと呼んだらいいのかな？」

「オクト。……とお呼び下さい」

王子に手を引かれて、幾何学模様が書かれた場所へ移動する。野菜はライが持ってくれた。流石に片手では運べないのでありがたい。幾何学模様の中心に来ると、ライは荷物を私の足元に置いた。そして自身は模様の外へ出る。

「ライ、引き続き頼むよ」

「分かりました」

王子の言葉にライが膝を折る。

「我が名はカミュエル。我が声に答え、繋げ」

石墨かなにかで書かれただけの模様が、声に反応したかのように緑に輝いた。

次の瞬間目の前からライや海賊たちが消える。それどころか先ほどまであった天井が満天の星空に変わってしまった。啞然として見渡せば、目の前には見覚えのある宿舎があった。

帰って来たのだ。

そう理解できるまでに数秒かかってしまうほど、一瞬の出来事だった。

「転移魔法？」

たしかアスタも私を引き取った初日に使っていた。

「転移魔法には違いはないけれど、今のは魔法使いでなくても使えるものだよ。魔法陣に使用者の名前や情報、転移先が細かく書かれていて、式を間違えたりしなければ誰でも使えるかな。ただし開発段階だから、誤作動がよく起こるんだよね。まだ実用には程遠いかな」

「誤作動？」

「多いのは体の一部だけが転移されえしまったり、移動先で上手く体の構築ができないとかかな」

発動しないとかじゃないんだ。……めちゃくちゃ物騒な魔法だな。上手くいったからいいものの、できるならば、時間がかかってももっと確実な移動手段を選んで欲しかった。

「今みたいなものを、アスタリスク魔術師は開発しているんだよ。さあ、お帰り。家で彼が待っているよ。本当は君ともう少し話したいけれど、今日返さないと1カ月有給を貰うと言っていたからね」

「ありがとうございます」

私は王子に頭を下げた。できたら二度と関わりたくないが、彼のおかげで助かったのも事実だ。下手したら、私は今頃海賊に強制ジヨブチェンジだった。笑えない。

「失礼します」

私は買い物袋を拾うと、部屋へ向かって歩いた。久しぶり過ぎて、少しドキドキする。アスタは本当に私を迎え入れてくれるだろうか。

「そうだ。オクトさん」

「なんですか、王子？」

「私の事は、カミュとよんで欲しいな。じゃあまたね」

一瞬で王子の姿が消える。きつと転移魔法だろう。今度は先ほどと違い足元に魔法陣もない。カミュ王子は魔法使いなのだろうか？しばらく誰も居なくなつた場所を見つめていたが、意を決して私は家へ向かう。

ようやくたどり着いたそこは、記憶と全く変わりなかつた。当たり前だ。まだたった2週間しかたつていない。でもたった3日で、人生が変わってしまうことも私は知っている。

カミュ王子はアスタが私を待っていると言っていたが、今もそうだろうか。もうどうでもいいのではないだろうか。私は混ぜモノで、何にも役に立たない。

ぐるぐると駄目な可能性ばかりが浮かぶ。でもそうやって心の準備をしなければ、もしだめだつた時に私は精神を安定させてもらえない。

ガチャ。

ドアの前で悩んでいると、先に扉が開いた。中から出てきたのは、記憶と全く変わらないアスタだ。少しだけ驚いたように目を見張つたが、紅い瞳を細め、私を見下ろした。

「おかえり。遅かつたな」

何気ない言葉だ。でもその言葉だけで、私は大丈夫だと思えた。

気が抜けると同時に体がくすれ落ちそうになる。思った以上に神経が張っていたらしい。少しふらつくと、アスタが私の体を支えた。

「ただいま」

ようやく私は帰ってきた。



## 7 - 2 話

ああ、引きこもり最高！

「ふーふーふーん」

私は鼻歌交じりにパスタを茹でながら幸せを噛みしめていた。1週間ほど前まで海賊のお世話になっていたころを思うと、涙が出るほど幸せだ。本まみれの台所だけれど、私にはここが楽園に思える。そして何より外出に恐怖を覚えた私が冷蔵庫や冷凍庫を魔法で作れないのかとアスタに頼んだら、あっさり作ってくれた事も嬉しい誤算だった。機能などを説明したら、魔法石を使えばできるとの事よく分からない原理を使っではいるが、冷蔵庫と冷凍庫に変わりはない。アスタ様様である。おかげで、買い物も週1回行けば十分になった。生の肉や魚も簡単に使えるようになった事もありがたい。駄目人間で結構。ニート生活最高！今なら声高々に言える。……褒められた事ではないが。

「オクト、おはよう」

「おはよう」

だらしなくあくびをしながら、アスタは寝室からやってきた。目がまだぼんやりしているが、積み上げられた本に躓かないのは流石だ。

「今日は何？」

「ナポリタンと、温野菜サラダとコーンスープ。もう少し待ってて。パスタのお湯を捨てながら答える。いつもならば、アスタが起きてくる時間にはでき上っているのだが、今日は珍しく早い。」

「いいよ、ゆっくりで。それにしてもオクトが帰ってきてくれてよかったよ。この時間の食堂は混み過ぎていて行く気になれないし、

数週間どれだけひもじかったか。部屋で食べられるこの幸せ」

「そこは食堂に行け」

私の事を探していてくれた話しは少し聞いたが、この話を聞くと娘として探されていたのではなく、飯炊き要員として探してくれていたように感じる。いや、やるべき仕事がつて、頼りにされてるのはいいことで不満があるわけではないのだけど。それでも何だか微妙な気分になる。……男を捕まえるには胃袋からという話を前世かどこかで聞いたからだろうか。

「今更嫌だよ。起きてすぐ身支度して、混んでいる食堂でもみくちやにされるあの辛さ。そして食べ終わったら、また着替えてから出勤しないといけないって、馬鹿げてるだろ。そんな時間があれば、俺なら寝るね。本当に貴族って面倒だよなあ」

そもそも、自分で料理を作らず毎食外食できる事がすでにセレブ的発言なんだけどもと思わなくもないが、実際セレブなんだから仕方がない。もっとも王宮に仕えていてなおかつ宿舎を使っている人は一人身男性が多いので、必然的に食堂が繁盛するのだけれど。

「そんなに嫌なら、使用人を雇えばよかったんじゃ……」

「他人を入れるなんてもつてのほか」

私も他人なんだけどもなあ。

そう思うが、ここで捨てられたら困るので黙っておく。今の私を置いてくれそうな場所は、ようやく逃げ出せた海賊だけという事実がづらい。

「何より、飯がマズイのは許せないだろ。美味しくなかった時の絶望感といたら、一日やる気がなくなるよ」

作ってもらっておいて、その言い草はないだろ。

そもそも、私を引き取るまでは使用人に作ってもらう又は食堂での食事だったはずだ。それでも仕事をしていたのだから、仕事をさぼりたいがための、いいわけにしか聞こえない。

新聞を読みながらうだうだ言っている駄目親父を私は横目で見ながら料理を進める。これで仕事ができるというのだから詐欺だ。

仕事仲間の人たちの心中お察しする。

「そつだ。右と、左どっちがいい？」

テーブルの上に料理を並べているとアスタが何やら封筒を取り出した。どちらがいいというか、それが何かも分からない。……私はじつとその二つを眺めた。

「何それ」

「運だめしかな」

おみくじみたいなものだろうか？

右の封筒も左の封筒も真っ白で同じように見える。蠟に押された印が唯一違うが、家紋など知らないので結局どこから届いているのか分からない。

「さあどっち？」

「……右」

ただどちらを選んでも嬉しくない事が待っていそうなのは何故だろう。正直選びたくない。それでもにっこり笑顔で言われて、私はしぶしぶ右を選らんだ。

「よし。じゃあオクト、ご飯食べたらドレスに着替えておけよ」

「へ？」

「7泊8日。豪華伯爵邸への旅、大当たり」

……は？

ぼかんと私はアスタを見た。封筒から手紙を出しほらと見せてくれるが、達筆過ぎて龍玉語初心者である私には読む事ができない。

「ちなみに左だったら、王子様と楽しむ夜会の招待状だったんだけどな。こっちは断り入れて置くよ」

「む、無理っ！」

「えっ？夜会の方が良かった？」

「違う。どっちも無理」

伯爵邸というのは、きつとアスタの実家の事だ。私は混ぜモノであるばかりか、アスタの婚姻を邪魔したという注釈までつく厄介者。今のところ暗殺はまではされていないが、居心地は悪いに決まっている。そんなところで神経すり減らしたくない。

かといって、王子様と楽しむ夜会なんてもつての外だ。2度と関わりたくないと思いを立てている相手の夜会なんて何が起きるか分からない。そもそも何がどうして、そんな招待状が届くの。混ぜモノが王宮に入ってはいけないはずだ。というか、入れるな。

「そんな我儘言っちゃ駄目だよ。ほら、座って。まずは冷める前にご飯食べようか」

我がままの一言で片づけられるような話題ではないはずだが、アスタの言う通り、できたての方が美味しいので私も席に座る事にする。

「伯爵、つまり俺の親なんだけど、前々からオクトを連れてこいつで言ってたんだよ。ちよつと今回迷惑をかけたから、流石に断れなくてね」

「迷惑？」

「些細な事だけだな。まあ、とにかく、一度ぐらいは挨拶しても罰は当たらないだろ。俺も有給を使い損ねているから丁度いいしね」

「ならせめてもう少し早く言っただけいい」

確かに養子として引き取られているのだから、例え毛虫のように嫌われていようと、礼儀として一度は挨拶すべきだとは思っている。思うが、心の準備どころか、何にも準備もできていない。

冷凍庫は問題ないけど、冷蔵庫の中身は7泊8日はもってくれないと思う。精神的に疲れた状態で帰ってきて早々、とろけた野菜やしなびた何かと対面したくない。

「だって今決めたし。それに夜会でも旅行でも可能なように、今日わざわざ早起きして上司に有給出してきたんだよ。俺ってば偉い」  
「物には計画というものがある」

無計画は威張れることではない。

そういえば、私を引き取った時も急だった。その日のうちに寝る場所もないここへ連れてきた事を思うと、計画的とはとても思えない。座右の銘は無計画。それで人生上手くいくだと？……禿げちらせ。

「ちゃんと計画立ててるよ。旅行の場合は、着替えた後に伯爵邸に転移するつもりだし。夜会の場合は夜が遅くなるから、これから2度寝するつもりだったし」

そんなもの計画とは言わない。

「……伯爵邸への訪問の返事は？」

「えっ。実家だし、いらないだろ」

駄目だコイツ。

いきなり泊まる人数を増やされて、慌ててベッドメイキングするメイドさんや、食数を変更される厨房の方々の苦勞がしのばれる。

「連絡、お願いします」

すでに私に対する好感度は、混ぜモノでマイナス。さらにいきなり養女になって結婚妨害したことでマイナスと、マイナス続きだ。

これに無計画までプラスされたら、もう挽回の余地なしだ。そもそも挽回は無理かもしれないけれど、私の責任ではない所で常識無とされてマイナスはされたくない。

「我儘だなあ。まあいいけど」

我儘はどつちだと思うが、ここでツツコミを入れても話が進まない。アスタが行くと決めたら、行くしかないのだ。私はナポリタンを食べながら、冷蔵庫の中身をどうするか考える事にした。



## 7 - 3 話

『良ければ食べて下さい。いらなければ、捨てて下さい。アスタリスクの娘より』

私は隣の部屋の玄関前に常温でも構わない野菜や果物、そして夕食用に作ってあった焼き菓子を置いておいた。本当は外に置くのは気が引けるが、両隣とも奇怪な音や声があるので、声をかける勇気が出ない。きつといらなかつたら、処分してくれるはず。

何度か手紙を読み返して、誤字がない事を確認した私は部屋に戻った。

「そろそろ行くよ」

部屋に戻ると、正装したアスタが椅子に座って本を読んでいた。片づけは全て私1人で行っているのでも優雅だ。ここで紅茶かコーヒーでもあれば絵になるのだが、生憎すでに片づけを終えているので、今更カップを出す気にはなれない。

ん？……絵になるって、コイツ美形だったのか？！

今更ながらの発見である。いつも適当な服、または王宮指定の魔術師の制服を着込んでいたので、全く気がつかなかった。

「どうした？」

美形で、金持ちで、将来性のある職業……伯爵邸では、土下座を準備しなければならぬかもしれない。これならきつと、2度目とはいえ、結婚話もかなりあったはずだ。

「えーっと、ああ。そういえば、息子さんもいるの？」

「アイツは学校だよ。今年院を卒業したら、伯爵邸に戻ると言っていたな」

思っていたより大きな息子らしい。アスタが結構若く見えるから、私と同じくらいか少し上ぐらいの年齢だと思っていた。いや……待てよ。私は何か根本的な見落としをしているんじゃないだろうか。

「準備はできたみたいだね。行くよ」

「へっ、ちよつと待って」

アスタに肩を叩かれる寸前に自分の鞆を手を取った。

そして次の瞬間目の前の景色が変わる。先ほどまで部屋の中이었다はずなのに、目の前には大きな屋敷がそびえたっていた。その向こうには山が見える。

私が今住んでいるアールベロ国は山に囲まれた地形をしていた。それでも王都は平野であり、山などない。むしろ海が近いそう。まだ一度も行った事はないけれど。

「山が珍しい？」

「珍しくはないけれど、王都と全く違うから……」

「ここは王都よりも西に位置している場所だよ。あの山も含めてこの辺り一帯が、伯爵家の領地かな。この通り山も近いから、秋には樹の神の恵みに感謝して大々的なお祭りをやるよ」

きよろきよろと見渡していると、アスタが説明した。

この国の貴族の役目は大きく2つに分かれる。領地を守りその土地を治める公爵、伯爵。王都で王を守り政治を手伝う、男爵、子爵もちろん男爵が領地を持っていたり、公爵が政治に関わっていたりもするが、基本はその形である。それについては、知識として知っていた。しかし山も領地とは、伯爵というのは一体どれぐらいの規模を納めているのだろうと遠い目になる。大きな屋敷は想定内だが、領地まではあまり考えていなかった。

「良かったら、後で山も探索するといいわ。魔の森と呼ばれるところ以外だったら、ちゃんと道もできているしね」

「魔の森？」



「そこに入ると、道に迷いやすいんだよ。だから魔の森と呼んで誰も入らないんだ」

なるほど。きっと磁場が狂っている場所なのだろう。魔の森なんて言うから、魔物が出るとかだったらどうしようかと思った。

ただ……そもそもこの世界に魔物はあるのだろうか。RPGもどきな世界だけど、魔物を倒して金貨やアイテムを得るってエグイしなんだか嫌だ。それはゲームの魔物と同じく嫌われ者の立場だから、余計にそう思うのかも知れない。

「おかえりなさいませ、アスタリスク様、オクトお嬢様」

突然ドアが開いたかと思うと、執事とメイドが屋敷から出てきた。メイドさんの頭には獣耳があるが、アレは本物。思わずドン引きしかけてしまったのは、思わぬ前世知識の伏兵だ。

「荷物をお持ちします」

アスタが荷物を渡したのを見て、私も渡すべきかと迷う。できたらお守り達が入っているので、持っていたい。それにメイドさん達も混ぜモノの荷物など持ちたくないだろうし……。でもそれはマナー違反になるだろうか。うーん。

「オクトの荷物は別にいいよ」

困惑していると、アスタが先に断ってくれた。どうやら荷物を渡さなくても、タブーにはならないようだ。ほうと息を吐く。そういえば、アスタの家に引き取られてから、マナー的なものは何も教えてもらっていない。……これ、結構ヤバいんじゃないだろうか。

「かしこまりました。それではアスタリスク様、旦那さまがお嬢様共々お呼びでございますので、ご案内いたします」

とうとうこの時が来たか。私はぐくりと唾を飲み込む。

色々好感度がマイナス続きだったが、そこにマナー知らずというマイナス項目が加わった。これはきつと土下座どころか、スライディング土下座レベルに違いない。ああ、私の人生終わった。

「オクト」

アスタは私の手を掴むと、ずんずんと屋敷の中へ進む。どうやら二の足踏んでいた事が、ばれていたみたいだ。やってしまった。どんな理由であれ、混ぜモノの私を引き取ってくれたアスタに迷惑をかけるわけにはいかない。たとえステイディング土下座をする事になろうともだ。

「あつ、あの……ごめ」

「心配しなくても大丈夫だから」

謝ろうとしたが、その言葉にアスタが別の言葉をかぶせてきた。

「オクトはただ隣にいればいいよ」

「……そういうわけにはいかない」

確かにマナーも知らない自分は、これ以上粗相しない為にもあまり話さない方がいい。しかしアスタに引き取られる事を最終的に決めたのは私だ。ならば自分の口から謝罪をするのが筋というものだろう。

「オクトは堅いなあ」

たぶん、アスタが緩すぎるのだと思う。

「こちら手前に段差がございますので、足元にご注意ください」

歩いていると執事が真面目な顔で教えてくれた。

……まだ若いから大丈夫なだけだ。アスタも息子さんの話を考えると、実は若づくりなおっさんな気がするが、足元が覚束ないほど高齢でもない。

「あ、ありがとう」

色々ツツコミはあったが、とりあえずお礼を言う。

気の使いどころが若干おかしい気がするが、混ぜモノに対する嫌悪感をおくびにも出さないと、かなりできる執事だ。品良く飾られた置物も高価そうだが、このサービス精神あふれた社員教育も馬鹿にならないくらいお金をかけているに違いない。流石、伯爵家。

「オクト。使用人に、礼とか言わなくてもいいから。まあ慣れない

だろうし、この家の中ならいいけど、外は駄目だからね」

「……はあ」

御礼も満足に言えないとは、貴族マナー難しすぎる。それにしても、今までの人生の中での扱いと百八十度違う周りの対応が、恐ろしい。私、アスタに引き取られただけで何もしていないよ？

世の中ギブアンドテイクのはずなのに。あまり親切にされると、何かあるのではないかと恐ろしく感じる。……早々に帰って引きこもりたくなった。

「こちらの前で少しお待ち下さい。旦那さま、アスタ様とオクトお嬢様がお見えです」

「通せ」

ドアの向こうから、洪い男性の声が聞こえた。

とうとう伯爵様とのご対面だ。手が汗ばんでくる。ぬるぬるしたらごめんと心の中でアスタに謝っておく。

部屋の中には、アスタをほんの少しだけ年を取らせたような魔族が居た。髪の毛をオールバックにしてきっちり固めている為老けて見えるが、皺とかを見るとアスタのお兄さんと言ってもおかしくないように思う。でもきつと彼が、アスタのお父様である伯爵だ。

「父上、ただいま戻りました」

アスタが敬語使っている?!

私は慌てて背筋を伸ばした。絶対粗相するわけにはいかない。

「……そちらの娘が、例の子供か」

アスタと同じ紅い瞳が私を映す。そこには嫌悪もないが、好意もなく、観察されているような気分になった。怖いんですけど……泣いていいですか？

「そうです。俺の娘の、オクトです」

アスタに紹介された私は意を決した。そうだ。泣いている場合じゃない。こうなったら、やるしかない。大丈夫。私はできる子だ。

「このたびの事は、すみませんでした」  
私は日本の文化、土下座をしようと、膝をついた。先に謝ったものの勝ちである。

が、すぐにアスタに首根っこをつままれ持ち上げられてしまった。これでは土下座ができないんだけど。

抗議しようとアスタを見れば、彼は凄くいい笑顔をしていた。でも目が笑っていない。

「何をしようとしているのかな？」

「えっ？……謝罪……です」

無表情の伯爵様より、アスタの笑顔が怖い。泣きたくなったが、ギリギリのところ堪える。なんとか敬語を使ったのは、自分で自分を褒めてあげたいくらいだ。

そんな私を見て、アスタは大きなため息をついた。

「何の謝罪だよ。いらぬから。父上もオクトが怖がっているの、いい加減笑って下さい」

そんな無理に笑って貰わなくてもいいですから。

アスタが抱っこする感覚で私を腕に座らせた為、伯爵様と視線が同じになる。紅い瞳にじつと見つめられて、だったらと冷や汗が流れた。目をそらす事も出来ない。

「アスタ……リスク様。別に、私は」

大丈夫ですと言おうとしたところで、伯爵様がニタリと笑った。その笑みはどこか邪悪で、ぞわぞわと鳥肌が立つ。

ああ、引きこもりができた生活が懐かしい。私は魔王のような笑みに、そのまま気を失ってしまいたいと切実に思った。

8 - 1話 不思議な伯爵邸

「父上。オクトが、驚いていますから、悪人面は止めて下さい」

「……そうか」

驚いたを通り越し、いつそ恐怖を感じていたのだが、伯爵様の少し残念そうな声を聞くと首をかしげなくなった。あれ？もしかしていい人？

「本当よねえ。この人、顔の筋肉が退化しているからごめんなさいね」

っ?!この人いつの間に？

喋りかけられた事で、初めて伯爵様のななめ右に女性が居る事に気がついた。茶色の髪に紅い瞳をした細身の女性は、伯爵様やアスタのような派手な顔ではない。不細工とかそういう事もなく、少し垂れ目だなあとは思うが、普通だ。あまり特徴のない顔立ちといえはいいのだろうか。

「母上も、気配を消すのはおやめ下さい」

「あら、嫌だわあ。私はそんな事してなくてよ。普通にここで立っていただけよ」

「母上の普通は、俺らと違うんです」

普通に立っていたっけ？

記憶を探るが、伯爵様ばかりに気を取られて、全く記憶に残っていない。良くも悪くも伯爵様が濃い方なので、余計影が薄く感じるのだろう。アスタとはあまり似ていない母親だ。

「初めまして、オクトちゃん。私はアスタリスクの母親のウェネルティよ。ウエネお婆様？って可愛く呼んでね」

……訂正。彼女の性格が、まるっとアスタに引き継がれている。

「駄目です。まだ俺も、お父様？って呼ばれてないんですよ」

「あらあら。アスタちゃんったら、とんだ甲斐性なしね。引き取ってから結構経つでしょうに」

「こちらにも色々あるのです」

伯爵様は、この頓珍漢な会話の間も、表情筋を崩さず、じっと私を見ていた。表情筋が退化しているのは本当かもしれないが、伯爵様の意図が見えない。

「あ、あの。アスタ……リスク様。降ろしていただけないですか？できれば、伯爵の視界から消えたいですといたいところだが、それは無理だろう。ならばせめてまっすぐ見つめ合う状況だけは回避したい。」

「えー」

…何で泣く。痩せており、発育も悪いので、普通の5歳児よりは軽いと思う。それでも、紙のように軽いかと問われればそうではない。降ろしてしまった方が楽だろうに。

「アスタちゃんが嫌なら、お婆様の方へ来ない？」

「……ご遠慮します」

幼児扱いされるのは初めてではないだろうか。

正直、恥ずかしいよりも、どうしたらいいのか分からないのか分からず困惑してしまう。ウエネに何か思惑があるのかどうかも、まだ分からない。

「そう。残念だわあ。娘はお嫁に行ってしまうていないし、アスタちゃんもヘキサちゃんも、だっこさせてくれないし。男の子って嫌ねえ」

ウエネは小柄ではないものの、アスタより小さく細身だ。抱っこするのは体格的に無理なように感じた。

「そういう事を言うから、ヘキサも学校の寮に入るんです」

学校という事は、ヘキサさんというのは、まさか今年院を卒業するアスタの息子の事？！

いや、その人も物理的に抱っこは無理だと思う。このお婆様、色々常識が吹っ飛んでいる。

「酷いわ。アスタはいつも私を苛めるんだから。オクトちゃん、お婆ちやまを慰めてえ」

「とにかく、オクトも俺も長旅で疲れているんです。話がそれだけでしたら、失礼しますよ」

どうしても抱っこがしたいのか手を伸ばしてきたウエネに、アスタはピシヤリと拒絶すると、少しだけ距離をとった。もしかしたら、アスタが私を抱っこしているのは、ウエネ対策かもしれない気がつく。でも、何で？

「待て」

伯爵が低い声でアスタの動きを止めた。伯爵様の視線は、私に向いている。その紅い瞳が怖くて逃げ出したくなっただが、ぎりぎりの所で目をそらさず踏みとどまった。罵られたって仕方がないと覚悟してここまでできたのだ。

さあ、どんとこい。思う存分罵るがいい……嘘です。少し手加減してくれとありがたい。

「私の名は、セイ・アロツロという」

「……オクトと申します」

伯爵様が名前だけ言っただけで、じっと私を見つめたので、慌てて空気を讀んだ。たぶん、名乗ればいいんだよね？間違っていないかドキドキする。自己紹介が必要なら、名を名乗れと分かりやすく命令してくれればいいのに。ちゃんと空気が読めるかヒヤヒヤものだ。

「私の事はセイお爺様？と呼びなさい」

「……貴方もですか」

私はアスタの腕の中で、どっと疲れを感じた。

「貴族つてめんどくさい」

私は伯爵家2日目の朝にしてすでにうんざりしていた。

何故1日に何度も服を着替えさせられているのだろう。夜の寝巻に着替えるのは理解できる。起きてから部屋用のドレスに着替えるまではまだ納得できた。しかしその後外出するわけでもないのに、3時のお茶の時間に1度着替え、夕食時にまた着替える意味がわからない。アスタに言わせると貴族の女性は、お茶と夕食の間にもう1度着替える事もあるそうなので、まったくもって理解不能だ。

貴族の方々に1度問いたい。何故着替えた？と。

これでは、着替えだけで1日が終わってしまう。しかし貴族の生活はそれで構わないらしい。と言うのも、家事などは全てメイドや執事がやってしまうので、家ではやる事がないのだ。なんて恐ろしい生活。女性が唯一してもいいのが、刺繍又はレース編み。……これだけって、何、その拷問。

「私も働きたい……」

やる事がない事が、これほどつらいとは。

いや、アスタとの生活でも感じていたけれど。仕方がないので、文字の練習をしているが、つらい。そろそろ飽きてきた。かといって、我儘を言つてメイドさんを困らせるわけにもいかない。一緒に窓ふきさせて下さい何て言ったら、メイドさんが怒られそうだ。実際、服の着替えの手伝いを断ったら、泣きそうな顔をされた。……あれは申し訳ない事をした。

文字の練習にも飽きた私は、紙を正方形に切って、折り鶴を折りながらため息をつく。これではボケそうだ。何か私でもできる事は



ないだろうか。

「そういえば、山に行ってもいいとかってアスタ言ってたっけ」  
窓の外を見て、来た時にアスタが言っていた事を思い出した。

山で何ができるか分からないが、家の中でじっとして、文字の練習を永遠としているよりはマシのように思えた。

『メイドさんへ。いつも、ありがとうございます。プレゼントです。オクト』

手紙と折り鶴を机の上に置くと、私はドアの方へ向かった。1人で窓から脱走という手もあるが、迷惑がかかる事も分かるので、正式にアスタにお願いするつもりだ。安全運転第一。危険は冒さない。それが誘拐された時に学んだ事だ。危険なフラグは全て叩き折るに限る。

「オクトお嬢様、何かご用でしょうか？」

廊下に出ると、笑顔の執事にはったり会った。何故いる。

他意はないと思うが、監視を付けられているように感じた。アスタが一人暮らしをするのもよく分かる。

「アスタ……リスク様に会いたいのですが」

「アスタリスク様は、早朝から外出なされております」

何だって？

咄嗟に逃げやがったと思ってしまったのは、仕方がない事だと思う。きつとここでの生活に耐えられなくなったに違いない。

さて、アスタがいなくなると、誰に外出の許可を取ったらいいのだろうか。

「それとオクトお嬢様。我々に敬語は不要でございます」

「そう言われましても……」

敬語で話されると、敬語を返さなければと思ってしまう。特に私は、アスタの養子という立場だ。政略結婚にも使えない私では、今後もずっと養子でいられる保証はない。そう考えるとあまり無茶はできないように思う。いつか私も彼らと同じ立場……むしろ混ぜモ

ノである私は、彼ら以下になる可能性大だ。その時、今無茶をやった事が巡り巡って私に返ってくるとも限らない。

うん。礼儀は忘れちゃいけない。

「あの。少し山へ散策に行きたいのですが、どうしたらいいですか？」

濃い緑の髪をした執事を見上げると、小さくため息をつかれた。敬語はそんなに駄目ですか？

「……旦那様に許可をいただくのが一番かと思います」  
マジか。

いきなりボス対決とはついてない。外出を諦めるべきかと思うが、アスタと明日会えると限らなければ、会いに行くべきだろう。いくら引きこもり生活が好きでも、至れり尽くせりでやる事なし生活は拷問だ。1週間これが続くのは勘弁したい。

「分かりました。伯爵様はどちらに見えますか？」

「ご案内させていただきます」

執事が礼をしたので、慌てて私も礼をし返すと、また困った顔をされた。もしかして、これも駄目ですか？

……本当に貴族つてめんどくさい。

思った以上に軽々と難関を抜けました。……おや？

外出したい旨を伯爵様に伝えると、あっさりと許可が下りた。仕事に忙しいようで、机に張り付いてこちらを見なかったけど、たぶん大丈夫なはず。「ああ」は肯定だね。天気を聞いても同じような返答をしそうだったけど。

混ぜモノがウロウロするのは外聞も悪いだろうし、反対されるかなとも思っていたのでありがたい。

「きつと、アスタリスク様が事前に伯爵様をお願いして行かれたんだと思いますよ」

「そうなんですか？」

「アスタリスク様は、先を読んで動かされる方ですから」

……ん？アスタってそんなに君子みたいな人だっけ？頭は良いのは確かだけど。

どうやら、親馬鹿ならぬ、使用人馬鹿フィルターがこの執事にはかかっているようだ。私の知っているアスタは、片付けと家事ができず、無計画の権現。先を読むって、嘘を付け。

「そう……ですか？」

夢は壊してはいけないだろうと私は曖昧に返事した。夢を見るのは個人の自由だ。

「ええ。昔から神童と呼ばれていた賢いお方です。この伯爵家は過去に経済的に苦しい時期がありました。しかしアスタリスク様が王都での魔術師になる事を選び、その知識をこの地域の発展に生かして下さったおかげで、立て直す事ができたんですよ」

我儘かと思っただが、意外にいい奴だ。

ただしここにも、フィルターがついている可能性は高い。自分勝

手にやりたいから王都で魔術師になり、伯爵家がつぶれると自分も大変だから、知識を横流した……。何でだろう。こっちの方がしっくりきてしまう。

「へえ。そうだ。あの、外出するにあたって、服を着替えたいんですけど」

「はい。どのようなドレスがよろしいですか？」

「いえ、ドレスではなくて、できれば男物。そろつなら、この辺りに住む子供と同じものがいい……。ですけど……」

執事の顔が、凄く残念そうだ。

でもドレスを着て山を歩くなってもつての外だし、貴族と分らない方が誘拐の心配もなくて安全だと思う。それに山を登るなんて汚す可能性が高いのだから、あまり良いものでない方がいい。

「あの、駄目ですか？」

「……分かりました。ただし今すぐの準備ですとヘキサグラム様のお下がりとなりますが、よろしいでしょうか？」

「はい。無理を言つてすみません」

「謝るならば、言わないで下さい  
ですよね。」

そう思うが、ドレスでない服が欲しいのだから仕方がない。部屋の中でじっとしている分には、ドレスでも別に構わないのだが、動こうと思うと重いし、裾を踏みそうだしで不便なことこの上なかった。

「では持つてまいりますので、お部屋でお待ち下さい」

「お願いします」

私が頭を下げると、執事は苦笑いをした。

どうも私は貴族には向いていない気がする。元々貴族ではなく、旅芸人の子供なので仕方がないんだろうけど。

部屋に戻ると、ぐちゃぐちゃになっていた机の上が綺麗に片付け

ていた。どうやらメイドさんが掃除をしてくれたようだ。手紙と折り鶴にも気がついてもらえたみたいでなくなっている。スルーもしくは、ぐちゃぐちゃにしてゴミ箱に捨てられている可能性もあったので、ほっとした。きつと掃除をしたのは優しいメイドさんだったのだろう。

「……何だか悪い方向ばつか考えるようになってるな」

捨てられる前提で考えてしまっつて、いささか卑屈になりすぎではないだろうか。でも期待して裏切られた時の絶望はもっとも恐ろしい。混ぜモノの暴走は一体どのレベルの絶望で起こるものなのだろうか。何か文献があればいいのだが、あつたとしても私の語学レベルだと理解するのは難しいように思う。ちなみに現レベルは、幼児用の絵本……。やはり勉強あるのみか。

ベッド脇に座りながらため息をついた。道のりは長い。

気分を変えようと、鞆からクロのサインを取り出す。初めは模様にしが見えなかったソレが、最近何とか文字だと理解できるようになった。少しだが進歩はしている。

「今頃クロは何しているんだろ」

眺めていると、少しだけ一座にいた時の事が懐かしくなった。あの頃の方が良かったとは言わない。それでも楽しくなかったわけでもない。

クロと挨拶もできないまま別れたのは、お互い泣かずに済んで良かったのかもしれないと思う。下手に泣いたら未練が残ったはずだ。それでも、せめて手紙のやり取りができるようにしておけば良かった。クロ達は旅を続けるような事を言っていたので、実際は私が手紙を受け取る事しかできないだろうけれど。

「今日も一日、何もありませんように」

願掛けをし終わると、私はなくさないように鞆にしまった。この間願いを裏切つて、人攫いに会うなんて事もあったのであまりお守りとしては、効き目がないかもしれないけれど。でももう、あんな

事は早々ないだろう。

「オクトお嬢様、入ってもよろしいでしょうか」

ノック音と共に、メイドさんの声が聞こえた。返事をする、緑の髪に犬っぽい獣耳がついた女性が入ってきた。その手には、綺麗に畳まれた服がのっている。

「わざわざ、すみません」

慌てて立ち上がり、メイドさんの方へ私は近づいた。

「いえ。この程度の事、謝らないで下さい。仕事ですから。それよりも、オクトお嬢様。いただいた、これの事なんですけれど」

メイドさんはポケットから折り鶴を取り出した。鶴がどうかしたのだろうか。

あつ。もしかして、捨てるに捨てれず困っているのかもしれない。養子とはいえ、アスタの娘。つまりは貴族の娘だ。例えばゴミにしか思えなくても、無下にもできなかつたのだろう。

それは悪い事をした。確かに、折り鶴を貰っても何かに使えるわけでもないのだ。この国は箸文化ではないので、箸おきにもできない。

「迷惑かけてすみません。捨てて下さい」

せめてハンカチに刺繍とか、そういう実用的なものにすれば良かった。……やり方が分からないので、誰かに教えてもらわなければいけないけれど。

「いいえ。捨てません。迷惑なんてとんでもございません!!」

メイドさんが大きな声を出した事に私はびっくりする。女性もはしたないと思ったのか、こほんと咳をして、顔を赤く染めた。

「あ、あのですね。これはまるで、紙でできているように思いました。同僚とどのように作ったのか首をかしげていたのです。どちらかの、工芸品ですか？」

「えっ。ああ。それは私が紙を折っただけ」

何だ。邪魔というわけではなかったのか。にしても、工芸品とは……。リップサービスありがとうございます。少し大げさすぎて恥ずかしいけれど。

「オクト様が作られたのですか?!これを?!」

「はあ」

それにしても大げさに驚くメイドさんだ。あ、あれか。子供は褒めて伸ばすみたいだな。伯爵家の教育方針が、ゆるくて大変ありがたい。アスタを見ていると、厳しくて鞭ばかりな躰けではないとは思っていたけれど。

「良かったら、教える……教えますが」

一瞬敬語を使い忘れたが、すぐさま元に戻す。メイドさんが少しフレンドリーになった気がして、危うくつられる所だった。

「是非、お願いしますっ!!」

「えっと。いつがいいですか?私は、いつでも大丈夫……です」

「散策の後で、構いません」

山の散策どうしようかなとちらっと考えていたのを見抜かれたみたいだ。まあ折り鶴くらいなら簡単だし、教えるのもそれほど時間はかからないだろうけど。

「なら、それで」

「オクトお嬢様は他にもこういったものが作れるのですか?」

脳内検索をすると、数点思い出せた。もっとも箆袋は文化的に使えないし、手裏剣も何か分かってもらえなさそうなので、それほど種類は多くない。

しかしメイドさんは妙に目をキラキラさせている。褒めて伸ばすにしてもサービス精神旺盛すぎないだろうか。若干、怖い。

「えっ、あの……少しだけ」

「分かりました。メイド全員にそのように伝えておきますね」

「やめてっ!そんなに凄いい事じゃないから」

まるで公演でも開かせるような勢いに、私は悲鳴を上げそうになった。メイド全員って何?これは新手のイジメだろうか。説明して、

この程度みたいな感じで鼻で笑われるとか？そういう流れですか？  
慌てて止めると、メイドさんは困ったような顔をした。

「えっと、少人数でお願いします」

「そうですね。なら、オクトお嬢様の迷惑にならないよう、選抜しておきますね」

「あ……はい」

選抜って何？と思ったが、これ以上聞く事は私がつかれそうだ。

メイドさんを驚かせれそうな折り紙は、折り薔薇ぐらいなのが正直心に痛い、1個でもネタがあるだけマシだろう。大丈夫。もしイジメだとしても乗り越えられるはず。

「あの、服いいですか？」

「ああ。遅くなり申し訳ございません。お着替えのお手伝いは……」  
「大丈夫です」

メイドさんは残念そうな顔をしたが、後ほど来ると言って一度外へ出て行った。

「っ、疲れた」

メイドさんを見送ると、私はぽすつと音を立ててベッドに座った。山に行く前から、ぐったりとしてしまう。肩を落として、深く息を吐くと、ようやく人心地つけた。褒めて伸ばすは、行きすぎると羞恥系拷問だという事を初めて学んだ。



本当にいいのかなあ。

1人外を歩きながら私は首をかしげた。というものの、伯爵邸から外に出る時に、できれば1人で散歩に行きたいと使用人の方々にお願いすると、あっりOKされたからだ。

とてもありがたいのだけど、私は一応5歳だよなあと思ってしまふ。それともこの世界の貴族は5歳で1人外出してもいいのだろうか。そういえば、アスタも私が買い物に1人で行くのを咎めなかった。放任主義なのか、それだけ子供の成長が早熟なのか。

「どちらにしろ、貴族の子供って大変だな……」

そういえば執事やメイドさん達も、私の子供らしからぬ発言に、特に驚いた様子もなかった。つまり貴族の子供は早熟である可能性が高い。いやいや、私の場合は前世の知識のおかげであり、本当にそうなら、貴族の子供はチート過ぎる。しかしアスタは異界屋で会っていたから私に対する前知識があったが、執事達は違う。普通こんな子供がいたら怖いだろう。

ただし驚かないのは、彼らのプロ根性というのも否定できないけれど。

しばらく歩いていくと、周りが畑になってきた。キャベツのような作物や、何かの苗が色々なものが植わっている。どうやらここは田舎の農村のような地域みたいだ。遠くで動物の鳴き声が聞こえるので、畜産もおこなっているらしい。

畑にいた何人かはちらりと私を見ると、慌てて目をそらした。きつと混ぜモノである私が怖いのだろう。

「おお。久々の正しい反応」

伯爵家にいると、どうも混ぜモノである事を忘れてしまいそうな対応をされる。本来怖がられるのは嫌な事のはずなのに、まともな

反応に感動してしまいそうになった。そう、普通の反応はこれだ。ここに嫌悪が含まれた視線とか噂話が入ってくると、ますますいづも通りだ。……Mではないので、そうされるのが好きなわけではないけれど。

「よう。やつと外に出てきたのか」

「アスタ」

しばらく畑を見渡しながら歩いていると、村人と話をしているアスタに出会った。やつとつて、私が伯爵邸から出てくるとは思っていたらしい。だったら一緒に連れてきてくれればいいのに。

「ちゃんと、男物の服を着てきたな。偉い、偉い」

アスタは私の頭をがしがしと遠慮なく撫ぜるが、釈然としない。

「行くなら、誘ってくれば」

「ちゃんと自分で話ができるんだから、行きたいならちゃんと口で言つて、どうするか考えないとね。俺が全部決めたら、使用人とさえいつまでも話さないだろ？」

それは確かに間違えない。

人とあまり関わりたくないという意識は正直ある。例えばアスタが、本を読めと持つてきたり、これをやれと宿題を出したら外へは出なかつたはずだ。あれだけ暇で、なおかつアスタが近くにいなかつたからこそ、仕方がなく伯爵に外出許可を貰ったりと自分で動いた。

「……面倒で放任しただけじゃ」

「そこはお父様凄いですか？ありがとうございます。可愛くないぞ」「可愛くなくて結構」

私の為という事は少し理解したが、5歳児に対して少し酷な気がする。私でなければ、泣いているところだ。もっとも私のような混ぜモノでなければ、子供らしく使用人や伯爵様に甘えたかもしれない。そう思うと、やはり私が色々駄目なのだろう。

「嘘嘘。可愛い、可愛い」

「いや、可愛くなくてもいいから」

拗ねたとも思ったのか、アスタが言い直すが、私的には可愛くなくて問題ない。可愛いと何か得があるのだろうかと考えるが、得があるのは普通の子供だけだ。混ぜモノにそんな特典がついても意味がない。

「アスタリスク様、そちらの混ぜモノは一体……」

「ん？俺の娘」

「違う。養子」

「同じじゃないか」

アスタが唇を尖らせたが、私は首を横に振った。混ぜモノの親などという不名誉をアスタに負わせるわけにはいかない。折角拾ってくれたのだから、実際はどうであれ、混ぜモノさえも養子にする慈悲深い方とも思わせた方がいいだろう。

さて、ここに長居しても村人に悪い。早々に山に行くべきか。…

…しかし山も山菜とかの収穫で、誰かいるかもしれない。そうすると人があまり近寄らない場所に行くべきか。

「アスタ、少し散歩してくる」

そういえば魔の森は、誰も近寄らないような事を言っていた。奥まで入ると迷う可能性はあるが、近場なら丁度いいのではないだろうか。

「何処に？」

「……そのあたり？」

實際魔の森が何処にあるか分からないので、ふらふらと人気がない場所を探すつもりだ。人気がない場所は危ないイメージもあるが、こんな農村ならば事件もありそうにない。

「山は流石に一人じゃ危ないかな。一緒に行くよ」

「私は大丈夫。アスタ、用事があるんじゃない」

「村は一通り見てまわれたから大丈夫だよ。後は、また明日」

いいのか、それで。

自分としては、アスタの仕事を邪魔する事は不本意だ。私は養われている身なのだと思うと、邪魔になる事は極力したくない。

「1人で大丈夫」

「駄目。もう決めたから。じゃあ、俺と一緒になら大丈夫だし、魔の森へ行こうか。1人ではまだ行つてはいけない場所だから覚えてよ」  
「げっ。バレた？」

たまたま偶然かどうかはわからないが、行つてはいけないと言われていた場所なだけに、冷や汗がでる。アスタはにっこりと笑っているので、どういふつもりかは分からない。

「アスタリスク様?!」

「大丈夫だよ。奥までは行かないし。折角だから、薬草を取ってくるよ。籠貸して」

村人までも心配そうにしているが、アスタは気にした様子が無かった。それどころか、籠を強奪する始末だ。何処までも無計画な自由人である。

「オクト行くよ」

アスタに手を引かれて、畦道を歩く。迷子にはなりそうにもないが、アスタから手を握ったのでされるがままにしておく。

しばらく歩くと、周りの木々が増えてきた。ひんやりとした空気が髪を撫でていく。山などは通り過ぎるもので、こんなにゆっくりと見た事はなかった。私の身長が低いからだろうが、どの木も大木に見える。

「この先、村の西はずれにある場所が魔の森と呼ばれる所だよ」

緑はどんどん深く、そして静かになっていく。神秘的と呼ぶにふさわしいような場所だった。大木が連なっており、光は木の葉の隙間からさす程度で少し薄暗い。

しばらく歩いた所で、アスタは足をとめた。

「ここまででは、1人で来てもいいよ。村人もたまにここまででは来る

から」

「嫌われた場所なんじゃ……」

それとも嫌われているのは、森の中だけなのだろうか。それにしては、まわりに民家など見当たらない。

「子供たちや老人が薬草をとりに来るんだ。以前に比べれば作物も良く育つようになったけれど、まだ裕福からは遠いからね。薬師にはとても安く買いたたかれてしまうけれど、少しでも家計の助けになろうとしているんだ」

偉いよなというアスタは、少し悔しそうに見えた。

彼でもこういう顔をするのかと少し驚く。いつもへらへら冗談ばかり言っているのだと勝手に思ってた。

「薬は安いものなの？」

「いや。とても高価で、村人は買えないよ。薬草を加工する段階でとても価値がつくんだ。でもまだこの村はいい方かな。薬草はあるから、すりつぶして飲んだりしている。もちろん、薬師が作った薬ほどの効果はないけれどね」

この世界……は良く分からないが、少なくともこの国は抗生剤などという薬はでき上がっていないだろう。海賊の船長も菌というものを知らなかったのがいい例だ。もちろん、パンがあり、チーズがあり、ヨーグルトも存在しているので、菌を全く活用しない生活ではないのだけれど。

ともかくこの国でいう薬は薬草なのだろう。もしかしたら薬草に結構凄い効能がある可能性もある。RPGだって、よく分からない草をよく分からない技法を使って、フラスコに入った万能薬にしていた。この世界がそちらに近い可能性だってある。

「でも薬草を取りに来て帰ってこれない事もあるんだ」

安く買いたたかれたり、効果の低い治療の為に命を落とす事もあるのか。……アスタが悔しそうなのも少し分かった。彼は彼なりにこの村を愛しているのだろう。

「なら、村で薬を作れば……。薬師達は、何処で学ぶの？」

「魔法学校または、薬師を師として学ぶようだよ」  
「魔法学校？」

それは確か、魔術師の卵が通う学校ではなかっただろうか？

「なら、アスタは作れる？」

「専攻が違うから無理だな。薬の分野は、高等科に進学後、魔法薬学科の生徒が習うんだ。俺は魔法学科だから、純粋な魔法の研究分野に特化しているんだよ」

何だか大学みたいだ。確かに薬学部の内容を教育学部が知るはずもない話である。

しかしふといいい考えが浮かんだ。ここは薬草が豊富な土地で、薬草は薬になると高価な値がつく。そして私は、転移魔法などを常々覚えたいと思っていたのだ。

「アスタ、あのさ」

「どけええええっ!!」

今思った事を伝えようとしたところで、頭上からどなり声が聞こえた。アスタに引つ張られる形で、私は後ろに少し跳んだ。

そしてすぐに、どさりという音と共に、さっきまで立っていた場所に人が落ちてくる。1人、……。いや、2人だ。時間差で、さらにもう1人落ちてきた。体格はあまり大きくないようで、子供のようにだ。

村人かなと思ったが、すぐにそれを否定する事になる。最初に落ちてきた子供の髪は赤茶。2番目に落ちてきた子供はキャベツ色。

「な、なんで」

「よう。元気だったか？」

「久しぶり」

ヘラッと誤魔化すように笑う2人を見て私は固まった。

どうしてここに、ライとカミュ王子がいるのだろう。



## 9 1話 不穏な噂

ある日、森の中、王子様に出会った……なんでやねん。そこは熊だろ。

脳内でノリツッコミしている時点で、すでにかなりテンパっている。もう2度と会わない、会うものかと思っていた相手に遭遇したのだ。仕方ないと思う。

それにしても偶然会うような場所ではない。その理由を考えると頭痛がした。

「このような場所へどうされたんですか？」

私が焦っている横で、アスタが2人に声をかけた。その顔には、すでにエセ笑顔が張り付いている。

「どうしたもこうしたも、アスタリスク魔術師とオクトに会いに来ただけだ……何でこんな場所につくんだ？」

「そうだね。アロツロ伯爵の庭に出よう転移したはずだけど……」

転移と言う事は、二人とも魔法使いもしくは、魔術師と言う事だ。カミュ王子は海賊からアスタのところへ送ってくれた後にさらに転移していたから驚かないが、ライもそうだったのか。……関わりたくない。

2人を見て、アスタは厭味つたらしく大きなため息をついた。

「まだお二人は学生の身。転移魔法は早いと思われませんが。特にこの地域は、魔の森があり魔法のゆがみが出やすい地域です。その事を計算に入れましたか？」

「えーつと……入れてないかな。と言うか、その敬語止めてくれ。怖いんだけど」

「誰かに見られそうな場所で第二王子様に不敬など行えませんかよ」アスタ、魔の森にはほとんど誰も近寄らないって言ってたよな。



しかし私はその事を口にせず、彼らのやりとりを見守った。自分にとぼつちりが来るのはごめんだ。

「第二王子はカミュで、俺関係ねえし……」  
ですよ。

しかしアスタはライの事を無視し、カミュ王子に話しかけた。

「それと地域特性を見極められないなら、転移魔法は使うべきではありません。この地域以外にも、もっと厄介な場所だってあるのですよ。自分で危険を招くのは自業自得ですが、その為に使用人が処分されている事をお忘れなく」

「忠告ありがとう。肝に銘じておくよ。ただ、アスタリスク魔術師が夜会の招待状を断らなければ、僕たちもこんな無茶はしなかったんだよね」

とげとげしい空気に耐えられなくなつて、逃げたくなつた。しかしアスタに手を引かれていたため、移動はままならない。

「こちらにも色々都合があるんですよ。それに今回は娘が私の父に会いたいと言つたもので、やもえずお断りしたのですけれど」

待て。私は会いたいと選んだのではなく、右か左か選んだだけだ。それもそれが何かも伝えられずに。それが何故、家族愛チックな話になるのだろう。

「でももう会えたから良いでしょ？それに僕の勘違いでなければ、アスタリスク魔術師なら、転移を1日に何度でもできると思うんだけど。伯爵に会つてから、夜会へ出席すれば良かったのに」

「まだ娘が小さいものでね。それほど無理はできないですよ」

ここにここに。  
ここにここに。

何故両者笑顔なんだろう。そして何故笑顔なのに、寒さを感じるのか。

「ライ……どうしてここに。海賊は？」

私は成り行きを見ているのにも疲れ、寒々しい二人から少し距離

を置いているライに声をかけた。もつとも距離を置いているといつても、特に気にした様子もないので、声をかける相手としては、50歩100歩な選択肢かもしれない。

「ああ。ちよつと問題が起こつてな。それでオクトに協力」  
「嫌」

「聞く前から断るなよ。海賊では仲良くやっていただけだろ」

ライの事は正直嫌いではない。ただ私は安全安心に生きていきたいので、厄介事と思われるような事に首を突っ込みたくないのだ。

「それに不都合がでたのは、オクトの所為でもあるんだからな」  
「何故？」

勝手に人の所為にしないで欲しい。

私は特に彼らにとって問題ある行動などっていないはずだ。海賊の所から戻った後は、家で引きこもる事に専念していたので、危険な橋など渡っていない。

「その事について、内密に話がしたいところでね。アスタリスク魔術師、場所を用意してもらえないかな」

アスタと話をしていたはずなのに、王子が口を挟んできた。内密とか、絶対聞きたくない話に決まっている。アスタの顔には『馬鹿だなあ』と書いてある。うん。私もそう思う。しかし王子が命令すれば聞くしかないだろう。アスタに任せて、追いつ返してもらえばよかった。

口は災いのもと。分かっていたはずなのに。

「伯爵邸に戻りましょうか」

私はがっくり肩を落とした。

「どうぞ」

椅子の上に登って紅茶を入れるという、マナーも優雅さも何も無い状況を繰り広げながら、ようやく私は4人分のお茶を入れる事ができた。この4人の中でお茶を入れるべきは私だろうと空気を讀んだのだが、幼児の体格だとこの作業は結構大変だったりする。

何故お茶が欲しいなら使用人を下からさせる前に入れてもらわなかつたんだろう。人払いするにしても、お湯を持ってきてもらうだけじゃなくて、色々やつてもらってからにすればいいのに。

「オクトって、本当に何でもできるよな」

「自慢の娘なものでね」

いつまで親馬鹿設定で行くつもりなのだろう。笑顔で紅茶を飲むアスタを睨みつけながら、私も椅子に座った。

口調は敬語から普段と変わらないものになっているので、アスタと彼らは思ったより親密な関係なようだ。それでも親馬鹿設定を崩すつもりがないのは、まるつきり気を許しているわけではないという事か。それとも何かを断る時の言いわけとして使う予定なのか。

……分らない。

「それであんな無様な登場をして、何の用だい？俺も久々の里帰りで忙しいんだけど」

どの口が言うんだ。

忙しいなら私の散歩何かについてこなればいいのに。きっと話を有利に持っていく為の方便なんだろうけれど。

「オクトさんを見つけて君の所へ戻してあげた恩人に、それはないんじゃないかな？」

「俺は有給をくれと言ったんだ。場所はすでに伯爵家が見つけたからね。それに借りは仕事で返したと思うけど。カミュエル王

子様？」

……ん？もしかして私は色々アスタに迷惑かけていた？

もしかしたら、伯爵家に行くのは初めから決まっていたのかもしれないとこの時になってようやく気がついた。確か急遽行く理由は、迷惑をかけたから。……その主語は「私が」ですか？！

さあああつと血の気が引く。

今さらだけど、謝るべきだろうか。自由気ままなアスタが私の為に不自由したのは間違えない。

「あ、あの。アスタ」

しかし私が言う前にアスタは頭を2度ほど軽く叩いた。気にするなという意味だとは分かったが、そういうわけにはいかない。

しかしアスタは私ではなく、カミュ王子を見ていた。この件は後にした方がよさそうだ。

「確かにね。鉱物への魔法添加は確かに以前より効率が良くなったしね。兄上が軍事で採用するはずだよ。だから今日は正式にアスタリスク魔術師とその娘オクトに依頼をしようと思っただけだ。報酬も払うつもりだよ」

「5歳児に依頼？そんな横暴は聞けないね。帰ってくれないかな？」

「5歳児?!」

ライが素っ頓狂な声を出した。

私の体格はどこからどう見ても5歳児だろう。若干発育が悪いのでもう少し下に見えるかもしれないが、驚くほどではない。

「へえ。しっかりしているし、僕らと同じぐらいかと思っていたよ」「それはない」

もしもそうならどれだけ発育不全なんだよ。ツツコミどころ満載だ。カミュ王子達も確かに子供だが、10歳はいつているだろう。

「なら5歳なのに、壊血病とか料理とか色々知っていたのかよ?!」

どんな頭してるんだ？」

「オクト、どういふことかな？」

「えーっと」

そういえばアスタに海賊では下働きしていたとしか伝えてなかった気がする。実際先生と呼ばれていた事以外は、下働きとそんなに変わらないと思うけれど。

「オクトは見事な才能で、誰も治す事の出来なかった、海の精霊の呪いを治したんだよね」

きつとカミュ王子はライに聞いたのだろう。

それは分かるが、何故伝える?!アスタの機嫌が下降しているのが、喋らなくても分かった。

「あー、そんな事もあったよな……」

「ふーん」

故意に黙っていたわけじゃなくて、話す必要性を感じなくて黙っていただけなんだけど。何故私が責められる空気になっているのだろう。

「とにかく。例えば歳としても、貴族ならばこの国の為に働くべきだとは思わない?オクトはどう思う?」

わ、私に振るなっ!!

貴族になりたてである私では、貴族の心構えなんて分からなかった。小説の主人公とかでありがちな、『自分がいい待遇を受けられるのは、それだけ領民に期待されているからだ』なんて、かっこいいセリフなんて絶対言えない。そもそも自分は伯爵家やその領地に対してまだ何の感情もないのだ。アスタは子爵だっけ?でもそれも同じだ。

「私はまだ国という大きなものは分からない」

本当は王子相手だし、敬語の方がいいのかも知れないが、アスタが普通に話しているので、私もそうさせてもらう。

「でもアスタの為ならば働く」

子爵ではなくアスタに対してなら、恩義がある。国なんて大きなものの為に何かをするとか、正直無理だ。でもそれが1個人の為ならばやれる。

「というわけだから、アスタリスク魔術師も聞いてくれないかな。ちゃんとそれなりの見返りはするつもりだよ」

アスタは紅茶を飲みながら、ちらりと私を見ると、肩をすくめた。  
「分かったよ」

「ありがとう」

カミュ王子は御礼を言うと、ふと真面目な表情になった。私もちやんと聞こえと、姿勢をただす。アスタの為とかカツコイイ事を言ったが、無理そうならば全力で断らなければいけない。

「2人は、吸血夫人の噂は知ってる？」

何それ？

聞いた事のない言葉だ。ただ吸血という言葉は、どうにも気味の悪い物に感じた。

「それは最近新聞に書いてあった、血を抜かれて亡くなった女性が多発している事件の事かな」

首をかしげた私の隣で、アスタが吸血夫人について話す。血を抜かれて亡くなっただって……まるでドラキュラ伯爵みたいだ。

「そう。男爵令嬢が事件に巻き込まれ無残な姿で発見されてから有名になったんだけど、かなり前からそういった遺体はあつたらしくてね。身分の低い女性が、すでに何十人単位で亡くなっていると思うよ」

何十人単位とは、規模が大きすぎて、現実味が乏しく感じた。痛みましいというよりも、怪談話を聞いているかのようにぞわぞわと悪寒がする。

「吸血つて、血を吸われるの？」

もしそうならば、もしかしたらこの世界には吸血鬼がいるのかも知れない。エルフや魔族とさまざまな種族が混在しているのだ。吸血鬼族というのがいても今更驚かない。……共存は難しそうだけど。

「吸うつて言うか、抜かれるだな。たぶん喉のあたりが痛い感じで、逆さ吊」

「へ？」

ライが親指を立てて首を横に切断するような動きをした。その動きが何かを理解した瞬間、血の気が一気に引いた。つまり家畜のように首を切断もしくは傷つけられ、血抜きをされたという事だ。

生きながら首筋に噛みついて飲まれるのと死んでから血抜きをされるのではどちらがエグイだろう。……とりあえず、個人てきにはどっちも嫌だ。

「夫人と言うのは何でなんだ？確かまだ犯人は捕まっていなかったと思うのだが」

「死んだ女性からは、貴婦人の香水のような甘い香りがするからだよ。ただし体を麻痺させる薬品の臭いじゃないかと僕らは考えているけれどね」

うわあ。

体を麻痺させてグサリつて、もつと残酷だ。ぞくぞくして、鳥肌が立ってしまう。やられたわけではないのに首のあたりが痛いような気がして、私は喉に手をやった。

「まあ噂もあながち間違っていないけどな。俺らは犯人はとある伯爵夫人だとふんでいるんだ」

「そこまで分かっているなら、俺とオクトの手を借りるまでもないだろ」

うん。まさしくその通りだ。そんな物騒な事件、関わりたくない。アスタは魔術師だけど、私は善良な一般市民である。

「本当はそのつもりだったんだけど、証拠が中々掴めなくて。曲がりなりにも貴族だから、証拠もないのに屋敷内を捜査するわけにもいかなかったんだよね」

それと私たちと何の関係があるのだろう。内心首をかしげつつ、話の続きを聞いた。

「そこで王宮が動いている事を知られない為に海賊を通じて、犯人に女性を売ってもらう予定だったんだ。もちろん、中に1人兵士を入れて女性が被害にあわないように対策はしてだよ」

あれ？海賊を通じて女性を売るって……つい最近、そんなような事があった気がする。

ひくりと顔が引きつった。嫌な予感しかしない。

「でもどこかの誰かさんが、海賊と取引をして、女性を逃がしてしまっただよな」

うっ。

それは、もしかして……もしかしなくても、私の事ですよ。

皆の視線が痛い。アスタにいたっては、にこっり笑って私を見て



いる。うわあ……怒ってる。厄介事の原因は、どう考えても私だ。

「もう一度女性を集めるといふのは……」

「そのつもりだったんだけどね、もたもたしている間に犯人の嗜好が変わったみたいだね。若い女性ではなく、子供しか取引に応じてくれないそうなんだ。おかげで計画の練り直してわけさ。子供では流石に兵士を紛れ込ませられないからね。この事について、どう思う?」

「……大変申し訳ないなと」

それ以外に何と言えはいいのだろう。あの時は自分も必死だったのだ。まさかそんなおとり捜査の為に女性が集められているなんて思うはずもない。

くだらだと汗が流れる。これはいつそ、土下座してしまった方が楽になれるのだろうか。

「それでまさか、うちの娘をおとりに使いたいか言うんじゃないよね」

「まさか。ただし伯爵夫人に近付いて、情報を得てくれたらいいなと思っただけだよ」

それはイコールおとりだと思っただが、私の勘違いだろうか。

「私では上手く近づけないと思う」

正直逃げてしまいたいが、ここまで話を聞く限り、流石にそれはマズイ気がする。それぐらいの良心は私にもあった。

しかしだ。混ぜモノがすんなりと伯爵夫人と仲良くなれるはずもない。私が近づくと、必ず相手が逃げる。どう考えてもおとりなどには、向いていない。

「そこは大丈夫だぞ。ちゃんと、『混ぜモノの血には凄い力がある』って噂を夜会の時に流しておいたから」

「はあっ!?!」

私は慌てて叫んだ。

何そのとんでもない噂。混ぜモノの血には凄い力って、凄いつて

何だ。滋養強壯ということか？それとも黒魔術的にみたいな感じか？！どちらにしても、私にとって最悪だ。すっぱんの生血のごとく飲まれるようになったらどうしよう。殺されるのも嫌だけど、それもトラウマになりそうだ。

「混ぜモノを使うリスクはちゃんと分かっているのか？犯人を捕まえたいが、国がなくなりまりましたじゃ、笑い話にもならないぞ」

本当にその通りだと私はアスタの言葉に頷いた。殺されなくとも自分の生血を飲まれるという気持ち悪さだけで、バットエンド突入しそうだ。……飲むとはかぎらないけど。

「もちろん分かっているよ。協力してもらおう限り、オクトさんに危害が及ばないように、最新の注意を払うつもりだよ」

「つもりじゃ、困るんだよ。絶対傷つけるな」

アスタは真剣な顔でカミュ王子を睨むように見つめる。王子もまた神妙な表情でアスタを真正面から見据えると、ゆっくりと頷いた。「……分かった。僕の名と王族の誇りにかけて、オクトさんを守ると誓うよ」

「待て。私に何かある前提で話しているところ悪いが、犯人が混ぜモノに手を出すかどうか分からないとんじゃ。それに私を襲うとも限らない」

混ぜモノの危険性は犯人だって分かっているだろう。それに貴族の養子を狙うよりは、町や村にいる混ぜモノを攫おうとするのではないだろうか。

「いや。犯人が襲うかどうかまでは分からないけど、襲われるならば、オクトが狙われるのは間違いないな」

「何故？」

「混ぜモノは絶対的に数が少ないからな」

「数が少ない？」

私は首をかしげた。やはり混ぜモノは上手く育たないからだろうか。でも私という例もあるし、皆が混ぜモノを忌み嫌うならば、混

ぜモノの存在を忘れない程度にはこの世界にいると思っていた。

そんな私をみて、アスタがライの言葉を引き継いで、さらに説明を続けてくれた。

「人族の血は混ざるが、他の血は混ざらない。これが世界の常識なんだよ。だからハーフは大抵、人族と他の種族の血を併せ持つ事になり、能力などは人族以外のものを引き継ぐんだ。そして数代重ねると、人族の血は消える」

私の母親は獣人族と精霊族。父親がエルフ族と人族。おかしいのは母親と言う事になるが、その話で行くと、そもそも私は生まれないうという事になってしまう。

「つまり混ぜモノは、本来ありえない存在なんだよ。でも現実にはオクトのように存在する。ただし生まれる確率が低くて、問題なく育つ確率も低い。俺が混ぜモノの子供を引き取った話は貴族の間で有名になっているから、結果的にライが言う様にオクトが狙われるな」

あー。そういえば、私を引き取った事をだしに、再婚話を断ったりしているんだっけ。意図せずして、私は今この国で一番有名な混ぜモノなのかもしれない。何だ、その嬉しくないオプション。

「他にはいないの？」

ありえない存在認定までされたが、私は現実に生きている。他に同じような混ぜモノがこの国にいないとも限らない。その存在を、伯爵夫人とやらが知っていたらどうだろう。搔っ攫いやすそうな方を選ぶに違いない。

「国への届け出では、十年前に死産だった報告が来ているだけで、書類上はゼロだよ。届け出がなされていなかったり、国外からの移民の場合は漏れることもあるから絶対とはいえないけれどね」

…… 本当にレア的存在だったんだ。なんて嬉しくない特典だろう。残念感しかない。

「混ぜモノ恐ろしさは皆が知るところだから、どう転ぶか分からないけれど、もう少し伯爵夫人の動向を見たいんだ。オクトさん、協

力をお願いできないかな」

お願いと言うか、命令ですよね。

どう考えても、私が断った所で、すでに巻き込まれているとみて間違いない。犯人が動けば真っ先に危険なのは私だ。ここで何を言おうと、噂が流れた時点で、私に拒否権などない。

……なんて厄介な噂だろう。私は首を縦に振った。

さて引き受けたはいいが、面識もないのにいきなり問題の伯爵夫人の所に行っても、不感いつぱいの目で見られるだけだ。とても近づけるとは思えない。

しかしその辺りはカミュ王子達がすっかり考えていてくれた。まあそうでもなければ、とんでも噂を流しただけで丸投げという、アスタ並みの無計画という事になる。もしそうならマジで禿げると呪うところだ。

「お茶会かあ……」

どうやら後日カミュ王子の従兄である、公爵令嬢がお茶会を開き、そこに私や伯爵夫人が呼ばれるらしい。ただしまだ5歳である事が考慮され、屋敷まではアスタに送ってもらい、お茶会中は侍女を連れて参加するという内容だ。もちろん侍女は、カミュ王子が用意した兵士である。

しかし正直憂鬱だ。

「お茶会、何もないといいけど」

何もないと、今度は王子達の失敗を意味するので、歓迎できる事でないのも分かる。しかし混ぜモノであるという事は、問題の伯爵夫人以外からも注目される立場という事だ。おもに、負の感情的な理由で。

罵られたり、侮蔑の目で見られるぐらいなら我慢できるが、叫び声を上げられたり、泣かれたりしたら大人しく帰ろうと思う。

コンコン。

「オクト、入るよ」

自室でぐるぐると考えていると、アスタの声が聞こえた。……はっ？！

カミュ王子とライが帰った後、アスタと話をしないとなあと思っただが、まだしていなかった事を思い出した。というのももまた転移魔法に失敗されると困るといふことでアスタが2人を王宮まで送ったからだ。

ちゃんと謝ろうとは思ってたんだよ。と心の中でいいわけはするが、そんなのアスタが知った事ではないだろう。マズイ。

せめてメイドさんにアスタが帰ってきたら教えてとか、頼んでおけば良かったと思うが後の祭りだ。謝るならば先手必勝でこちらから言いたかった。こうなったら諦めて説教を聞こう。

「どござ」

開けられた扉の向こうには、アスタとメイドさんが数名いた。ん？何でメイドさん？

メイドさんの手には何やら紙の束が握られている。……ああ。折り紙ね。そういえば散策の後に教える約束をしていた。ライとカミュ王子が来た為に中々できなかったけれど。

きつと怒りにきたアスタと運悪くタイミングが重なってしまったのだろう。叱るところとか見たくないだろうに、悪い事をした。

「アスタ、あ、あのさ……」

そういえばアスタに怒られるなんて初めてかもしれない。攫われた時も、結局私は怒られていない。何があつたかは聞かれたが、裏道を使った事に対しても今度から気をつけるようにと言われたただだ。

アスタはどうやって怒るのだろう。怒鳴られるのだろうか。それとも殴られるのだろうか？ねっつちより厭味つたらしく説教する可能性も否定できない。

「えっと、この間から迷惑かけて」

「これ、オクトが作ったの？」

「ごめん……はっ？」

謝罪の言葉にかぶせられたのは、お叱りではなかった。首をかしげアスタを見れば、その手にはメイドさんにあげたはずの鶴が乗っている。あれ？

「うん。まあ……」

「この紙で？」

「そうだけど」

やはり勉強道具で遊んだのはまずかつただらうか。それでも嘘を教えるわけにはいかないので、私は正直に頷いた。

「何で平面が、立体になるわけ？」

「折ればそうなるかと」

何を言おうとしているのかさっぱりわからない。しかしアスタはまるで魔法でも見たような目をしている。魔術師はアスタの方なのに。変な感じだ。

「あのさ、海賊の事怒りに来たんじゃ……」

「何で？まあ、俺が知らない事を王子が知っていたのはちよつと気に食わなかったけど、怒ってはいないよ。それよりも、これはどうやって作ったわけ？」

面倒事く知的好奇心ですか。

……アスタらしいといったら、アスタらしいのだが。このままで自分はろくな大人に育たないのではないかと若干心配になってきた。何をやっても怒られないって、どうなんだろう。褒めて伸ばすもいいが、やはりちゃんと言話をしなかった事は私も悪かったと思う。「今からメイドさん達に教えるからアスタもどう？」

かといって、私も怒って下さいなんて言えない。言ったらマゾだし、変態っぽい。色々、失ってはいけないものを失う気がする。

なので諦めて、折り紙の話題に移った。

「もちろん参加するよ。何処でもできるの?」

「紙さえあれば。ただ、できれば、机があった方が作りやすいけれど……」

私の部屋は勉強机だけで、全員が座れる場所がない。折り紙教室としては向かない作りだ。

「なら客間を使おうか。おいで」

アスタに手を出されて、私は少し迷った末その手を握る。……屋敷の中じゃ、迷子になりようがないのと思うが断る理由もない。

「あ、後。海の精霊の呪いの解き方、教えてくれないかな」

やはり覚えていたか。ただしそれも、面倒事<知的好奇心。アスタはそんなものだと思い、私は頷いた。この調子だと、今後アスタに叱ってもらうのは無理だろう。こうなったら駄目な大人にならない為にも自分に厳しくなろうと決意した。

「これを広げて、こちら側を折る」

私は折り紙をゆっくり折ると、メイドさんとアスタが折るのを待った。今更ながらに気がついたのだが、もしかしたら、この国には折り紙というものが存在しないのかもしれない。

確か日本という国では子供の遊びだが、外国では驚かされていたよな気がする。実際アスタもメイドさんも、単純なこの折り方が複雑奇怪な上、細かい作業だと思っているようだ。私としてはとりあえず角を合わせていけばそれなりのものができると思うのだけだ。



「最後にこう折りこんで、頭を作ったら完成」

皆、想像以上に真剣だ。子供の遊びなので、それほど難しくないと思ったのだが、予想外の反応である。各自でき上った鶴は微妙にいびつだが、まあ何とか形にはなっていた。正規の折り紙ではない事を考慮すると、まずまずの出来だろう。

「もう一枚紙下さい」

「私も、もう一度折りますわ」

そしてどうやらメイドさんとしては満足のいく作品にはならなかったようで、さらに挑戦を重ねるようだ。このままいくと、千羽鶴ができ上るかもしれない。

私も暇なので、隣で折り薔薇を折る事にする。こちらは唯一驚いてもらえるかと思ったとおきの折り方だが、伝授する事は今回の滞在ではなさそうだ。

「今度は何を折っているんだい？鶴とは違うね」

「薔薇」

アスタに聞かれて、私は手を止めた。まだ線を付けている段階なので、不思議に見えたのだろう。アスタは声をかけず続きを促すように見ているので、そのまま折る事にする。アスタは自分で作るよりも、でき上って行く様を見る方が楽しいらしく、改めて何かを作ろうとはしなかった。不思議な楽しみ方だ。

数分かけて折りあがると、私は鶴の隣に置いた。立体的な薔薇なので、自分でもかなりいい出来だと思う。唯一惜しいのは、折り紙ではないので、紙が白いのだ。できれば、深紅や黄色など他の色も欲しい所だ。

「……凄いな」

アスタがぼつりとつぶやいた。どうやら心底感心しているらしい。机の上に置いた薔薇を手に取りしげしげと眺めている。アスタをこれほど驚かせられたのは、少し嬉しい。

「自分で考えたのか？」

「まさか」

きつといつも通り、ママから教えてもらったのだと思ったのだろう。アスタはそれ以上聞いてこなかった。それにしても、これほど驚かれるならば、一座でもこの技を披露しておけばよかったかもしれない。……まあ舞台上で見せるには地味すぎるし、凄く今更な話しただけ。

「……お嬢様、素晴らし過ぎますわ。流石、賢者様ですね」

「それ、あまり嬉しくない……です」

なんだその、恥ずかしい名前は。

原因はお前かとアスタを見れば、何故睨まれるのか分からないような顔をした。

「何を拗ねているんだ。本当の事だろう。それと、敬語。さっきまで使わずに話せていたんだから、そのまま使わない練習をしておけよ。茶会にでるんだらう？」

うつ。

確かに使用人に敬語を使う姿を他の貴族に見せるのはまずい。アスタにつられていつも通りに喋ってしまったが、メイドさんも気を悪くした様子はない事だし、素のままでした方がよさそうだ。

「でも賢者は言い過ぎ。馬鹿にされている気がする」

「馬鹿にはしていないよ。知るはずの事を知っているんだから、賢者様だろ？」

「ごめん。……賢者ってどういう意味？」

もしかしたら私は何か勘違いしているのだろうか。賢い人という意味で、賢者だと思ったが、ニュアンスが違いそうだ。私は誰かに言葉を教えてもらった事がないので、間違えている可能性もある。

「賢者は火を触らずして熱いと知る者、愚者は火で火傷して熱いと知る者。つまり知るはずのない事を知っている者の事を賢者と言うんだよ」

ああ。それならば、納得できる。異界の知識という知るはずのないものを知っているから、賢者と呼んだのだろう。

魔術師に賢いと言われるのは、正直子供だから馬鹿にしているのかと思っていた。ちよつと心の中で謝罪しておく。

「だからオクトは、俺の可愛い賢者様っていうわけ」

「……可愛いはない」

「可愛い、可愛い」

やっぱり馬鹿にしているだろ、コイツ。

ぐりぐりと頭を撫ぜられながら、私は無然とした表情をした。でもその手は、それほど嫌だとは感じなかった。

うわー。税金の無駄遣い。

公爵家に来て、一番初めに思った事はソレだった。伯爵家より広い屋敷に、綺麗に育てられた薔薇園。もちろんソレも広い。屋敷の中はとても明るく、絵画や花瓶や、色んな置物が飾ってあった。明るいのは窓の光だけではなく、魔法で光を起こしているからだろう。そんな明るい中でも飾られたそれらはちりひとつない。それだけ使用人の質が良く、数が多いという事だ。

アスタの実家も伯爵家だが、昔は財政が苦しかったらしいし、これほど華美ではなかった。

「オクト、大丈夫？」

アスタの言葉にコクリと私は頷いた。想定外のゴージャスさに少し気が遠くなりそうだったけれど身体的には問題ない。アスタと手をつなぎながら、公爵家を歩く。

王子達の言った通り、翌日にはお茶会の招待状が私宛に送られてきた。お茶会の事を考えるととても憂鬱だったが、それよりもその後のマナー教室や服選びが地獄だった。

アスタのお母様が異様に張りきり、指導してくれたはいいが、OKがでるまでずっとお茶を飲まされたのだ。何この拷問と思えば、今度は服を選ばねばと何着も着せ替えさせられた。胃袋の中身が出なかったのは奇跡だ。母は加減というものを知らないとアスタが後から教えてくれたが、それは事前に教えるべきだろう、この野郎。

お茶会当日になった時は憂鬱ではなく、むしろ解放感に包まれ幸せな気分になった。ある意味良かったのかもしれない。

「アロツロ子爵様はこちらでお待ち下さい」

先を歩いていた、公爵家のメイドさんが頭を下げた。背中には綺

麗な緑の羽根が生えていて、まるで天使のような人だ。

「オクト行つてらっしゃい」

「……行つてきます」

お茶会は女性だけで。

それが今回のお茶会の決まりだ。いくらアスタが保護者でも、最後までではついてこれない。アスタが居なくてもまあ何とかかなると思うが、貴族の屋敷というのは少し緊張する。

「ではオクトお嬢様。ここからは、私と行きましょう」

アスタの手が離れると赤茶の髪をポニーテールにした少女が私の前にやってきた。その顔を見た瞬間私は固まった。

「今日一日、オクトお嬢様の身の回りの世話をする、ライスですよ。よろしく願いますね」

琥珀色の瞳が楽しげに細まる。少し肌が日に焼け浅黒いが、とびきりの美少女だ……見た目はだが。

どういう事?!とアスタを見れば、アスタは普段と変わらないし、ここまで案内してくれたメイドさんも同じだ。えっ?アスタは流石に、気がついてきているよね。だとしたらこれは想定内って事だろうか?

「さあお嬢様、行きますわよ」

手を握られ、私は口をパクパクと動かした。しかし上手く言葉にならない。

「ラ、ライスって……」

「お嬢様の今日が素晴らしい日となるよう、誠心誠意こめてお仕えますわ」

そういつて笑ったライスの顔は女優顔負けのスマイルが張り付いている。しかし細められた目は、騒ぐんじゃねーぞと脅すかのよう

に冷めていた。

やっぱりライスって、ライだよね。

護衛をつけるって、ライの事だったのか?!と叫びたい気持ちを抑え、私はお茶会が開かれている部屋まで大人しく歩く。変装している事がばれるのは、私がつまぐ伯爵夫人とお近づきになれないよりもマズイだろう。

とにかく冷静になろうと、軽く深呼吸する。

よし、大丈夫だ。それにライが護衛に回ったのは、混ぜモノにおびえないという条件を満たす為という事で仕方がなかったのかも知れない。伯爵邸のメイドさん達も表面的には怯えたところを見せない。伯父さん流だが、流石にメイドさんでは護衛は難しいだろう。その点ライが強いという事は、この目でも見ているので、間違いはない。

「ライスさん、お願いします」

「ライスでいいですわ」

美味しそうな偽名ですねと思ったが、にっこり笑うだけで止めておく。ライも好きでやっているわけではないだろう。

「ライス、誰が誰が分かったら教えて。仲良くなりたいたいから」

「はい。かしこまりました」

本当は仲良くなる気などないが、伯爵夫人だけ興味を示したら、絶対怪しまれる。ここは一つ、子供の外見を生かして、『好奇心旺盛な年頃なんです』を演じた方がいいだろう。

「サロンで皆さまお待ちかねですので、そちらでご説明いたしますね」

たどりつい場所でライが扉を開けると、全員が一斉に私を見た。その目は物珍しげなものから、恐怖が走ったものまで様々だ。人数としては十数名といったところか。

悲鳴を上げられなかっただけマシとしよう。私は心の中で人と言う字を何度も書いた。

「本日はお招きくださりありがとうございます」

ドレスの裾を持ち膝を少しだけ曲げる。そしてとりあえず、敵意はありませんよと示す為にほほ笑んだ。混ぜモノが微笑もうが、無表情だろうがたいして意味などないかもしれないけれど、やらないよりはマシだ。

「……えっ」

「ん？」

小さくライがつぶやいたので首をかしげて見上げれば、丸くした目とぶつかった。どうかしたのかと手を引けば、ライは慌てて首を振る。

「いや。……お嬢様。あちらにいらっしゃる、緑のドレスを着た方がローザ公爵令嬢です」

「分かった。挨拶する」

私はカミュ王子の従兄殿にあいさつすべく、足を向けた。全員の視線が私に突き刺さるのを感じて、舌打ちしたくなかったが我慢する。もう少しさりげなく見れば良いのに、隠す気もなさそうだ。そして私が近づくと、周りの女性たちがさつと道を作るかのように間を開けた。ある意味歩きやすい。

公爵令嬢だけは私がたどりつくのを待っていてくれるようです。と同じ場所で立っていて下さった。まあ例え逃げ腰だったとしても、挨拶をしなければマナー違反になるので追いかけるだけだ。

「お初にお目にかかります、ローザ公爵令嬢様。私はアロツロ子爵の娘、オクトと申します。本日はお茶会へお招きありがとうございます」

入り口前でやったのと同じように、膝を少し曲げてあいさつし微笑む。普段はそんなに笑う必要性がないので、明日は顔が筋肉痛かもしれない。

「よく来て下さったわ。カミュの言う通り、可愛らしい方ね。オクトちゃんと呼んでもよろしいかしら？」

「……構いません」

何だかフレンドリーな方だ。確かにカミュ王子の従兄のようで、カミュと同じ、目と髪の色をしている。年頃は15か、16くらいで、カミュ王子よりも年上のようだ。

「オクトちゃんは、普段は何をなさっているの？」

「えっ……。今はまだ語学を勉強させていただいている最中です。いつも勉強しているわけではないでしょう？趣味はないの？」

趣味は家事ですなんて言えない。かといって、レース編みとか、刺繍とか、全くできないし。どうしよう。

「あー……。料理を少々。それと、今は学ぶ事が楽しくて、絵本を読んでいます」

嘘ではない。ただ料理は趣味というには、所帯じみ、生きる為の意味が強すぎるけれど。

「そうでしたの。今度ご馳走して下さると嬉しいわ。私は乗馬を良くしますのよ。よければ、今度ご一緒しません？」

「……光栄です？」

なんて返せばいいんだ、これ。

これはきつと社交辞令と呼ばれる類のものだ。それは分かるが……ここは『めっそももない』と断るべきか、それとも『乗馬とは、素晴らしいですね』とさりげなく話を変えるべきだったのか判断がつかない。

貴族と話すなんて生まれてこの方、アスタとアスタの両親だけなので、何を喋っているのか、どういえば失礼にあたらないのかが、分からない。お婆様によるお茶会マナーコーザでは、話術に関して重点を置いて居なかった。挨拶だけなんとか付け焼刃だがマスターしたくらいである。

「馬はいいですよ。馬で滑走する時に切る風はとても気持ちがいいの」



「……怖くないですか？」

「そうね。彼らは少し臆病なところがあるから、驚かせると怪我を  
してしまうわ。でもちゃんと信頼関係が結べていれば、問題ない事  
よ。それはどんな生き物にも言えることだと思っの」

「はあ」

何とも活発なお姫様である。それとも、この国では乗馬を女性も  
嗜むものとなつているのだろうか。まだ貴族ビギナーの身としては  
良く分らない世界だ。

「そういえば、本日はオクトちゃんはお友達を作りに来たのよね。  
そうね。あちらにいらっしやる、アーチェロ伯爵は素晴らしい方  
すのよ」

きた。

きつとカミュ王子から、伯爵夫人を紹介するように言われていた  
のだろう。しかし伯爵夫人ではなく、伯爵？

「伯爵様……ですか？」

「旦那さまを亡くされて、今は殿方に混じりながら、伯爵邸を仕切  
つてみますの」

示された方を見れば、青いシンプルなドレスを着た女性がいた。  
ドレスを着ているのに、あまり女性らしさを感じさせない方だ。ほ  
んわかという雰囲気はない。

私たちが見ている事に気がついたのか、アーチェロ伯爵はこちら  
へやってきた。

「まあ、アーチェロ伯爵。今、貴方の噂をしていたのよ。こちらは、  
アロツロ子爵の娘のオクトちゃんよ」

「初めまして、オクト嬢。イリス・アーチェロと申します。爵位は  
伯爵を賜っています」

「オクトです。よろしくお願ひします」

近づくと、アーチェロ伯爵はより長身に見えた。細身のドレスを  
着ているから余計にそう思うのかも。まとう空気もやはり

シャープで、男装などしたらさぞ似合うのだろう。

ただこの方が、女性を殺しているのかと言われれば、首をかしげたくなつた。上手く表現できないが、日本で言う武士に良く似ていて、潔く感じる。

ちらつとライを見れば、彼は使用人らしく少し目を伏せて直接婦人たちを見ないように努めていた。それでもどこか警戒しているように、私を握る手に力が少し入っている。

やっぱり、この人か。

疑問は残るが、私はまずはお近づきにならなければ始まらないと、にこりと邪気のない笑みで微笑む事にした。

お茶会は和やかに始まった。

流石公爵家といおうか、お茶は香りがよくとても美味しい。ただし胃の痛みで、あまり味わえなかったが。

……何で私、公爵令嬢の隣にいるだろう。

というのもお茶会といえど、今回は大人数でやる食事パーティーのようなものだ。公爵令嬢の周りは、権力者の娘が座るとというのが普通である。そして子爵と言うのは、貴族の中では実はそれほど位は高くない。しかし何を思ったかローザ様は私と伯爵様を一番近い席に置いた。今までは混ぜモノであるがゆえの視線だったのに、今はそこに妬ましさとかが加わっていて、私の胃はキリキリ悲鳴を上げている。

伯爵との顔合わせが終わった私は、末席でようやく息がつける予定だったはずなのに。

「まあ、アーチェロ伯爵も乗馬をするのね」

「ええ。最近はなかなかできませんが、以前は暇を見つけてはよく乗っていたものです」

どうやらローザ様とアーチェロ伯爵は趣味が合うようで、話が盛り上がっている。できるならば、私抜きでお願いしたいところだ。

嫉妬からくる視線は間違いなく、この二人の所為だと思う。皆、公爵令嬢とは仲良くなりたいたらうし、アーチェロ伯爵は宝塚的な感じで人気がありそうだ。

変わるものならば変わるよと睨み返したいが、混ぜモノに睨まれば倒れかねないようなお嬢様ばかりである。我慢の二文字に徹するしかない。

「オクトお嬢様、お茶のお代わりはいかがでしょう？」

「……いただきます」

そのうち血液まで紅茶になりそうなペースで飲んでいるが、会話に加われないので飲んで暇をつぶすしかなかった。幸いにも紅茶が美味しいので、それほど苦痛ではない。

「ではアーチエロ伯爵とオクトちゃんの3人で馬に乗って出かけましょうか」

何ですと?!

明らかにさつきまで私は会話に入っていなかったはずだ。それどころか空気に近かったはず。なのに何故私の名前が出るんだろう。話の流れ方が明らかにおかしい。

ブツと紅茶を吹きかけたのを、根性で止めたのはかなりのファインプレーだ。

「げほつ。……ごほつ……あ、あの。ローザ様……私は」

「オクト様、木イチゴのタルトはいかがですか？」

「……食べます」

ライが私の皿の中にタルトをとりわけた。

このタイミングで話しかけることは、断るなど言いたいのだろう。人事だと思つて……。確かに伯爵ともつと仲良くなった方がライ達には有利だろうが、私の危険度も同じく増している。しかも約束の内容が乗馬。5歳で乗馬。無理だと誰か気づけ。

「ローザ嬢。突然誘つては、オクト嬢が困つてみえますよ。オクト嬢は乗馬の経験は？」

ありがとう伯爵さま!!

私は救世主に切迫したこの状況を伝えようと、ぶんぶんと横に首を振つた。あるはずがない。

私が関わつた事がある馬は、一座で飼っていた足の短い荷馬車ぐらいた。それだつて、私が近づく事は許されなかったので、遠目から見るだけで餌をやつたこともない。……後は前世でカルーセルと

か？いや、あれは違う。

「よろしければ、私がお教えしますよ。最初は私と一緒に乗れば、振り落とされる事ありませんから」

「いえ。そこまで迷惑は……」

伯爵様はかなりいい人のようだ。普通は例え冗談でも混ぜモノと一緒に馬に乗ろうなどと、口が裂けても言えない。お人よしなのか、何なのか。

でもできるなら空気を読んで、止めましようと言って欲しかった。迷惑ではありませんよ。実は私には、オクト嬢と同じぐらいの弟がおりまして、一度弟と一緒に馬に乗りたくて常々思っていたのです。ですが中々それも叶わないので、できたらぜひ一緒に乗りたいのですよ」

「何故弟さんと乗られないんですの？」

「うちの愚弟は軟弱でして。もう7つにもなるので剣術も学ばせたいところなのですが、体が弱くそれもままならないのですよ」

伯爵が少し影のある笑みを浮かべると、ほうとため息が聞こえた。ふと周りを見渡せば、皆が憂いを帯びた瞳で伯爵を見ている。

「まあお可哀そうに」

「よろしければ、私と懇意にしている主治医をご紹介しますわ」

「いえ、それよりも私の家の魔術師が力添えできるかと」

「私、弟様が元気になれるよう、呪いをしますわ」

…… あー、アーチエロ伯爵は皆のアイドルなんですわ。

確かに娯楽の少ない世界だ。しかも基本貴族のご令嬢は屋敷にこもりつきりなので、ほぼ出会いもない。その結果、宝塚っぽいこの伯爵が、いい感じなのだろう。

「ありがとう。気持ちだけ受け取っておくよ」

ここに、『子猫ちゃん』なんて言葉がついたら失神する者が出るんじゃないかと思うような、黄色い声が木霊した。……私も貴族生活が続けると、いつかこうなるのだろうか。あまり歓迎はした

くない。

「そういうわけだから、オクト嬢も一緒に乗馬してもらえないだろうか」

正直断りたい。

嫉妬を帯びた周りの視線が怖いのだ。しかしそれと同時に、ライの視線も感じる。多分翻訳すれば、『断るな』だろう。鬼つ子め。

「……分かりました。ただし本当に乗れませんから」

団長に馬に近づくなと言われた事を考えると、やはり混ぜモノは動物とかにも嫌われているんじゃないかと思う。もしそうなら1人体操座りで見学コースだ。……その方が安全で良いかもしれない。

「ありがとう」

「いえ。御礼を言われる事では……というか、言わないで下さい。はい」

お姉さま方の視線が痛いんです。

逃げ出したい気分を振り払う様に、私はタルトを齧る。胃は痛いけれど、タルトは美味しい。一生懸命タルトの甘酸っぱさを味わって一瞬だけでも視線を忘れられるように努力する。

人間努力すれば、適応できるはずだ。

「そういえば、カミュから、オクトちゃんは医術の心得があると聞いたけれど、その辺りどうなの？」

医術?! どうなのと聞きたいのは私の方だ。私は医術に心得があるなんて、一言も言っていない。ライをちらりと見れば、しれっとした表情で姿勢よく立っている。

カミュ王子にいらん事を話したのはお前だろうが。

「いえ……医術と呼べるほどのものは知らん……ません」

あまりの驚きで、敬語が吹っ飛びそうになったのを無理やり繋ぎとめる。あんなの、たまたま偶然だから。医術なんて凄いもの知らないよ。私は誤魔化す為に、無理やり笑顔を作った。

「そんな謙遜なさらなくても。海の精霊の呪いを消したという話で最近持ち切りですよ」

「……ライツ!!」

「オクトお嬢様、アップルパイはいかがですか？」

「……食べる」

こうなったらこき使ってやると睨めば、若干ライも顔を引きつさせた。その表情を見て、少しだけ留飲が下がる。

まったく、何でそんな迷惑なうわさを流すんだ。

「オクト嬢、それは本当ですか？」

「あは……偶然です」

嘘ではないが、知っていたのはたまたまだ。何でも治せるとか思われら困る。私は医者ではない。

「失礼ですがオクト嬢は今おいくつですか？」

「5歳です」

何だろう。この近所のおばさんに、何歳になったの？と聞かれているような状態は。私が年を言えたところで、微笑ましくも何でもないのだけだ。

「えっ……5歳ですか？」

「はい」

「すっかりされているので、もう少し上なのかと……」

「……私の顔はそんなに老け顔か？」

両親そろっていないので、誕生日も分からない私は本当に5歳とに限らない。しかし少なくとも驚かれるほど違ってはいないはずだ。確かに喋り方は、普通の幼児とは違う気はするが。

「でも5歳でそれだけの知識をお持ちとは、オクト嬢は凄いですね」「折角だから、弟さんの事を見ていただいたらどうかしら？オクトちゃんは医師ではないのかもしれないけれど、今まで誰も消せなかった呪いを消したのよ」

余計な事を。

ローザは全く悪気のない無邪気な笑みで私を見た。これもカミユ王子の計らい何だろうか。ああ、断りたい。断って、もう家に帰りたい。

「オクトお嬢様、お茶はいかがですか？」

……分かりましたよ。

絶対嫌だという言葉を経茶と一緒に喉の奥へ流し込んだ。



お茶会の1週間後私は晴れて初めての乗馬体験をする事になった。そしてそれが終わり次第、伯爵の弟君の容態を見る予定だ。そう、その予定だったのだが……。

「それがどうして、こうなった」

薔薇の浮かんだ湯船につかりながら、私は深くため息をついた。

現在私は入浴している。ただしここはアスタの家でも、アスタの実家の浴室でもない。何と初めて訪問したアーチェロ伯爵の家だったりする。

「悪夢だ……」

私は団長が馬に近づいてはいけないと言ったのは、馬が私を見て怯えるからだと思っていた。しかし現実はその斜め上に裏切った。乗馬しようと馬小屋へ向かう時だった。たまたま小屋から出ている馬たちがご主人の静止も聞かず鼻息荒く私の方へやってくると、力の限り私へ甘えたのだ。しかし五歳の体格からすると、馬など見上げるほど大きい。彼らの甘えるという好意に対して、私は本気で食べられるのかと思った。舐められたり、腕を口で引っ張られたり、髪の毛を食べられたりしたのだからそう思っても仕方ないと思う。

皆がありえない状況にポカーンとしている中、一番最初に我に返った伯爵が馬から私をひきはがした時にはすでに、私は唾液でどろどろ状態だった。伯爵はそのまま屋敷へ連れて来ると、湯船を貸してくれた。

とりあえずもう2度と馬には近づかないと私は心に誓った。

ざばりと風呂から出ると、私は置いてあるタオルで体を拭き、ドレスに着替えた。今日もライがメイド姿でついてきているが、風呂の手伝いは断り、廊下で待って居てもらっている。

別に見られてもこのつるべたな体ではどうという事もないのだが、ライは私が断った事に心底ほっとした様子だった。

「この間のお返して嫌がらせするなら、あえて手伝わせても良かったのか」

今更ながらに気がついたが、人に体を洗われるとか、着替えを手伝われるとかどうも馴れない。手伝わせるのはライへの嫌がらせにはなるだろうが、同時に自分への精神的苦痛も大きそうだ。

タオルで髪を拭きながら外に出ると、扉の前でライが直立不動で立っていた。

「お待たせ」

「お風呂の湯加減はよろしかったでしょうか？」

「うん。でも、薔薇とお湯がもつたいなかった」

こんな時間じゃお風呂にはいるのは私だけだろう。生憎とアーチエロ伯爵の風呂には追い炊き機能がないので、冷めたら使えない。

薔薇だって、あんなもつたいたい使い方をしなくてもいいのにと思ってしまう。あれだけあったら、薔薇ジャムとか色々使えそうだ。

「それは慣れて下さいね」

うん、無理。

なれたら、それは色々死活問題になりそうだ。いつまでも貴族で居られるなんてお花畑な妄想は持ち合わせてはいない。

首を振ると、まだ髪に水分が残っているようで、水滴が飛び散った。

「オクトお嬢様。このままでは風邪をひかれてしまいますわ。髪を乾かしてから、伯爵様の元へ向かいましょう」

「大丈夫」

そんな事で風邪を引くほどやわな体のつくりはしていない。

「ですが今伯爵の元へ直接行かれると、まだ乗馬中かと」

「分かった。髪を乾かす」

「それがよろしいかと思えますわ」

ちっ。

ライの言い分を素直に聞くのも嫌だが、それよりも乗馬の方が嫌だ。折角綺麗になったのに、また唾液でべとべとに誰がなりたいたいと思うだろう。

「ではオクトお嬢様。こちらへ」

ライの後ろを歩いていくと、前方から小さな男の子が歩いてきた。私より大きい。ライよりは小さい。ライは少年を見ると、すぐさま端へより頭を下げた。

ん？どうしよう。私も頭を下げるべきだろうか。

「オクトはそのまま立ってる」

ボソリと私にしか聞こえない声で、ライが私に指示する。

そういえば貴族は、ペコペコ頭を下げてはいけないんだ。私はとりあえず少年を見た。チョコレート色の柔らかそうな髪をした少年は私に気がつく、緑の瞳を大きく見開いた。

「ま、混ぜモノさんっ?!」

「はあ。混ぜモノですね」

ライが頭を下げた相手なので、たぶん偉い人の子供なのだろう。私はとりあえず敬語で受け答えをした。しかし初対面の人間を指すのは如何なものだろう。

少年は私を少し怖がっているようだが、好奇心からかジリジリと私に近寄ってくる。逃げるわけにもいかず、私はライの隣でとりあえず立っていた。

「嘘。どうしてここに？僕、初めて見た」

「そうですか」

以前カミュ王子から聞いた話だと、この国にいる混ぜモノは私だけらしい。そりゃ、初めての可能性が高いだろう。

「僕、いつも混ぜモノさんの話を読んでるんだ」

「混ぜモノさんの話ですか？」

何だそれ。

そもそも混ぜモノにさんを付けるのはおかしいのではないだろう

か。私の名前は混ぜモノではない。

「うん。混ぜモノさんは凄いカッコいいんだよ」

一体少年の言う混ぜモノさんとは何なのか。

私はさっぱり話についていけず、首をかしげた。

「混ぜモノさんとは、何でしょう？」

「えー、混ぜモノさんのくせに知らないの？」

「はあ。無学ですみません」

私が悪いわけではないのだが、あまりに少年が落胆しているので、つい謝ってしまう。

「混ぜモノさんは、僕が読んでる小説だよ。見せてあげるっ！！」

「えっ、ちよつと」

少年は私の意思を確認することなく、手を掴むとぐいぐいと引っ張った。私より全然子供らしい子供だが、体格は少年の方が大きい。引っ張られる形で、私は少年についていく事になった。

「あの。貴方はもしかして、アーチェロ伯爵の弟様ですか？」

とある一室に連れ込まれたところで、ようやく私は相手が誰なのか気がついた。少年が連れてきた部屋は、子供部屋のような。机やベットが小ぶりである。こんな部屋に自由に出入りするという事は、この屋敷の子供に決まっていた。

それにしても、体が弱いつて嘘だろ。少なくとも私より元気で子供らしい。

「うん。そーだよ。僕は伯爵の弟のエストだよ。混ぜモノさんは？」

「アロツロ子爵の娘のオクトと申します。よろしくお願いします」

エストの手が離れたので、私はスカートを持ち上げ、少し膝を曲げた。まあ挨拶なんて今更な気はしたけれど。

「うん。よろしく。じゃあ、オクトはそこで座って待ってて。今、混ぜモノさんの本取ってくるからっ！！」

返事をする前に、パタパタと小走りでエストが出て行ってしまい、

私はどうするべきかと首をかしげた。屋敷を勝手にウロウロしていたら伯爵も気を悪くするのではないだろうか。しかしここまでは私の意思で来たわけでもないし……。

「エスト坊ちやまが座れって言ってるんだから座れよ。ついでに髪を拭くから」

「……ライス。それだと女の人に見えない」

「今は誰もいないんだからいいだろ。あーもう、カミュの奴、また女装させやがって。前ははまだしも、今回は執事にしろよ……はあ」  
そんな事私に言われても困る。まあ確かに、海賊への潜入に続いて、今度はメイド。少し同情をしなくもない。

私は椅子に座りながら、ライを見あげた。そういえば、ライは一体何者なのだろう。王子の部下には間違いないだろうが、それにしては若すぎる。まあ王子も吸血夫人事件を追うには、明らかに若すぎるんだけど。

「ライスって、いくつ？」

「12だけど、それがどうかしたか？」

「……いや、若いなど」

「お前には言われたくないって」

まあ、確かに。5歳児に若いなど言われたら、反応に困るだろう。ライはあきれた様子で、私の髪を拭き始めた。何処で学んだのか、髪の毛を拭く手は優しく丁寧だ。この辺りも不思議な点である。ライは一体何者なのだろう。

「ああ。言葉が足りなかった。仕事をするには、若いなど」

「あー。俺もカミュもまだ学生だしな。早いつちゃ早いか。俺はカミュの乳兄弟だから、付き合ってるんだけどさ」

乳兄弟とは、何ともセレブな関係だ。確かにカミュは王子なのだから、そういう存在が居たとしてもおかしくはない。

「さあオクトお嬢様。しばらく大人しくしてて下さいね。も

うすぐ終わりますから」

唐突にライの口調が変わったと思ったら、ガチャッと扉が開く。扉の向こうではエストが本を抱えて立っていた。私は全く気がつかなかったのに。……流石護衛をするだけはある。

「オクト、持って来たよ」

エストが持ってきたのは、絵本よりももう少し活字の多い書物だった。ただし一般的な書物よりは文字が大きく、児童書のようなうた。エストが開いた部分の挿絵には、顔に蔦のような模様が入った少年が描かれていた。

「これが、混ぜモノさん？」

「そう。混ぜモノさんだよ。いつつも、メンドクサイっていつてダラダラしている、怠け者なんだ」

……それはカッコいいのか？怠け者という言葉は、先ほどの少年が言った言葉と相反する気がした。

「でもね、混ぜモノさんは困っている人が居ると、メンドクサイって言いながら助けてくれるんだ。助けられない方がメンドクサイって混ぜモノさんは言うけどね、すっごく優しいんだと思うよ」

エストは本当に混ぜモノさんとやらが好きなんだろう。キラキラした目で私に混ぜモノさんの素晴らしさを説明した。

私が適当に相槌をうつとエストはさらに興奮しながら混ぜモノさんについて語った。おかげで、短時間の間に私は混ぜモノさんを読んでいないにも関わらず全てを網羅した気分である。それにしてもこれほどまでに見ず知らずの相手に楽しそうに話すとは、……普段話をする相手が居ないのだろうか？

「混ぜモノさんは、伯爵も読むの？」

「うっん。姉上は忙しいから……」

伯爵の事を聞くとエストは突然顔色を変えた。しょんぼりしたというよりは、血の気が引いたような顔色をしている。

「そう。伯爵とはあまり話さないの？」

再度尋ねると、エストは突然泣きそうな顔をした。まさかそんな表情をされるとは思っていなくて、ぎよっとする。

「オクトは、混ぜモノさんだよね」

「うん。まあ。混ぜモノには違いかな」

小説のお混ぜモノさんよりは、面倒くさがりではなく、優しく、強くないけれど。と心の中で付け加える。

「僕、このままじゃ、姉上に殺されちゃうんだ。オクト、助けて！」

「……へ？」

私はエストの唐突なカミングアウトに、茫然とした。

「……どういう事？」

吸血夫人と伯爵。全くイコールで繋がらなかったのに、まさかの弟さんからのカミングアウト。殺されるとは、穏やかな話ではない。……本当に伯爵が吸血夫人なのだろうか。短い付き合いだが、私にはそうだと思えなかった。

「姉上は、僕が嫌いなんだ」

「そうなの？」

「うん。だから姉上は僕を殺そうと呪っているんだ」  
呪いねえ。

どうも乗馬大好き体育会系な伯爵のイメージとは合わない言葉だ。それに私は前世の記憶があるせいか、呪いというあいまいな分野をあまり信じられずにいた。もちろん魔法ありの不思議世界なので、本当は凄い呪いがあるのかもしれない。しかし海の精霊の呪いの事を思い出すと、どうも迷信という言葉が先にできてしまう。

「どうやって？」

ここで女の人の血を使つてとか具体的な話が出てれば、私の仕事は終わりだ。呪いは信じていないが、呪いを信じている人がこの世にはいる事を私は知っている。

「分からないけれど、姉上が呪い殺そうとしているのは間違いないんだよ」

「何で？」

「僕、本当は病弱なんかじゃないんだ。でも姉上が近づくと呼吸が苦しくなるんだ。本当だよ」

エストは真剣な顔で私を見た。呪いかどうかは別として、エストが本気でそう思っているという事は分かる。



呼吸が苦しいかあ。

姉が近づくと苦しいなんて、精神的なもののようにだが……はて。もしも精神的なものならば、どうしてエストは伯爵が怖いのだろう。もしかして伯爵は内弁慶で、家族にはきつく当たるとか？  
今一ピンと来ず、私は首をかしげた。

「もういいよ。オクトも、僕の事信用してくれないんだ」

「いや、信用しないというか。私は呪いというものを知らなくて。近づくると苦しくなる呪いとは、どうやってやるのだろうかと考えていた」

「……信じてくれたの？」

「嘘じゃないんだよね」

エストはパツと顔を輝かせると、コクコクと何度も頷いた。

原因はどれであれ、苦しいには変わりがないだろう。エストが言う事が嘘だと否定できるほど、私も情報を持っていない。

「信じてくれたの、オクトが初めてだ。使用人はみんな、姉上の味方なんだ。だれも僕の言う事信じてくれなかったんだよ」

確かにあの伯爵を思い出すと、呪いには程遠い人のように思う。混ぜモノに対してさえ、あれほどに優しいのだ。使用人にも人気があるに違いない。

だからこそ使用人達は、エストが構って欲しいがために嘘をついていると判断したのだろう。

「そう。エストは伯爵の事は嫌い？」

私の言葉にエストは困ったような表情をした後、首を横に振った。  
「嫌い……じゃないよ。ただ姉上が、僕を嫌いなだけ」

しょんぼりとする姿は、まるで犬のようだ。不謹慎だが、少し可愛らしい。しかしだ。嫌われているからしょんぼりすると言う事は、エストはかなり姉の事が好きなのではないだろうか。なのにエストが伯爵に怯えて気分が悪くなる……なんでやねん。

思わず関西弁でツツコミを入れたくなるぐらい、おかしい話だ。

ここは嫌いと聞かず、怖いと尋ねれば良かったのか。

「エストは伯爵が呪いをするところを見た事はあるの?」

「ないよ。でも夜いない事があるから……きつと、その時にやってくるんだ」

夜にいないかあ。

そのフリーズと呪いという言葉だけ聞けば、吸血夫人につながりそうな話だよなと思う。ライの方をちらりと見たが、ライは使用人らしくまるで話など聞いていないかのように立っていた。

コンコン。

「エスト、入ってもいいだろうか?」

扉がノックされたと思うと、伯爵の声が聞こえた。ビクリとエストが体を揺らす。顔が蠟のように白くなるのを見て私はなんとなく、エストの手を握った。子供の手のはずなのに冷たいのは緊張しているからだろう。

やはり精神的な問題だろうか。

エストは私を見ると、何かを決意するようにコクリと頷いた。

「いいよ、姉上」

部屋に入ってきた伯爵は乗馬の服装のままだった。あの後きつと公爵令嬢と一緒に馬に乗って散策をしたのだろう。

「ああ。やはりオクト嬢はエストと一緒に見えたのですね」

「はい。勝手にお邪魔してしまいすみません。それと、先ほどはお風呂をありがとうございます」

「いえいえ。むしろ怪我をさせないお約束でしたのに、怖い思いをさせてしまい申し訳ありませんでした。それにエストがオクト嬢を無理やり部屋へ招いた事はメイドから聞いておりますから」

うーん。やはり礼儀正しい人だ。すっかり私の事情を聞いている

ところをみると人の話を聞かずに怒ったりとかしないだろう。だとすると、エストは一体伯爵の何が怖いのか。

「乗馬はもう終わられたのですか？」

「ローザ様はまだ乗ってらっしゃいますよ。私は少し休憩です。それでエストはご迷惑をかけなかったでしょうか？オクト嬢に比べてどうにも子供っぽいところがありますから」

「いいえ。エスト様に本を教えていただき、楽しいひと時を過ごさせてもらいました」

まさか伯爵の悪口を言っていましたなんて馬鹿正直には言えないので、私は最初に連れ込まれた原因を話す事にした。

「エスト、何の本を持って来たんだい」

「……混ぜモノさんの話」

伯爵が近づくと、エストは私の手をギュッと握り返した。少し体が震えている。

「ああ。エストはこの話が好きだものね」

「うん」

伯爵はテーブルの上に置かれた本を持ち上げた。

特に伯爵には本を馬鹿にする雰囲気はない。むしろ弟の好きなものをちゃんと把握していて、いいお姉さんといった感じだ。

何がいけないというのだろう。

「けほっ」

小さくエストが咳をした。どうしたのだろうかとうとエストを見た瞬間彼は咽るように咳き込みだした。何が起こったのか分からず私は茫然としたが、少しして慌てて彼の背中をさすった。

「オクト嬢が来て下さって楽しかっただろうけれど、体があまり強くないのだから無理はしちゃいけないよ。ほら、ベットで横になりなさい」

ゼイゼイと苦しそうに呼吸するエストを伯爵は抱えると、ベット

の上に下ろした。エストも苦しいのか、されるがままだ。

先ほどまで確かに元気だったのに。一瞬で彼は病人になってしまった。

伯爵が怖いからとか精神的なものかと思ったが、それだけとは思えない呼吸音だ。まるで。

「メイドに薬を持ってこさせるから、休んでなさい。オクト嬢、申し訳ないですが、弟がこのような状態ですので、場所を移しても構わないでしょうか」

「はい。エスト様、……お大事にして下さい」

伯爵に続いて部屋からでていこうとすると、エストと目があった。その目は行かないでと継るようだ。それでも私には伯爵の言葉を断るだけの理由がなく、大人しく部屋をでた。

それに例え部屋に残ったとしても、私ではやれることなどない。

「オクト嬢は弟の事をどう思いましたか？」

伯爵と並んで歩いていると、ぽつりと話しかけられた。

「あつた時は、お元気な方だと思いましたが……」

そうあんな風に呼吸困難になるような子供にはとても思えなかった。本人が呪われていると思ってもおかしくないほど、劇的な変化だったように思う。

「そうですね。私もそう思います」

伯爵はすんなりと私の言葉を肯定した。さっきは確かにエストに対して体が弱い云々といっていたはずなのに。どういう事だろうと私は伯爵を見上げた。

「申し訳ありませんが、オクト嬢のメイドに、エストの薬を持ってくるよう伝言を頼めないでしょうか。メイド頭は今、馬小屋の方にいるはずですので」

「ライス、……頼んでもいい？」

「承知しました」

あまりライと別れたくはないが、ここで断って変に勘ぐられるの

も困る。きつと私と一緒に馬小屋に行くのは色々不味いと思ったの  
だろう。

ライが行ってしまったと、伯爵は再び歩き出した。

「弟は普段はどうという事もないのですが、昔乗馬をしようとして  
倒れてから、ああやって稀に発作を起こし呼吸困難になるんですよ」  
「そうなんですか」

「主治医には、精神的なものであると言われてはいるんですけど  
ね。本当はそれほど苦しいわけではないのにわざと苦しがつている  
のではないかと」

……そうだろうか。

エストは確かにあの時苦しがつていたように思う。わざとにはと  
ても思えなかった。

「主治医がそういうのは、特に私が近づいた時に発作が起きる事が  
多かったからというのもあるのですけどね。私あまり構ってや  
れないので、気を引きたがっているのかもしれない。もちろん何  
か疾患はあるのでしょうか」

気を引きたい？

本当に？むしろエストの行動は逆ではないだろうか。本当は好き  
なのに、怖くて仕方がない。あの冷たくなった手がそれを物語って  
いるように思えた。

「どうしようもない愚弟ですね。でも、だからこそせめて、その疾  
患だけでも取り除いてやりたいのです」

「それで……っ」

ドスツという音と共に気が遠くなる。

お腹が痛い。何が起こったのか分からないまま私はその場に膝を  
つく。ぐるんと世界が回る。

「すみません」

遠のいていく意識の中、どこか遠い場所で、謝罪する声が聞こえ

た気がした。

「……またか」

目が覚めた私は開口一発、自分の運のなさを嘆くようにつぶやいた。

今年2回目の拉致。……このペースで行けば、フルーティーな名前の姫様並みに拉致監禁を味わえるかもしれない。でも拉致られる理由が、人質とか愛されてではなく、偶然又は血抜きする為って酷過ぎる。

前回に比べてマシなのは、私を助ける為にライヤカミュ王子、それと一応アスタが動いてくれているだろうという事だけだ。

「そして今回はくさり付き……」

部屋は前回ののような牢屋ではなく、ベットもある普通の部屋だ。しかし私の足首には鎖がついており、それがベットの足と繋がっている。大部屋ではなく、1人部屋対応だけど待遇が良くなったとは思えない。むしろ行動制限されて、自分的にはマイナスだ。

「あのタイミングだと、監禁したのはアーチエロ伯爵か」

どうやら鳩尾を殴られたらしく、今も地味にお腹が痛い。幼児虐待もいとところだ。しかしこんな目にあっても、イコール吸血夫人とするのはまだ早い。

何か他の思惑で拉致された可能性だつてあるのだ。それにカミュ王子が流した、『混ぜモノの血には力がある』という噂の所為という事だつてあり得る。それが原因だとしたら、今回の仕事に危険手当を上乗せしてもらおう。

「とにかく、逃げられるなら逃げるべきか」

どういふ事情でこうなっているのかは分からないが、監禁されているという事はいきなりさっくり殺されるといふ事はないはずだ。

もしもそうならば、今頃私はこの世にはいない。

しかし助けを待っていて、間に合いませんでしたなんて事もありません。そうならない為にも自力で脱出する方法も探しておくべきだ。「鎖は流石に切れないか」

引つ張ってみたが、金属できていたため簡単に切れる事はなさそう。足首にはめられた金属は鍵で開閉するようだが、鍵がこの部屋に隠されているなんて事は考えにくい。そして自分の力を考えても、ベットごと移動する事は不可能だろう。

結果。

「物理的には無理」

5分もたたずして、私は力技で逃げ出す事を諦めた。そんな事ができる幼児がいたとしたら、きっとその子供は神様に愛された主人公のような存在だろう。神様に嫌われているとしか思えない自分とは正反対だ。

力がなくても逃げ出す方法を考えなければ……。

「あつ、転移魔法陣があれば逃げられるかも」

ふと海賊の場所からアスタの家へ帰った時に使った魔法陣を思い出した。たしかあれは魔法使いでなくても移動できたはず。

しかし、アレをしつかり再現できるだろうか。そもそもアレはただ書けばいいものなのか。アスタに聞いておけば良かったと後悔する。時間はたつぷりあったというのに、どうして聞かなかったんだ自分。もつともあの時は全力で引きこもる事に夢中だったのだけども「失敗しても怖いしなあ」

殺されたくはないが、逃げるのに失敗して死ぬのも嫌だ。というか何でこんなに死亡フラグしかないのだろう。

うんうんと考え込んでみると、ガチャリと扉が開く音が聞こえた。反射的にドアを見れば、そこにはドレスを着たアーチェロ伯爵が立っていた。まあ予想外な人物でもないもので、驚きは少ない。その



手には食事トレーがのっている。……やはり、今すぐ殺すという事はなさそうだ。

「目が覚めたんですね」

私はそれには答えずジツとアーチエロ伯爵を見る。力もなく、魔法にも頼れないならば、私に残された手段は伯爵との交渉しかない。伯爵が何を望んで私を捕えているのか、間違えたら終わりだ。

「お腹は空いてませんか？お口に合うか分かりませんが、ご飯をお持ちしました」

「……まだ空いていない」

どちらかというところ、殴られた所為で食欲が失せている。いつかは食べなければ死んでしまうが、今すぐどうこうという事もないだろう。

「毒は入ってないですよ。良ければ毒見しましょうか？」

「本当に減ってはいない。お腹が痛くて」

「ああ。私が乱暴な事をしてしまったからですね。すみません」

悪いと思っているのか何なのか、眉を八の字にすると伯爵は頭を下げた。……貴族なのに、頭を下げるんだ。それが少し意外だった。

「今更敬語で話されても……。謝るならコレ、外して」

「……それはできないかな。ごめんね」

まあそうだよな。

そんなあっさり解放してもらえるならば、そもそも拉致監禁なんてするなという話だ。

「なら、何で私は捕まえられている？」

「ごめん。……それも言えないんだ」

伯爵は悲しげに眼を伏せると、トレーをベット横にあるテーブルに置いた。それにしても、捕まえられた理由が聞けないのでは交渉できない。それは困る。

「私も何も知らないまま殺されたくはない。せめて伯爵は私で何をしようとしているのか聞かせて欲しい」

「……オクト嬢は死が怖くないのかい？」

「怖いに決まってる」

何を言っているんだ。私が眉をひそめると、伯爵は苦笑った。

「そうだよな。うん、ごめん。ただ私の弟なら、泣いて助けを求めているところだと思っただ」

そういえば、乗馬に誘った時も伯爵は、弟と私がかぶるような事を言っていた。ただの言いわけと思っていたが、それは彼女にとつての真実なのかもしれない。

そして大切な弟とかぶる私を犠牲にしなければならぬという事は。

「エストの為に私を監禁したの？」

「……いや。私の為だよ。エストは関係ない。これは私のエゴだ」

明らかに、これはエストを庇っているよなあ。

私と関係ないならば、美しい兄弟愛だなと感動すら覚えたかも知れない。しかしそうではないので早くゲロってもらいたいところだ。交渉できないという事は、私に待っているのはバットエンド。それはマズイ。

「先に言っておく。私の血ではエストの病気は治らない」

もしもカミュ王子の流した噂が原因ならば、この話題には乗ってくるはずだ。しかし予想に反して伯爵は困惑気な顔をした。……あれ？

部屋の中に微妙な空気が流れた。

「オクト嬢の血には何か特別なものがあるのかい？」

「いや、ないと思う」

本当のところは、混ぜモノの血に何かあるかは知らないという言葉の方が正しいんだけど……。それにしてもおかしい。もしかして、伯爵は噂を知らない？

「混ぜモノの血には力があるって噂があると、アスタから聞いたん

「ただ。その……伯爵は……」

「いや、聞いたことないな」

マジか。

カミュ王子の噂、全然役立ってないやん。私は想定外の言葉に、頭の中が真っ白になりそうだ。つまり何んだ、どういう事？

ぐるぐると私が監禁されている理由を考えるが思い浮かばない。

「それにしても、そんな下劣な噂を流す者がこの国にいるとは。嘆かわしい」

ですよね。

私の変わりに怒ってくれるのはいい。しかしその噂を流したのは、アーチエロ伯爵やアスタが仕えるこの国の第二王子様だ。なんて残念。

それに。

「全くその通りだけど、拉致監禁する人には言われたくない」

「……そうですね」

ずどんと落ち込む伯爵を見ると、どうしても悪い人には思えなくなってくる。被害者は私なだけだなあ。これが貴族のお嬢様方を虜にする秘訣なのかもしれない。

「分かった。聞き方を変える。伯爵はどうしたら、私を開放する？」

何故なんて聞いていても拉致があかない。こうなったら伯爵の本当の望みを聞いてしまった方が速そうだ。

「それは……できない」

「できない話じゃない。監禁をするならそれ相当の理由があるはず。例えば私を使ってアスタを脅してお金が欲しいという理由なら、金が手に入れば私は必要ないということ。もしそうならその願いを私が叶えてあげる」

もっとも、伯爵の望みがお金という事はないだろう。お金をふんだくるなら、子爵よりも公爵だ。乗馬には、公爵令嬢も参加してい

ただし私では不効率過ぎる。

「ローザ様から、海の精霊の呪いを消した事を聞いたはず。それは本当。私は誰も知らない事を知っている。だからきつと、私は伯爵の力になれる」

我ながら、かなり大きくてたよなと思う。しかしとにかく今は伯爵の信頼を勝ち得ないれば先に進めない。

これで駄目なら、やはり後は誰かの助けを待とう。

「オクト嬢……貴方は、一体……」

困惑する伯爵の目の中に小さな希望が見えた私は、伯爵を安心させられるよう、精一杯笑みを浮かべる。そしてアスタから貰った、誰もが私を見る目を変える呪文を唱えた。

「私は賢者だ」

部屋の中が静まり返る。

……外したかなとチラツと嫌な考えがよぎって、ドキドキした。賢者は流石にまずかつただろうか。大体、自分で賢者と名乗るってどんな羞恥プレイ。

今のは冗談と言って誤魔化してしまいたい気持ちを必死に抑える。

内心あたふたしていると、すつと伯爵がしゃがんだ。

「アーチェロ伯爵？」

「どうか……、どうか。私の弟の病気を治して下さい」

そういつて伯爵が頭を下げた。まさか膝を折られるなんて思ってもみなかった為、私は固まった。

「私は悪魔に魂を、……色々なものを売りました。ですが、弟には何の罪もないのです」

「いや、待って。懺悔されても困る」

私は神様でも聖人君子でもない。自分の命大切さに、取引しようとする俗物的な人間だ。

しかし伯爵は顔を上げなかった。

「お願いします。賢者様、どうか弟を助けて下さい」

血を吐くような、悲鳴のような言葉に聞こえた。ああ、本当に大切なんだ。自分にはそんな相手が誰もいないから、少し羨ましく思えた。

「……病名は気管支炎喘息」

本当ならば先に自分を解放することを約束させるべきだ。もしくは足枷外せとか言うべきだと分かる。それでも先に伝えたくなるほど悲痛なものだった。

まあ、仕方がないか。

「キカンシ？」

「そして原因は、動物性アレルギー。エストはたぶん馬のアレルギーを持ってる」

と言っても、私も医者ではないので絶対とは言えない。しかしエストが体調不良になるタイミングを思い出すと、そこには馬が関わっていた。

乗馬で倒れたのは、アレルギーが発症したから。そしてアーチエロ伯爵が近づくと発作が出るのは、アーチエロ伯爵が乗馬した後にエストに会いに行くから。馬のアレルギーならば説明がつく。

「アレルギーとは何ですか？」

あー……そうか、説明はそこからなるのか。抗体とか免疫云々の話をしても、たぶん余計に混乱するだろう。？型とかそういう話も取り除くべきか。

「……ごく稀に毒ではないものを毒と体が判断する事がある。そのショック症状がでることをアレルギーと呼ぶ。エストは馬のフケもしくは、そこから発生するダニを毒と判断しているのだと思う」

流石に馬アレルギーは、日本では早々お目にかからないが、きつと犬猫アレルギーと似通っているはずだ。

「まさか、馬が？」

信じられないとつぶやく伯爵に私は頷いた。伯爵にとっての気分転換がまさかエストにとつての毒とは、中々理解しがたいだろう。「アレルギーの完治は難しいが、改善はできる。馬に近寄らない事。馬を清潔にしておく事。それと乗馬後は入浴し、服を着替えてからエストに会えば伯爵が近づいても発作は起きない」

食物性のアレルギーならば、食べない事が絶対条件だから、この対処療法で問題はないはずだ。後は。

「それとアレルギーは、体調が悪いと特に酷くでてしまう場合がある。エストは子供だから、体が弱いと引きこもるのではなく、体力作りをする事をお勧めする」

小児喘息ならプールに行けという、話もあるぐらいだ。あれはきつと呼吸機能の向上と体力づくりを狙っているのだろう。あまり調子が悪ければ運動などできないが、元気な時のエストを見る限り、運動など問題なく行えそうだ。

「治療法は以上。……足枷を外して」

「そうですね。乱暴な真似をして済みませんでした」

伯爵はポケットから鍵を取り出すと、足枷を外した。金属ですれた部分が、少し赤いがこれぐらいは、すぐに治るだろう。

「あれ？もう和解しちゃったんだ」

突然誰もいない空間から声が聞こえたかと思うと、カミュ王子とライ、それにアスタが現れた。たぶん転移魔法だけれど、実際傍から見ると凄くびっくりする。

目がおかしくなったんじゃないかと数回瞬きをしたが、彼らが消える事はなかった。どうやら幻ではないようだ。

「……遅い」

「悪い悪い。こっちも色々証拠集めとかに手間取っていたんだよ」  
全然悪いと思っていないような笑顔でライが言えば、その頭をアスタが叩いた。……叩いた？！

あの全然、怒らないアスタが？

「お前は。全然反省していないらしいな。オクトから目を離してまんなまと攫わせた事、俺はまだ許してはないんだけど」

「反省してます。してますからっ！！ちよ、マジでその笑顔止めて。カミュも何とかしろって」

「さてアーチェロ伯爵、少しお話を聞かせて欲しいんだけど」

「おい、無視するなって！！」

巻き込まれたくないと思ったのだろう。カミュ王子はにっこり笑ってライではなく伯爵を見た。

「吸血夫人について、色々聞きたい事があるんだよね。いいかな

？」

語尾は疑問形になっているが、王子の言葉には強制力があつた。あれ？でも、伯爵は混ぜモノの血の噂は知らなかったはずで。

「カミュ王子、伯爵は」

「オクト疲れただろ。ここは王子達に任せて、行こう」

ずっと私はアスタに抱きかかえられると、ドアの方へ歩き出した。

「えっ、アスタ？ちよつと」

私の声など聞こえないかという様子でドアを開けると外へ出る。

そこは最初と変わらず、伯爵の屋敷のようだった。殴られてから、それほど遠くへ運ばれたわけではないらしい。

扉が閉められた所で、私は話を聞かせない為に連れ出されたのだと気がついた。私も巻き込まれたくないのであえて聞きたいとは思わない。思わないが……伯爵は本当に吸血夫人だったのだろうか？

何かがおかしい気がする。

そもそもカミュ王子は、王子なのにどうして伯爵邸に押し入って調べるといふ事をしなかったのだろうか。貴族とはいえ、王家に仕えるもの。こんなまどろっこしい真似をしなくとも、もっとシンプルに問い詰められたのではないだろうか。

もしかしてカミュ王子が犯人と思っっている相手は、アーチェロ伯爵ではない？そしてそれは、王子でも中々調べる事ができない相手。

「オクトちゃん、ごきげんよう」

思考の渦にはまりぐるぐる考えていると、可愛らしい女性の声に呼ばれた。声の方を見ればそこにはローザ様がいた。ああ、そういうえば、ローザ様と一緒に乗馬をしに来たのだと今更思い出す。彼女がまだ滞在しているという事はそれほど長く気絶していたわけではないのだろうか。

「公爵家のご令嬢が何故こちらに？」



「きっとカミュが私に会いに来るから、ここで待っていたの。アロツ子爵、カミュと会う前に少しオクトちゃんと2人つきりでお話させていただけないかしら？」

「申し訳ありませんが、オクトはまだ5歳ですので、そろそろ寝かせたいのですが」

はっ？

今まで放任主義だった奴とは思えない言葉に、啞然としてしまう。寝かせたいって何？

「そんな睨まなくても、何もしないわ。それにすぐ終わるから」

「……オクト、どうする？」

どうすると言われても。

アスタに聞かれて私は首をかしげた。寝かせたいと言うぐらいだから、アスタがさっさとこの屋敷から離れたいと思っているのは分かる。ただ公爵家令嬢に対し、はいさよならでは、少し礼儀に反している気もした。

「少しなら」

そう言うのアスタは私を下に降ろした。

「すぐに帰して下さい。5分たったら迎えに行きますから」

「分かったわ」

瞬きする間に、目の前からアスタの姿が消えた。

2人つきりという言葉をやえる為に律義にどこかへ暇をつぶしに行ったらしい。

「オクトちゃんは、あの魔族にかなり愛されてるのね」

「えっと、そうでしょうか？」

私を寝かせたいという言葉は、ただの言いわけに違いない。私という存在をいのように使っているように思う。でもそんなこちらの事情など、ローザ様を知りようもないのでそう思われても仕方がないのだけだ。

「ええ。でも魔族に愛されるのは大変よ。あの種族は、執着心が強

いもの」

「はあ」

その辺りはたぶん大丈夫じゃないだろうか。  
アスタが自分に執着するとか、想像がつかない。というか、むしろいつ用済み扱いされるかとビクついているのは私の方だ。

「えっと。私を呼びとめたのは、その件でしょうか？」

「いいえ。時間もない事だし、単刀直入に聞くわ。混ぜモノの血に力があるという噂は本当？」

「……たぶん、真つ赤な嘘かと」

噂は出回ってなかったわけではないらしい。となると伯爵の場合  
は、真面目な彼女が激怒しそうだったので、誰も耳に入れなかった  
のだろう。

「やっぱりね。そうだと思っただわ」

「えっと、何故それを私に？」

混ぜモノだからだろうか。いやいや、混ぜモノだったら余計に自  
分の不利になりそうな噂なら嘘をつくだろう。

かといって他の理由も思い浮かばない。5歳児に聞くよりは、王  
宮に勤める魔術師に聞いた方が信頼度も高いと思う。

「だってオクトちゃんは賢者様なのでしょう？」

そっちの噂は一体何処まで広がっているのだろう。さっきは場合  
が場合だったので、自分からそう名乗らせてもらったが、改めて聞  
くと恥ずかしい。

「ねえ。賢者様は、私の事何歳だと思う？」

「……16歳ぐらいでしょうか？」

唐突に話が変わり驚いたが、私は失礼にあたらないように答える。  
彼女ぐらいの年齢だと、大人っぽく見られたいのか、それとも若く  
見られたいのか微妙なラインだ。

「やっぱり、そう思う？私ね、カミュと同じ12歳よ」

12歳?!

それにしても、出るところが出ていし、大人っぽく感じる。身長だってカミュ王子より高いのではないだろうか。女の子の方が早く成長するとは言いが、それにしても差が大きい。

「魔力が強いと成長がゆっくりになるのだけれど、そうでなければ翼族は成長が早い。私はね、生まれる前はカミュの婚約者だったわ。でも生まれてすぐ、魔力が弱い事が分かって婚約を解消されたの。生きる長さが違うから仕方がない事なのだけどね」

ローザ様は少しさびしそうに笑った。もしかしたら、婚約者だったカミュ王子の事が好きなのかもしれない。

「私は年を取りたくないわ。年を取るという事は、できそこないという事だもの。だから美容にいいとされるものは色々試したわ。けれどどうしても時は止められないの。ねえ、賢者様。どうしたらヒトは年を取らずにいられるのかしら」

ローザ様の緑の瞳に少しだけ狂気のようなものが混ざった気がした。

公爵家の令嬢というものはきっと大変なのだろう。色々な期待を背負っているに違いない。そしてローザ様はそれに答えようと頑張っていて、頑張りすぎているように思う。プライドの高い貴族が、自分をできそこないと言うのは、どれだけつらい事なのか。

しかし私は、年を取らない方法など知らなかった。

「それは……無理です」

「どうしても?」

「……ヒトの時が止まるのは、死んだ時だけだと思います」

前世でも、不老不死は夢物語だった。老化しないという事は死であり、死なないという事は老化していくという事。両立など無理だ。

こんな答えでは賢者失格と言われてしまうだろうか。ローザ様を見ればくすくす笑っていた。笑っている彼女は先ほどよりもすがすがしいような表情をしているように見える。

「そうね。……本当にその通りだね。ありがとう賢者様。そろそろ、カミュに会いに行くわね。きっと私の事を待っていてくれるから」

「はい」

笑うローザ様はとても可愛く見えた。魔力が低いだけで、婚約を破棄するなんてもつたいたい事をするものだ。私が男なら、彼女を好きになったかもしれない。それぐらい一途で、可愛らしかった。

「さようなら、オクトちゃん」

そう言っつてローザ様は私が監禁されていた部屋の方へ歩いて行っ  
た。

その後、私が吸血夫人に関わる事はなかった。

## 12話 ものぐさな混ぜモノ

私の人生2度目の拉致監禁後、アーチエロ伯爵は王家に爵位を返還した。元々アーチエロ伯爵は、結婚で伯爵家に嫁いだのであつて、伯爵家の人間ではなかったそうさ。また彼女と亡くなった夫の間に子供はおらず、他に継げる人もいない。結果、アーチエロ家は表舞台から消えた。

「エストの事は安心しろよ。俺の家で預かりになったから。それとこれは、エストから預かった手紙」

「うん」

アーチエロ伯爵は結局、人身販売の仲介者だった。エストの薬はかなり貴重なものだったそうで、それを買う為に犯罪に手を染めたそうさ。

そんな説明をわざわざしに、ライとカミュ王子は家まで来てくれた。エストの事は気になっていたのでありがたいが、正直もう関わりたくはない。

風のうわさで、吸血夫人が捕まったらしい事はきいていた。らしいというのは、大々的に吸血夫人が捕まった事は発表されなかったからだ。しかし新聞には吸血夫人の記事は伯爵が捕まって以来一度もでていない。カミュ王子が簡単に手を出せず、王家が内々に処理。そしてアスタが最初のお茶会にはついてきた理由。色々考えると、私の中で見なかったふりが一番楽だという結論になった。カミュ王子も知られたくはないだろう。

「そっけないな。もっと喜ぶとか驚くとかないのかよ」

「これでも喜んでる」

悪いが、『うわー、凄い嬉しい。ありがとう、ライお兄ちゃん？』なんてできるバイタリティーは私にはない。そんなに無邪気で愛想

が良ければ、もっと周りから可愛がられ、楽に生きれる気がする。もちろん混ぜモノというハンデがあるので、あくまで予想だが。

「オクトさんはあんまり笑わないんだね」

私は答えに困って、首をかしげた。笑えと言われれば、愛想笑い位はできる。ただ楽しくもないのに、普段からニコニコはしない。そう考えると、あまり笑わない方だろうか。

「というか、この状態は笑えないから」

私は椅子の上に乗し、一生懸命お茶を注いでいた。はっきり言って5歳児の腕力では、手がプルプルする。その為集中力を欠くわけにいかないのだ。この状況で笑えるはずがない。

何とか入れ終わると、2人は紅茶を自分の方へ持って行った。マナーもへったくれもないが、私では運ぶのに時間がかかり過ぎる。

「オクトって、まだ5歳なんだろ。一体どこでこういう事覚えたわけ？」

「ああ。それは僕も気になっていたんだよね」

「えーあー……ママに聞いたみたいなの？」

この技術も、ばつちり前世記憶だ。

日本は緑茶文化だったが、幸い前世の持ち主は紅茶にはまっていたらしく、入れ方だけは覚えていた。今入れた紅茶の種類は記憶にあてはまるものがなかったので、異世界にはないのかもしれないけれど。

「ママ？ああ。そう言えば亡くなったって言っていたな」

「何の種族だったんだい？」

「獣人族と精霊族」

「「精霊族?!」」

えっ？

余計な事を言わないよう、ボソリと答えれば2人の声はもった。

たしかどちらの種族も数が多いはずだけれど……。叫ばれるなんて精霊族は、何か不味いのだろうか？

「なるほどね。だったら、不思議な知識を持っていても納得がいくかな」

「まさかこんな近くに精霊族がいるなんてな」

変な納得のされ方をして、私の方が逆に混乱する。精霊族だとうして不思議な知識を持っていてもおかしくないのか。

「えっと。……精霊族って、どんな種族？」

そう言えば私は自分につながる種族について何も知らない。アスタに聞けば教えてくれそうな気はするが、日常生活であえて聞かなければならない場面などなかった。

「精霊族というのは、肉体がなく、魔力の塊でできている一族の事を指すんだよ。高位になれば魔力の低いヒトの目でも見る事ができるけれど、そういう奴らは大抵、神に仕えているから一般人は会う事はないな」

「あつ。アスタ、お帰り」

振り返れば、アスタがいた。今日も仕事だったはずだが、どうしたのだろう。時計を見れば、まだ15時もまわっていない。いつもならば、絶対帰ってこない時間だ。

「ただいま。どうも家に害虫がわいている気がして、早退したんだ」

「害虫って俺らの事？！ 師匠ひどい。いたたっ！！ やめ、止めて。頭がトマトになるっ！！」

アスタはガシツと片手でライの頭を掴むと力を入れたようだ。とてもいい笑顔なので、それほど力を入れている様には見えないが、ライの痛がり方は尋常ではない。

「あー……、もしかして家に入れない方が良かった？」

相手が王子なので迎え入れたのだったが、私は家主ではない。勝手に入れるのは、少し早まったかもしれない。

「アポなしに勝手に来たコイツらが悪いんだから、オクトは気にす

る事ないよ」

……そうだろうか？というか王子とその乳兄弟の扱いがこんなに雑で良いのか？

アスタはライを解放すると私の頭を撫ぜた。頭をトマトにするほどの力があるとは思えないほど優しい動きだ。

「アスタリスク魔術師。僕は子供をあまり一人にしておくべきではないと思うんだけどね」

「公園デビューはオクトがもう少し大きくなってから考えるつもりだし、ヒトの教育方針に口を出さないでほしいな。オクトはどう？外へ遊びに行きたい？」

私はぶんぶんと首を横に振った。外出するたびにろくな目に会っていないのだ。絶対嫌である。できる事なら、買物も行かず引きこもっていたいくらいだ。ネットショッピングのないこの世界が恨めしい。

「というわけだから、お前ら帰れ。まだ事件の処理も終わっていないんだろ」

「事件って何のことかな？」

「処理も何も、俺らは別に何の事件にも関わってないけど？たまたま偶然、オクトが拉致監禁したところに居合わせただけで」

へ？

事件といえば、吸血夫人の事に決まっている。彼らは何を言っているのだろう？

「うん。ライの言う通り、僕が関わらなければならぬ大きな事件なんて、最近は何も起きていないよ」

一テンポ置いて、私は彼らが事件の真相をもみ消したのではなく、最初から吸血夫人自体いなかった事にしたのだと気がついた。想像以上の対応に絶句する。

「ああ。もしも僕の従姉殿が自殺した件を言っているなら、もう終わったよ。あまり名誉な事ではないから、密葬だったんだ」



にっこり笑うカミュの笑顔は問答無用な雰囲気があった。

自殺か……。

全てがなかった事にされてしまうのは、罪を問われることとどちらがづらいのだろう。普通なら罪を問われたくないと思うはずだけれど……彼女はとうだったのだろう。考えると少し胸が痛んだ。

「そう」

それでも私には何もできる事はない。ただ国の決定に従うだけだ。小さく了承した事を伝えたと、アスタがわしわしと私の髪の毛をかき混ぜた。

アスタは驚いた様子もないので、初めからこの事を知っていたのかも知れない。だとすればあえて、私に事の顛末が分かるようにしてくれたのだろう。

「……そう言えば、師匠ってどういう事？アスタはライの師匠なの？」

慰められてるのが、どうにも甘やかされているような気がして、私は話題を変えた。不幸になった人の事を考えれば、私は悲しむべきではない。ましてや、アスタに心配をかけるなんてもつての外だ。

「正確にいうと、俺はライとカミュ王子の元家庭教師なんだよ。研究するために王宮に上がったのにな」

家庭教師？！

アスタは不本意そうだが、それってかなり凄いのではないだろうか。王子の家庭教師って、なりたくても中々なれるものではない。

「アスタリスク魔術師は今年で82歳になる、知識も経験も豊富な魔術師だからね」

へー……えっ？！

「82?!」

嘘っ。誰が？アスタが？

指をさすと、アスタは頷いた。

「そう言えば教えてなかったっけ。魔族は魔力が強い一族だから、老化がゆっくりになるんだよ」

まさかアスタが高齢者だとは。というか、だったらその父や母は、何歳？！

開いた口がふさがらないとはまさにこの事だ。そりゃそれだけ年を取っていれば、今年学校を卒業するような息子がいたっておかしくない。むしろ遅いぐらいだ。執事に段差を気を付けるように言われたのも年齢を考えれば理解できる。

「実力はこの国で、1、2を争うほどだしな。それと師匠。俺はまだ弟子を止めたつもりはないんだけど」

「そうだね。僕も右に同じかな」

そんな凄い人物だったとは。ヒトは見た目ではない。

しかしアスタは面倒そうな顔をした。

「俺は弟子は取らない主義なんだよ。学校に良い教師がいるだろ。そっちに教えてもらえ」

学校……あつ。

ふとアスタの実家で考えた事を思い出した。そうだ、まだ伝えてい。

私はエストの手紙に目を落とす。もしもエストの薬がもつと安価にする事ができたら、アーチェロ伯爵は今もエストと一緒に暮らしていただろう。知識があれば、ローザ様の悩みに、もっとちゃんと答えられたはずだ。

……エストの言う混ぜモノさんではないが、無知はなんて面倒なのだろう。私が本当に賢者だったら、後悔なんてしなかっただろうか。

「……アスタ」

「どうした？」

なんとなくアスタには全てを見透かされている気がした。下手したら、私の行動はアスタの思うがままかもしれない。引き取った時に研究を手伝えとか言っていたし、何たって82歳。勝てる気がしない。それでも、これは私が考え選んだ精一杯の答えだ。

「魔術師の学校に通いたい」

後悔しない為に、私は本当の賢者になろう。そう心に誓った。

### 13 - 1話 大変な入学準備

龍玉大陸は『緑、青、黄、赤、白、金、黒』の7つの大地からできていた。それぞれ治める龍神が違い、私が住んでいる国は、緑の大地に属する。

またこの世界にある魔法は『樹、水、風、火、地、光、闇』の7属性に分かれ、大地ごとに使いやすい魔法も違う。ちなみに緑の大地では樹が使いやすくとされる。

「魔法を使うのに場所まで関係するなんて……」

なんて面倒な。

魔法学校へ入学を決意してから2年の月日がたった。5歳児だった私も7歳になったわけだが、いまだに学校には通えておらず、アスタの家で日々勉強をしている。5歳の時よりは一応進歩はしており、今では龍玉語をすらすら読んで書けるまでになった。

家庭教師なんかやってられないぜ的だったアスタだが、さすがに娘の勉強をみるのは親の仕事と思っただのか休みの日は色々教えてくれている。ただし魔法に関してはいまだに理論を出ず、実技には程遠いのだけれど。正直魔法を舐めていた。覚える事が多すぎる。

前世でやったゲームなどでは、火より水の方が強いとかその程度の内容を覚え、ボタンひとつで済むのに、実際は違った。当たり前前といえば、当たり前前だ。

まず魔法を使うには魔力又は魔素というものを使う。人体で生み出しているものを魔力、大気中にあるものを魔素と呼ぶだけで大して変わらないように思うが、これが結構違う。ヒトは生まれながらに属性というものがあり、魔力はその属性を帯びている。例えば樹属性のヒトならば、自分の魔力で樹の魔法が使えるが、その他の転

移魔法などは使えない。もしも使いたい場合は、一度魔力から属性を消し去るという作業をして、さらに転移魔法用に加工する事で、初めて使えるのだ。

魔素を使う場合はあらかじめ必要なものを選び使う事となるが、場所によってその量は変わり、これまたややこしい計算が必要となる。

他にも色々覚える事があり、勉強すればするほど、正直マスターできる気がしない。魔法学校に通いたいなんて少し早まったかもしれない。

「そもそも魔法学校って何歳から？」

この国にあるウイング魔法学校は、入学前に試験がある。今まで勉強らしい勉強をしてこなかったので、慌てて基礎知識を積み上げている最中なのだが、最近何歳で入学するのが普通なんだろうという事に気がついた。少し気がつくのが遅いかもれないが、アスタがまったたくその事に触れなかったのだから仕方がない。

日本の学校を想像すれば、6歳くらい？と思うが、この国には小学校がない。また学校に行くようなヒトは家が裕福で幼い時から家庭教師を付けていたりする事が多い。そう考えるともう少し年齢が上がってからかもしれない。

「確かライ達が12歳の時にはもう通っていたような……」

「僕たちは11歳に入学したかな。特に年齢制限は引いていないはずで、知識と最低ラインの魔力があれば入学は可能だよ。ほら、魔力の度合いとか種族によって成長具合が違うからね」

振り返れば、王子様。

……ない。普通はない光景だ。ここが王宮なら分かるが、ここは王宮勤めのヒトが借りている宿舎で、しかも王宮の外に設置された場所である。ほいほい王子様が出てきていい場所ではない。いくら元家庭教師の家でもだ。

彼らと出会ってしばらくして、ようやくその事実気がついた。しかしその事を認識しても勝手に来るものを追い払うわけにもいかず、結局は迎え入れるしかない。王子の意見を一般ピープルが覆せるはずもないのだ。

「カミュ王子、それにライ。学校は？」

「午後から休みなんだよ」

「そう」

私は心の中でため息をつきながらお茶を入れる為立ち上がった。

何が休みだ。大方、テストさえちゃんと点数が取れば問題ない科目をさぼったのだろう。魔法学校はその名の通り、魔法科目に重点を置いている。基本科目である国語、数学、魔法、社会のうち、魔法だけが唯一出席日数が足りないと言年するが、その他の科目はテストの点さえ取れば進級できるのだ。というものは生徒は、家庭教師などを付けて勉強しているお坊ちゃん、お嬢ちゃんが多く、すでに勉強済だったりするのだ。同じ授業料ならば、出席した方が得なのになあと思うが、そんなもの貴族は知った事ではないだろう。先生も大変だ。

「オクトさん、今日のケーキは何？」

「……エッグタルト」

何でも当たり前のようにおやつを要求しているんだろう。王子様だからですね、分かります。

小さな無言はなけなしの反抗心だが、週の半分は入り浸る彼らの為におやつを用意するのは日常となっており、食べてくれないと逆に余って対応に困る。食べきれなければ、近所におっそわけすればいいのかもしれないが、以前両隣にプレゼントをした後、大量の花束や良く分からない詩集などの贈り物が家の前に積まれた。あれはかなりの恐怖体験だ。何処の笠地蔵だよ。

両隣にどんな人物が住んでいるのかいまだに知らないが、正直関

わりたくない。うん。人生楽に生きる為には、引きこもるに限る。

コンロでお湯を沸かし、冷蔵庫からタルトを取り出す。何気にこの部屋は最新調理システムになっている気がする。この国で1、2を争う魔術師だけあって、アスタはこんなのが欲しいと頼むと、簡単に作ってくれた。娘の我儘を必ず聞いてくれるなんて、何とも甘いお父さんだ。

「オクトさん、それ何？」

「まな板」

「いや。魔方陣が書いてあるだろ、ソレ」

「魔方陣とは違う。切り分けやすいようにメモリが書いてあるだけ。というか、座って待っていいよ」

タルトを切り分けていると、後ろからカミュ王子達が覗き込んだ。丸い形の中々切るのが難しいのだ。そこで事前にケーキ用のまな板を作り、そこに切り分ける線を書いてしまう事にした。決して魔方陣で美味くなる魔法をかけようとかセコイ事は考えていない。

「というか、ドーピングっぽくて、ソレちょっとどうよって感じだし。」

「じゃあ、先にカップだけ持っていくな」

「どうも」

定期的に入り浸るようになった彼らは、一応お客という立場だが、お茶を運ぶのを手伝ってくれる。5歳の時は腕力のなさに苦戦していた為だが、今はもう習慣のようなものだ。

今もケーキを皿に盛ると、カミュ王子がテーブルまで運んでくれる。彼らにこんなことをさせていると知れたら、偉い人たちがひっくり返るかもしれない。今後も外で会う事などほぼ皆無の予定だが、一応外でフレンドリーにしないよう、気を付けた方がいいだろう。今も敬語で話したりもしていないし。

沸いたお湯をポットに入れ運ぶと、テーブルがセッティングされ

ていた。運ぶ時間も計算に入れてて紅茶を注ぐと、ふわりといい香りが漂う。完璧だ。

「そういえば、オクトさんはいつごろ入学するつもりなの？」

「早い方がいいぞ」

「そういうものなのか？」

ライ達が11歳で入学したなら、私はまだ4年は学校に通う必要はない。ただ、ライ達の入学したタイミングが早いのか、遅いのかも正直分らないのだ。

アスタは今のところ入学試験を受けるとか言わないので、ゆつくりと構えていた。でもアスタは20代に見える、若づくりな高齢者だ。時間の流れがヒトと違って、のんびりしている可能性もある。

「普通、どれぐらいで入学するの？」

「10歳前後が多いか？でもカザルス魔術師が8歳で入学して7年で卒業したのは有名だぞ」

「へえ」

それはかなり凄い。魔法学校はおおよそ10〜12年通う学校だ。6年間基礎魔法を勉強し、その後細分化された学問を勉強をする。私が勉強したい魔法薬学専攻は6年だが、選んだ専攻によつては4年で卒業だ。カザルスがどの専攻を選んだのかは知らないが、飛び級制度を使った事は間違いない。

「その後は祖国である、ホンニ帝国で働いているそうだよ」

つまりはエリートコースまっしぐらという事か。

私の人生計画は、山奥でひっそり薬剤師をやる予定だ。なのでそういう華々しい学歴はいらない。しかし入学が遅くなれば、必然的に働けるようになるのも遅くなるという事で……。確かに入学は早い方がいいだろう。

タルトにホークをつきたてながら、私はどうするか思索した。



「アスタ、そろそろ魔法学校の入試を受けようと思うんだけど」

「まだ早いんじゃないか？」

……ですよねえ。

アスタと夕食を食べながら、今日思った事を切り出してみたが一蹴された。

国語と数学だけならちよつと自信があるのだけれど、魔法と社会は明らかに最低ラインをひた走っている。まだ社会はこれから本を読み続ければレベルアップできる見込みがあるが、魔法がヤバい。

アスタのような最高レベルの魔法使いに家庭教師をしてもらっているのに、何だこの伸び率の悪さはみたいな状況だ。アホの子ですみません。

「なら、そろそろ入試対策にのつとつた勉強をするべきだと思うんだ。読み書きは問題なくなつたわけだし」

「入試に合わせた勉強なんてしても、今後意味をなさないよ。ちゃんと基礎を積み上げるべきだと俺は思うけど？」

うっ。これまた正論だ。

過去問とかをやれば結構出題される場所は分かると思う。しかし悲しいかな。それは一時しのぎにすぎない事もまた事実だ。社会は卒業後に使わなさそうだし問題ないが、魔法は違う。

少なくとも私は、転移魔法をマスターしたいと思っているのだ。

その他、火を付ける魔法　できれば強火や弱火など火力調節できるとなおい　や、保冷魔法、水を召喚する魔法、植物の成長を促す魔法など、自給自足する時に楽になる魔法も覚えたい。また薬草を年中楽に栽培する事になると考えれば、日照時間を誤魔化す、

光魔法や闇魔法もあると便利だろうし……と考えると、かなりオー  
ルマイティーに魔法が使えるようになる必要があった。

どれもこれも些細なものだが、属性がバラバラな事を考えると、  
真面目に勉強する必要がある。大がかりな攻撃魔法とか、空を飛び  
たいとかそんな夢のある魔法からは程遠い次元なのに、何でこんな  
に難しいのだろう。

「確かにその通りだけど、私は魔法薬学を学びたいから、12年は  
通うことになる。20歳ぐらいで独り立ちすると考えると、来年に  
は入学しないといけないと思うんだ」

「20で独り立ちっ?!」

……おや?

アスタが衝撃的な顔をしている。成人って、20歳ぐらいじゃな  
いの? ああ、でも種族によっては成長スピードが違うからそれぞれ  
違うのかもしれない。特に魔族は遅そうだ。

「人族だとそれぐらいで成人だと聞いていたけれど」

「それは魔力が少ない人族の話だろ。オクトは20歳になっても、  
まだこんなに小さいよ」

「いや、それ。今の私より小さいから」

アスタはテーブルより下に手を下げたが、悪いがすでにテーブル  
よりは頭が上だ。2年前ならそうだったかも知れないが、私だって  
成長する。

「それに今のところ人族とさほど私の成長は変わらないように思う。  
ならば20歳で独立するのが妥当じゃないかと」

「でもオクトは魔力が高いし、必ず途中で成長スピードが落ちるよ。  
20なんて早いつて」

「魔力……高いの?」

それは初耳だ。

私のつぶやきにアスタはしまったというような、苦虫を噛んだよ

うな顔をしている。言うつもりはなかったのだろう。アスタにしては珍しい。20歳で独立って、そんなに焦るほど早いのだろうか？

「あ……事前に言っておくけれど、魔力が高いから、優秀な魔術師というわけじゃないから」

「うん。それは分かっている」

いくら魔力が強くて、色々ごり押しできたとしても、正確に理論を理解していなければ、応用は使えない。軍に入って、攻撃魔法を使うだけというならばそれでも構わないだろうが、私の将来設計に攻撃魔法はいらわないのだ。

「オクトに流れている血は、エルフ族、人族、精霊族、獣人族の4つだろ。この中で魔力が強い種族はエルフ族と精霊族。特に精霊族は魔力の塊みたいなものなんだ。それとは逆に魔力が低い種族は獣人族。彼らは魔力が低い代わりに、優れた聴覚や視覚、腕力や脚力などを持っている」

「つまり獣人族の特徴が全く出ていないから、他の種族の特徴が出ているという事？」

腕力、脚力のなさは、常々不便に思ってきた。年相応だから仕方がないと割り切っても、もう少し筋肉が欲しいと今も思っている。また聴力や視力などの5感も並みぐらいで、アスタとそんなに変わらない様に思う。獣人らしい能力には全く恵まれていない。

「そう。あと、これは練習しなければ見えないのだけれど、オクトの周りには低位の精霊がよく集まっているんだ。魔力が強くて垂れ流し状態だとそういう事が起こるんだよ」

「えっ、いるの？精霊?!」

きよるきよる見渡すが、やはり見えない。練習が必要と言ったが、どうやって見るのだろう。でも見えたら見えたで、アレか。普通見えないものが見えるという事は、精神科を勧められそうなのがする。混ぜモノってだけで嫌われているのに、精神も疑われるのはちよっ

と嫌だ。

「精霊族は、高位と呼ばれる者以外は魔力で作ったレンズを目に貼り付ける事で、始めて見えるんだ。数は多い種族だよ」

「へえ」

つまり魔法使い又は魔術師にしか見えないという事か。……ん？  
だとしたら、魔力の少ない獣人と精霊が結婚するってどういう状況だ？自分の祖父母のどちらかは高位と呼ばれる精霊だったとか？でも高位は龍神の近くに住んでいるとかって前に聞いたような。でもってその龍神はめつたにヒトには会わないわけで。確か会う事ができるのは……。

- - 何だか自分の家系図を遡ると複雑そうだ。

母親がすでに他界している状況なので、実際遡る事は難しいだろう。けどそもそも、考えない方が身の為な気がする。面倒事には、関わらない。フラグはへし折るに限る。

「えっと、それは難しいの？」

2年前、少し失敗ぎみではあったが既に転移魔法を使っていたカミュ王子達は、まだ精霊を見た事はないと言っていた。レンズを作る魔法は転移魔法よりも難しいのだろうか。もしくはあまり実用性がないから勉強をしていなかったのかもしれないけれど。

「魔法を使う事に慣れていないと難しいかな。オクトは精霊が見たいの？」

何だか今にも見せてくれそうな言い回しだが、見たいかと言われると疑問だ。自分の周りに結構いるという事は、目に見えてしまうとかかなり鬱陶しいのではないだろうか。四六時中誰かに見られていると思うとぞつとする。

私は色々考えた結果、首を横に振った。

「いや。別にいい。聞いてみただけ」

「そう？見たくなくなったら言ってくれれば、いつでも見せてあげるよ」

スープを飲みながら、アスタはこともなげに言った。こういう時、やっぱり凄い魔法使いなんだと思う。

「あー……見せて欲しいというよりは、できれば私も魔法を使ってみたいというか……」

アスタが教えないという事は、まだ私には無理なのだろう。アスタはいつも何事も基本が大切といい、勉強を教えてくれる。それは私も十分理解している。基礎ができていないのに魔法を使いたいというのは、足し算、引き算ができないのに、二次関数の問題を解こうというようなものだろう。

でも理論だけ学んでいると、どうにも進歩したように思えないのだ。本は読めるようになったし、手紙も苦もなく書けるようになったから全く進歩していないわけではない。それでも魔法分野は進歩が感じられず、本当に魔術師になれるのか不安だった。

「でも無理なら、別にいい……」

「オクトはどんな魔法が使いたいんだい？」

アスタは無理だと一蹴しなかった。食事の手を止め、ジッと私を見つめる。きつとただ使いたいでは、アスタは納得しないだろう。

覚えたい魔法はいくつかあるが、今のところアスタのおかげでキッチン関係では今すぐ必要なものはない。転移魔法も、出かける場所が近場なので必要性は低い。それにあまり移動を魔法に頼り過ぎると、今度は運動不足で体力がなくなりそうだ。

「えっと……扇風機みたいなものとか？」

「は？」

「えっと。これから暑くなってくるから、部屋の中で小さな風を起こせるといいなと」

今はまだ温かいぐらいだが、これからどんどん暑くなってくる。

海が近い所為か湿度が高く、おかげで去年は夏バテをしかけた。冷

蔵庫の原理で部屋の中を冷やすのもいいかもしれないが、体の事を考えると、まずは扇風機だ。もしくは水魔法で除湿か。でもあまり乾燥すると、喉を痛めそうだしなあ。

「ぷっ……あははははは。オクト、風を起こすだけでいいわけ？もつと派手なのじゃなくて？」

「派手？」

何故か大笑いしているアスタを私は睨んだ。絶対馬鹿にしているだろ。ヒトが折角真面目に考えたというのに。

「悪い、悪い。馬鹿にしているんじゃないって。ちよつと想像と違っただけで。風を起こすなら、竜巻を起こしたいとか、空を飛びたいとか色々あるだろ」

「……竜巻を起こして、どうするの？それに空を飛んで買い物に行く利便性が見えない」

むしろその発想の方が私には謎だ。

首をかしげると、アスタは耐えきれないとばかりに爆笑した。やっぱり馬鹿にしているんじゃないだろうか。

ひとしきり笑い終えたアスタは目にたまった涙を拭くにつこり笑った。

「じゃあ明日、実践をやってみようか」

「オクトお嬢様ああああ!!」

「ぎゃうっ」

走ってきた犬耳メイドに吹っ飛ばされるような勢いで抱きつかれて、私は危うく昇天しかけた。

「おかえりなさいませ。中々こちらへ来て下さらなくて寂しかったですうう」

「やめっ……内臓出る」

ぎゅうぎゅうと獣人族の力で抱きしめられると、私のやわな筋肉でははじき返す事も出来ない。

「ペルーラ。今日は魔法の練習に来たんだから離しなさい」

「ああ。旦那さま。おかえりなさいませっ!!」

ペルーラはパツと私を離すと、頭を下げた。……どうにも伯爵邸とは雰囲気が違うよなあ。

今日は魔法の実践練習の為に、アスタの本当の家である子爵邸へ来ていた。本当の家の割には宿舎で過ごす日の方が多く、近場にある割に私もそれほど来た事はない。

では何故今回子爵邸へ来たのかといえば、屋敷の中に魔法を遮断する練習室が作ってあるからだ。どうやらアスタの息子が昔使っていたらしい。失敗しても大丈夫な安全設計だ。

「ペルーラ、俺とオクトの荷物を先に部屋まで持って行ってくれないかな?」

「承知しました!」

ペルーラは荷物を持つと、脱兎のごとく走っていった。……結構重いはずなのに、流石獣人。

「オクト、大丈夫?」

ペタリと地面に座り込んでいた私は、アスタの手を取って立ち上がった。

「段々ペルーラの力が強くなってる気がする」

「ペルーラはオクトが大好きだからね」

まあ、懐かれている自覚はある。

子爵邸は、アスタがほとんど帰らない事もあり、使用人は最小人数しかない。そんな使用人達は伯爵家ほど洗礼されていないというか若干無法地帯よりだが、仕事は伯爵家よりずっと早かった。後は客が来た時だけはビシツとするので、なんとか外面がいい面々だ。

その中でもひとときわ問題児……いやいや、元気がいいのがペルーラだ。初めて会ったの時は、村から奉公に出てきたばかりで食が細くなっていたらしくフラフラだった。貧血症状が出ていたので、レバーを食事に取り入れさせたり、ほうれん草を食べる時は動物性たんぱく質と一緒にしたり、紅茶を食事中に飲まないようにと食事改善するうちに、あら不思議。何故か懐かれたというわけだ。今ではすっかり元気というか、私よりも元気だ。

「さあ、練習室に行こうか」

私はコクリと頷いた。

アスタの休日をわざわざ一日貰ってしまったのだ。きっちり学べる事は学んでしまわなければ。それに初歩さえ学んでしまえば、今後自分で自習練もできるし。

「しばらくは1人で練習は駄目だからね。もししたら、実技練習止めて、また理論から勉強してもうから」

「……はい」

見抜かれていたか。私はそれほど要領が良くないので、練習が中々できないと、取得までにどれぐらい時間がかかるのだろう。

「それとできるようになって、俺が使っていていいと許可するまでは、絶対使うなよ」



私は素直に頷いた。魔法に関してはアスタに逆らってもいい事はない。千里の道も一歩から。昨日まで実技は全くできなかったのだから、制限が色々あっても大きな進歩だ。

アスタが案内してくれた場所は、玄関から入って、ずっと奥に位置する部屋だった。というか。

「体積がおかしいような」

周りから見た光景と、内面積がイコールにならない。今居る位置からすると、ここは壁だ。

「魔法で空間を広げてるからね。ここは龍玉とある意味切り離された場所になるかな。だから、魔法の練習をしても問題ないんだよ」  
テラチート男め。

魔法を勉強しはじめてから、私はアスタがチート能力の持ち主だという事に気がついた。

例え説明されても、私では凄いという事しか分からないのだ。どんな理論で組み立てられた魔法なのか、考えるのも無駄なぐらいレベルが違う。まあ羨ましがっても仕方がないので、私は中に入る。

部屋の中は体育館のような作りだった。床は板張りになっており、天井が高く、とにかく広い。広い事以外普通の部屋なはずだが、何だか不思議な場所を感じた。何でだ？

少し考えて、窓がないのに明るいかからだと気がついた。

「オクト、魔法の作り方は覚えているかい？」

「えっと、魔法は魔方陣を設計し描く事で発動する」

突然の質問に、私は慌てて本で丸暗記した内容を答えた。ここで間違えたら、やっぱり止めようと言いだしかねないので、答える方は必至だ。流石最高の魔術師というか、魔法に関してアスタは妥協というものを知らない。

それだけ扱いが難しいという事だろうけれど。

「そう。魔方陣を設計しなければいけないのは、魔力を使う内魔法、

魔素を使う外魔法のどちらも同じだったね。今回は魔力バランスの練習も兼ねて、内魔法を練習をしよう」

「はい」

私が返事をする、アスタは何処からともなく、紙とペン、それにコンパスと定規を取り出した。さっきまで持っていなかったので、召喚魔法の類だろう。さりげなく凄い魔法を使っている。

「魔法を使う時に魔方陣は実際に書いてもいいし、思い浮かべるだけでも構わないけれど、どちらも正確でなければいけない。思い浮かべるだけで使うには何度も練習が必要だから、オクトはまず描いて発動させよう」

「はい」

というか、描かなければ絶対無理だ。大抵の魔法使いは、すでに魔方陣の描かれた杖や札などの道具を使って魔法を発動する。それよりも凄い魔術師でさえ、思い浮かべる魔方陣を簡略化する為にそういった道具を使う者の方が多いのだ。

すでに描かれているという事は応用が利かないのが難点だが、それでも道具に頼らざるを得ないぐらいに、魔方陣の設計は難しい。何の道具も使わず様々種類の魔法を使うアスタは、一体どんな頭の中身をしているのか……。天才なんて嫌いだ。

「オクトは、風魔法を使って小さな風を起こしたいんだっただね」

「そう。部屋で使いたいから、そよ風ぐらいがいい」

できたら強弱をつけたり、タイマー機能もつけたいところだが、まずは風を起こす事が先決だ。機能を増やせば増やすほど魔方陣の構築が難しくなるので描くだけで時間がかかってしまう。魔法を使う練習ならば、できるだけ簡易な方がいいはずだ。

「オクトは風属性を持っているから、属性転換は考えなくていいよ。今回みたいに、ただ風を起こすだけならば、円の中に風の幾何学模様を描いて。それができたらもう一回り大きな円を描いて、円と円

の間に規模と場所を記載して。規模は……3ぐらいで、場所は魔法陣の上にしようか」

アスタに言われて、私は床に紙を広げると魔法陣を一生懸命描く。アスタは簡単に言ってくれるが、描くのは結構難しい。一か所でも間違えると、全く意味をなさなくなるのだ。発動しただけならまだいいが、変に発動して大事故になることもあると聞いている。

「アスタ。これでいい？」

15分ほどかけてようやく1枚完成したのをアスタに見せる。

「うん。大丈夫。頑張ったね」

アスタはにこりと笑うと頭を撫ぜた。勉強ができて褒められるのは結構嬉しい。

「ここからは、感覚で覚えてもらうしかないんだけど体の中をめぐっている魔力をこの魔法陣に必要量込める事で発動するんだ」

「えっと、……どうやって？」

体の中をめぐる魔力と言われても、さっぱりだ。手を上げるとか、足を動かせという事ならできるが、魔力を出せと言われても理解し難い。

「魔力を体外にだす事だけなら、一度やってしまえば簡単だよ。オクト、両手を前に出して」

言われた通り手を出すと、その手をアスタが握り返した。

「目を閉じて、俺の手に意識を持ってきて」

良く分からないが、言われるままに目を閉じ、アスタの手を意識する。

アスタの手は私より熱かった。私の方が子供体温なはずなのにおかしいなと思っていると、その熱いものが自分の方へ移動する。熱いものは心臓を通り反対の手へまわると、今度は外へ……アスタの方へ抜けていく。

驚いて目を開ければ、笑顔のアスタとぱちっとな目があつた。

「今のが魔力。どう分かった？」

「……たぶん」

感覚でいえば、興奮して顔が火照るのに良く似ている気がする。それが顔ではなく手になっただけだ。

「じゃあ、魔力を込めてみようか。紙に手を置いて。規模が小さいから、送る魔力はごく少量でいいよ。発動タイミングが掴みにくければ、呪文を唱えるとやりやすいかな」

ドキドキする。

初めての魔法だ。完璧に成功するとは思っていないが、魔法陣は間違っていないので、怪我だけはしないはず。

「我が声に従い、風よ動け」

ポンツ。

小さな爆発音がしたと思うと、紙が粉々になった。風はまったく吹いていない。……あれ？

「失敗だね。魔力の込め過ぎだよ」  
えっ。

ほとんど込めてないんだけどなあ。しかし実際に、必死に魔法陣を描いた紙は粉々になってしまっている。折角綺麗に描いたのに……。

「はい。紙は何枚もあるから、頑張つて」

差し出された何百枚とありそうな紙の束を見て、私は魔法が使えるまでの道のりの長さを思い知った。



## 14 - 1話 難関な入学試験

「我が声に従い、風よ動け」

私の声に従って、魔法陣の中に風が集まり外へ向かって拭き出す。「よしっ」

私は成功に小さくガッツポーズを取った。しかしまだ油断はできない。

「魔方式終了」

風が止んだ魔方阵を覗き込めば、亀裂なども入っていない。完璧だ。

これで成功する平均が10回中4回程度になった。かれこれ半月近く同じ魔法ばかり繰り返し返しているので、そろそろコツも分かってくる。

「オクトお。そろそろ、もっとド派手な魔法を練習しようぜ」

「何故？」

子爵邸まで遊びに来たライの言葉に、私は首を傾げた。必要な魔法を練習しているというのに、何故それを止めてまで派手さにこだわる必要があるのか。

「だって見ても面白くねーしさ。折角だし、攻撃魔法とかにしようぜ」

「いや。面白いとかじゃなくて、必要かどうかだと思っ。今の魔法は、夏場に大活躍間違いないから」

攻撃魔法が必要な事態なんて早々起こらない。むしろそれならば、いつそ逃げた方が双方痛くないし、いいと思う。

真面目に返答したのに、端で壁にもたれながら本を読んでいた力ミュ王子がくすくす笑った。

「オクトさんは、実的なものの方が好きなんだね」

「当然」

使い道が分かる物の方が、断然やる気がする。

それに今日はアスタは仕事でいないので無茶はできない。

やはりというか、練習時間不足で実技が思う様にいかなかった私は、アスタがいない時でも練習できるように頼んだ。最初こそ渋っていたものの、子爵邸である事と、ライとカミュ王子が一緒である事、練習は風魔法のみである事の条件で許可をもらえた。ここで事故でも起こしたら、2度と実技訓練をさせてもらえないんじゃないだろうか。

「お前、7歳だろ夢とかないのかよ」

呆れたようにいうライへ私は冷たい視線を送っておく。勉強をしたい魔法の違いは、感性の違いからくるだけなのに失礼な奴だな。

「……あるけど。私の夢は薬剤師になって薬を売りながら山奥でのんびりと生活。そして普段は自給自足して、できるだけ引きこもる」  
これで将来、王族にも海賊にも会わないで済む。薬だったら買いうちもつくし、もしも混ぜモノの力が暴走したとしても山奥ならば誰の迷惑にもならない。完璧プランだ。

「はあ?!なんだソレ」

「とりあえず、休憩してゆっくり話し合おうか」

何故私の夢をゆっくり話し合う必要があるのか。ただし練習を始めて、結構時間もたっているのも事実なので、私は了解の意味で頷いた。私は練習している立場だからそれほど苦にはならないが、ずっと見ているだけのライは確かに飽きるだろう。

私は端に寄せてあった絨毯を広げると、鞆の中からコップとティポット、それと魔法瓶を取り出す。ちなみに魔法瓶は、前世記憶のものとは違い、本当に魔法がかけられていてお湯がいくらでも出てくる仕組みだ。製作者はもちろん、アスタである。

本当に何でも作れる器用な男だ。魔法学校に通わなければ薬剤師

になれないなんて事がなければ、魔法なんて覚える必要がないぐらいに色々な道具を作ってくれる。……押し入れに住んでいる猫型ロボットの頭をよぎったが、アスタは作っているの、未来で買っている彼よりも優秀だ。

「オクトさんって、凄く愛されているよね」

紅茶を渡すと、カミュ王子がしみみとつぶやいた。主語が抜けた言葉に私は首をかしげたが、ライはうんうんと頷いた。

「師匠は俺らにすげー厳しかったし。そんなもの頼んでも絶対作ってくれなかつたからな」

「まあ甘やかされている自覚はあるけど……」

これで甘やかされてないと思っていたら、かなりの大馬鹿だ。そこまで無神経ではない。ただ愛されていると表現されると、首を傾げたくなる。

「そう。それなのに、アスタリスク魔術師から離れられるの？」

「……たぶん」

それを言われると、少し返答に困る。確かに今の生活は楽過ぎるのだ。

まさか？！

これは私の自立を阻害する、アスタの計画的犯行？いやいやいや。いくらなんでもそれはないだろう。私が自立しなかつたらアスタだつて困るはずだ。いい年になって職業が自宅警備は色々マズイ。考え過ぎだ。

「大体、学校に行くんだろ。何でそれが、山で自給自足になるんだよ」

「薬を売るから、正確には自給自足ではないけど」

一応外貨がないと、いろいろ大変そうだし、納税だつてできない。しかし私の答えがお気に召さなかつたようで、2人は顔を見合わせため息をついた。



「うちの学校、卒業後王宮で働くヒトが多いんだけど」

「私は混ぜモノなんだけど？」

王宮とかない。ありえない。

元々無理だし、働きたいとも思わない。正直、そういった職場は面倒なので、無縁でお願ひします。

「それでいくと、僕は王子なんだけどね」

それはどういう意味だ？

しかし答えを聞くのが怖くて、私は紅茶ごと喉の奥に飲み込む。深く考えてはいけない。こういう時はスルーに限る。

私は鞆の中からドーナツを取り出し2人に配るとかぶりついた。うん。美味しくできている。

「オクトさん……何これ？」

「何って」

2人が固まっているのを見て、私は何がおかしいのか考える。いたって普通のドーナツだ。焼きでも、生でもなく、本家本元……ああ、でも作ったのは初めてか。

「世界を食べるって、凄い発想だな」

……はっ？世界を食べる？

何の事だと少し考えて、ドーナツの形が、この世界の大陸の形に似ている事に気がついた。この世界は混融湖こんゆうこという海のような大きな湖を中心に丸い形をしている。たしかにまんま、ドーナツだ。

「もしかしてどこかのお土産？」

「……名物の試作品みたいな？」

乾物ではないので、お土産には日持ちがしないと思うのだけど。そうは思ったが、私は適当にはぐらかす事にした。どうやらこれは、まだこの世界にはないお菓子だったらしい。

「ああ。アロツロ伯爵のところのね」

「そういう事か。伯爵のおかえ薬剤師になるからあんな夢を言っ

たのか。確かに山奥には間違えないもんな」

何で伯爵？

どうしてアスタのお父さんがこの話に関係するのだろう。私は話が見えなくて眉をひそめた。

「意味が分からない」

「違うの？アロットロ伯爵が売りだした、カラフルな折り紙。あれはオクトさんが発明したって聞いたけど」

……何だその話。聞いていないんだけど。

そういえば昔折り紙を作っている最中に、色つきの紙があればいいのと言ったような気もする。そして次に行った時はそんな紙をくれたような……。

「……売られた」

まあ、別にいいんだけど。

稼いでいるのはアスタだけで、私はただのすねかじり。私の知識を有効活用してくれるならば、それはありがたい事だ。

「その分だと伯爵のおかえ薬剤師になるというのも違いそうだね」

当たり前だ。どうしてそんな発想になるのか。私はコクコクと頭を縦に振った。

「伯爵に迷惑をかけたくない」

「いや、迷惑とは思ってないと思うぞ」

そうだろうか。どう考えても、混ぜモノが近くに居るのはマイナスな気がする。いや、そう考えると、アスタの家でいつまでもすねかじりする事もまた同じだ。できるだけ迷惑はかけたくないんだけどなあ。

「申し訳ないけど……アスタには内緒で、ウイング魔法学校の試験の過去問をもらえない？」

「おおっ！ やつと受ける気になったんだな。よしよし」

「内緒ってどういう事？」

ライが良く決めたと言いなから私の頭をわしわしと撫ぜる。その横でカミュ王子が不思議そうな顔をした。保護者を通さずにと言われたら、普通そういう反応だよな。

「受験を受ける事をアスタが反対しているから」

「何でっ?!」

「たぶん、魔族との時間感覚の違いだと思う。私が20歳ぐらいで独り立ちするプランを伝えたら、早すぎると。それに、勉強の理解力も低いし……」

何故だろう。話すたびに2人がしょっぱいものを見るような顔になる。

やはり2人からしても20歳は早いのだろうか。

「分かった。次来る時は問題集持ってきてやるよ」

「オクトさんは頑張ってアスタリスク魔術師を説得してね」

同情的なまなざしを向けられて、私は困惑したままとりあえず頷いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6788x/>

---

ものぐさな賢者

2011年12月29日07時39分発行